

クレーン・カーリフ・スチャル モビル・スツ全集③
MSS-06 ザ・ブック

双葉社

双葉社 MOOK

GREAT MECHANICS
モビルスーツの
メカニクス



モビルスーツ
全集 ③

MS-06
ザク
BOOK

MS-06

ザクBOOK





008 Introduction

010 ザク カラー設定画&イラストラインアップ

014 ザク小史

018 モビルスーツ ザクの戦場

022 スペックとディテールに見る
ザクシリーズその変遷と歴史

026 ザクI系 各種機体解説

MS-05

030 ザクII系 各種機体解説

MS-06C ザクII MS-06F ザクII MS-06J ザクII

MS-06JC 連戦型ザクII MS-06S シャア専用ザク

MS-06FS ガルマ専用ザク MS-06F-2 ザクII F2型

MS-06FZ ザク改

042 ザクバリエーション系 各種機体解説

MS-06D ザク・デザートタイプ MS-06K ザクキャノン

MS-06M ザク・マリンタイプ MS-06R 高機動型ザク系

MS-06E ザク旅行偵察型 MS-06E-3 ザク・フリッパー

MS-06V ザクタンク MS-06W 作業用ザク

MS-06Z サイコミュ試験型ザク MSN-01 サイコミュ高機動試験型ザク

MS-06F ザクメインレイヤー MS-21 CFドラッグス MS-11 アクト・ザク

064 一年戦争後のザク系 各種機体解説

RMS-109 ハイザック RMS-109CS ハイザック・カスタム

RMS-119 アイザック AMX-011 ザクIII AMX-011S ザクIII改

AMS-119 ギラ・ドーガ AMS-129 ギラ・ズール

074 ヤマザキ軍曹のプラモバカー代 出張版

078 ザクの迷彩

082 史上初モビルスーツ ザクの武装

086 ザク系機体の実力とは?

090 ザクと補給・整備

094 ザク戦闘概論

098 ザクから見るジオン公国軍の戦略・戦術

104 ザク設定資料

126 ザク系スペック一覧









MSL



MS-06J



ザク

宇宙世紀
という世界を

体現する
モビルスーツ

MS・06ザクⅡ。かつては単にザクと呼ばれたこともある機体。

言い古された言葉であるが、『機動戦士ガンダム』が、その当時、他のいわゆるロボットアニメと言われた作品たちとどう違ったのか? という命題の答えのひとつにモビルスーツ・ザクの存在がある事は、異論を待たないだろう。

『機動戦士ガンダム』第1話の物語は、3機のザクがスペース・コロニー、サイド7に潜入する所から始まる。この時点では視聴者はこの機体がモビルスーツどころか、ロボットなのか、宇宙服を着た人間であるかは分らない。

そしてコロニーに入ると、ようやくザクがロボット(モビルスーツ)である事が判明する。ここで功を焦った



新兵であるジーンによって、サイド7と、激入中の地球連邦軍のモビルスーツたちへの攻撃が開始されてしまう。その圧倒的な力は、モビルスーツが極めて強力な兵器である事を如実に表し、続くガンダムの起動と、その力がより効果的に描かれた。

革新的な作品といわれる『機動戦士ガンダム』において、こめカに関し、物語当初の革新性は主人公メカであるガンダムではなく、ザクが担っていたと言っているだろう。それまでのロボットアニメは、ロボットプロセスと揶揄されたように、さながらプロレスラーのような敵ロボットが週替わりで登場し、主人公メカを窮地に陥れた後、敗れ去るといったものだった。しかし、従来までのヒーローロボット

の影をある程度帯びていたガンダムに対して、ザクは演出面で、極力兵器である事、機械である事に注意が払われ続けた。ひとつ目という象徴的なアイコンを持ち、同型の機体が数多く登場したこと、旧型や専用機といったバリエーション機の登場に際しては、元のデザインの前線に際し、統一性があつた。まさに、それは現実の兵器に則したものであると描かれていたのだ。つまり、ザクは物語にリアリティを与える重要なファクターのひとつであつたのだ。

『機動戦士ガンダム』ヒット以後、SFマインドにあふれた物語中で描かれたこうした設定は、出版メディアやファンたちによって、さらに詳細に解析を行うムーブメントが巻き起こった。

架空の世界を描いた物語の世界観を詳細に設定するという、現在ごく当たり前に行われている行為は、ザクが存在から始まったといってもいいだろう。

ザクは、物語中でいえるはやら役だった。しかしの世界ではむしろ逆だったはず、という考えのもと、いつの間にかザクはMS・06ザクⅡという型式番号と名前が与えられ、様々なバリエーションが産み出され、模倣化などを通じて市民権を得ていった。

つまり、ザクというのは、『機動戦士ガンダム』という作品ではなく、その作品世界である『宇宙世紀』の世界を体現する存在といつても過言ではないのだ。そういった意味でも、ザクという機体は、数あるモビルスーツの中でも特別な存在なのである。

つまり、ザクとザクにまつわる様々なことを知る事は、宇宙世紀という世界を知る事と同義、といつて過言ではない。

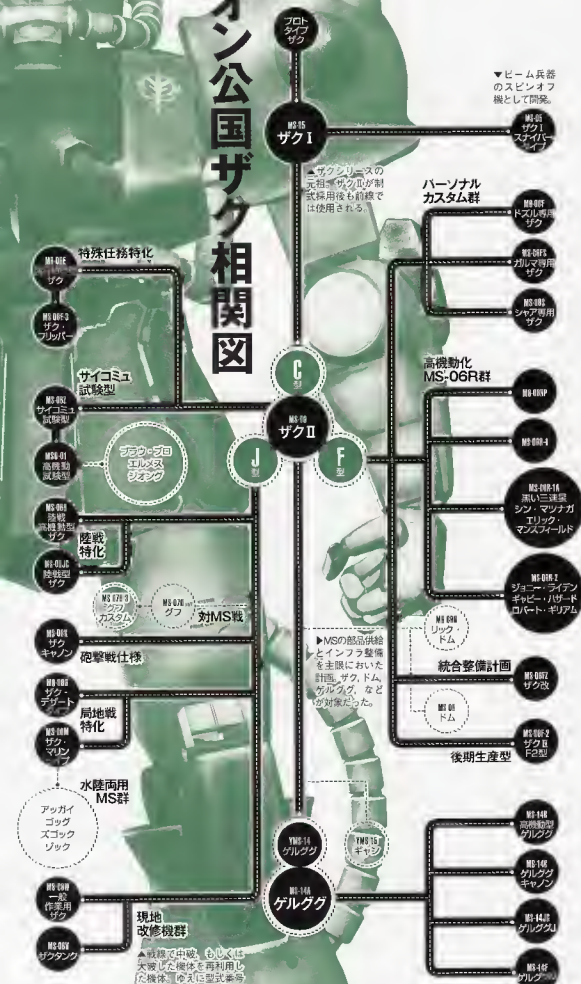
本書は、そうしたMS・06ザクⅡと、ザクの未裔たちを、宇宙世紀という世界観の中にある現実の兵器として捉え、あらゆる角度からその魅力をまとめた

ものである。

現在の「ガンダム・シリーズ」における、作品的な象徴はガンダムである事は揺るぎのない事実である。しかし、

その黎明期においてはザクこそが、作品の象徴であつた事も間違いがないのだ。そんなザクの魅力を、いま一度感じていただければ幸いである。

ジオン公国ザク相関図



MS-06
ザクII

▶ P032



「機動戦士」シリーズから
「ハーモニーオブガンダム」まで



カラー設定画& イラストラインナップ

映像作品をはじめ、関連企画に登場したザクの
カラー設定とイラストを一挙掲載。
本誌で解説があるものは、右下ページアイコンを
参照のこと。

MS-06S
シャア専用ザク

▶ P036



MS-05
ザクI

▶ P028



MS-06K
ザクキャノン (連邦軍カラー)

▶ P046



RMS-106CS
ハイザック・カスタム

▶ P066



RMS-106
ハイザック (連邦軍カラー)

▶ P066



RMS-106
ハイザック (ティターンズカラー)

▶ P066



MS-11
アクトザク (連邦軍カラー)

▶ P063



MS-06M
マリン・ハイザック
(ザク・マリンタイプ)

▶ P048



MS-06V
ザクタンク (連邦軍カラー)

▶ P056

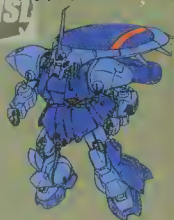


MS-06E
ザク強行偵察型
(連邦軍カラー)

▶ P054



RMS-119
アイザック



RMS-192M
ザク・マリナー



AMX-011S
ザクⅢ改
▶ P068



AMX-011
ザクⅢ
▶ P068



MS-06F-2
ザクF2型
▶ P038



MS-06FZ
ザク改
▶ P040



ホビーハイザック



MS-06D
ディザート・ザク



MS-05
ザクI(重火力機)
▶ P028



MS-06JC
機戦型ザクII
▶ P034



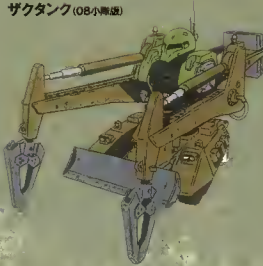
MS-06RD-4
高機動試作型ザク



MS-06F-2
ザクⅡF2型(連邦軍仕様)



MS-06V
ザクタンク(08小隊用)



MS-21C
ドラッツェ
▶ P062



MS-06J

ザクIIホワイトオーガ
(MSイクルー 2)

▶ P034



MS-06J

ザクII (MSイクルー 2)

▶ P034



MS-06

偵察型ザクII (MS IGLOO)

▶ P028



MS-05

ザクI (MS IGLOO)

▶ P028



MS-06R-1A

高機動型ザク
黒い三連星専用機

▶ P050



MS-06ザクII用

試作ロベラントタンク
ユニット

▶ P050



QEX-04M+MS-06M

エーギル+
ザク・マリンタイプ

▶ P050



MS-06R-2

高機動型ザク
ジョニー・ライデン専用機

▶ P052



MS-06R-1

高機動型ザク
マササ・ナカガワ専用機

▶ P050



MS-06R-1A

高機動型ザク
エリック・マンスフィールド専用機

▶ P050



MS-06R-1

高機動型ザク
シン・マツナガ専用機

▶ P050



MS-06F

ザクマインレイヤー

▶ P060



MS-06RP

高機動型ザク
プロトタイプ

▶ P050



MS-06R-2

高機動型ザク
キャビー・ハザード専用機

▶ P052



MS-06R-2

高機動型ザク
ロバート・ギリウム専用機

▶ P052



MS-06K

ザクキャノン

▶ P046



MS-06M

ザク・マリンタイプ

▶ P048



MS-06F

ドスル戦用ザク



MS-06PS

ガルマ専用ザク

▶ P036



MS-06V

ザクタンク
(グリーンマカク)

▶ P056



MS-06W

作業用ザク

▶ P057



MS-06E-3

ザク・ブリッパ

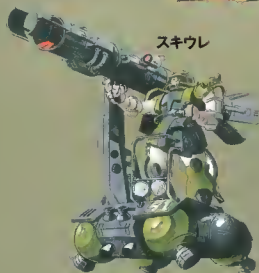
▶ P055



MS-06E

ザク強行偵察型

▶ P054



スキュレ

MSN-01

サイコミュ高機動
試験型ザク

▶ P058



MS-06Z

サイコミュ試験型ザク

▶ P058



MS-06R-3S

高機動型ザク



MS-04

プロトタイプザク



MS-06D

デザート・ザク
(ロンメルカスタム)



MS-05L

ザクI・スナイパータイプ



ミノフスキー粒子の発見により
モビルスーツが登場した!

モビルスーツ。

「存在し」の通り宇宙世紀70年代の後半に突然登場し、その後の兵器という機械の概念を一変させた大型の人間機動兵器の総称である。そしてその記念すべき第一号は、ジオン公国が開発したMS・05ザクと、その発展型であるMS・06ザクⅡである。宇宙世紀0079年に勃発した一年戦争において、戦場の様相を変えてみせる活躍を見せたのはMS・06ザクⅡであるから、モビルスーツの始祖と言えはザクⅡよりも、ザクⅡのことを指すこともある。そして登場には、必然ともいうべき歴史の流れであった。

それは「ミノフスキー熱核反応炉の発明」とそれに伴うミノフスキー粒子の発見である。ミノフスキー粒子とは、宇宙世紀0069年にトレノフ・Y・ミノフスキー博士によって発見されたものである。博士の理論は物理学の常識を根幹から変えるものとして、ミノフスキー物理学という学問の一部を構築することになった。実際にはモビルスーツよりもミノフスキー粒子発見の方が、その歴史的意義は大きなものであるといえる。

ミノフスキー粒子を応用して作られたミノフスキー熱核反応炉は、当時使

用されていた従来型の核融合炉よりも遙かに小さいサイズで、より大きなエネルギーを産み出すことが可能であった。これにより宇宙艦艇の性能は向上し、かつスベースの余裕が生まれたため、より多くの兵器や機材を積み込むことが出来た。

また余裕のあるエネルギーはより強力な兵器(メガ粒子砲)の搭載も可能とした。

そしてその技術は、モビルスーツという新世代の兵器を産み出すバックボーンとなった。それは、ミノフスキー粒子が電波やレーザーなどを無効にする効果も偶然持ち合わせていたからだ。平時においては、これは円滑な社会の実現を阻害するものといえたが、軍事の視点に立つてみると、精密誘導兵器などの使用を困難なものにすることを意味した。つまり、これは従来型の戦略体系が根本から覆されることとなったのだ。これが、モビルスーツという兵器が成立するもうひとつの要件であった。

ミサイルやレーザーなどがともに運用できない状況においては、機動性がきわめて高い兵器による白兵戦こそ

ザク小史

人類初のモビルスーツ・ザク
それはどのように産み出され、
どのように歴史に
名を残したのだろうか。

がもつとも有効であったのだ。

ジオンの切り札としての モビルスーツの登場

モビルスーツの登場は、こうした科学的な発見だけでなく、歴史的要因もまた、大きかった。

ミノフスキー博士がミノフスキー粒子を発見したのは、スベースコロニー群のサイド3であった。サイド3は当時、ジオン・ズム・ダイクンの提唱したサイド国家主義であるコントリズムの終本山であり、宇宙世紀0058年にはジオン自ら独立宣言を行い、実質的な独立国家として機能していた。しかし、人類すべてが宇宙で生活するべきと主張するジオン共和国の存在は、地球連邦政府にとっては自らの政体を否定しかねないものであり、翌0



059年にはサイド3に対し、経済制裁を開始する。

こうした緊張した状況下においては、事態が紛争化する可能性も高く、ジオン共和国の国防を担うジオン国防軍にとっては、圧倒的な戦力差のある地球連邦軍を仮想敵とした場合、武力衝突の結果が惨憺たる結果になることは目に見えていた。

こうした状況においてミノフスキー粒子の発見と、それによる戦略体系の革命的シフトは、ジオン共和国にとって、国家存続に関わる一大プロジェクトであり、積極的に推進された。

新型機動兵器は 人型とは限らなかった！

宇宙世紀0071年、ジオン公国はミノフスキー粒子下における新機動兵器の開発に着手する。この時、ジオン共和国はジオン・ダイクンが逝去、後



継者アギン・ワード・ザビによつて公国制が敷かれて2年が経っていた。

この時点では、ミノフスキー粒子下の戦闘に最適化した機動兵器として求められていたのは、ミノフスキー型核反応炉を搭載することは必須であったものの、必ずしも人型機動兵器であったわけではなかった。

新機動兵器の開発は、公国内の様々な企業に公募され、最終的にジオニツク社のZI・XA3と、M・I・P社のMIP・X1という2機の試作機に絞られた。

両社の新機動兵器に対する考え方は、まったく正反対だった。MIP・X1は宇宙戦闘機の延長線上にあるスタイルで、直線方向に高い機動性をもっていた。後にモビルアーマーとして結実する。一方、ZI・XA3は人型であり、この事は当時驚愕をもつて迎えられたともいわれる。だが、ZI・XA3はコンベアで驚くべき性能を見せて、結果的にMIP・X1に勝利することとなった。宇宙世紀0073年の事であった。

宇宙では不要と思われていた手足は、推進力を使わずに方向転換を可能にするAMBACシステムにより、機動性の飛躍的向上を実現した。つまり、MIP・X1が直線方向の機動性を重視していたに対し、ZI・XA3はより3次元の空間戦闘を意識している

と言える。また同機は、多様な武器を扱うことが可能であり、2本の脚はコロニー内部の戦闘だけでなく、地上での戦闘すら行うことができるものだった。

そしてこの人型兵器はモビルスーツと名付けられ競争に勝利。そして、実戦型の兵器として完成させるための開発がさらに続けられることとなる。

ジオン公国軍では、モビルスーツを制式化するのにさらにもう一回、競争試作を実施している。今度はモビルスーツである事が前提のもので、ZI・XA3を開発したジオニツク社は、ZI・XA3 (MS・01) に熟成を重ねた機体。後の制式機となるMS・05ザクの原型機を提出。今度の試作競争に参加したのはM・I・P社ではなく、ツィマツ社であった。同社はモビルスーツにMIP・X1的な直線方向の空間戦闘能力を付加したEMS・04ザダを提出。結果は性能の数値はEMS・04ザダが上回っていたものの、試験飛行時の空中分解事故と、総合的な汎用性の低さからMS・05ザクが見事制式機の座を勝ち取ることとなった。

決定版ザクⅡの生産開始 そして戦争の道へ……

MS・05ザクの実戦配備型の1号機が完成したのは宇宙世紀0075年の8月の事であった。そして、ほぼ時を

同じくして、モビルスーツ搭載型軽巡洋艦であるムサイ級の就役が始まる。さらに程なくしてこの新兵器の戦術、戦法を研究する教導機動大隊が編制され、新時代の戦いの姿が積極的に研究されることになる。

当時は、ジオン公国はギレン・ザビが主権に住むものこそエリートであると言う「優性人類生存説」を発表する(0071年)。など、地球連邦政府との対立を深めていった頃である。そんな情勢化で、モビルスーツの戦略的な有効性は教導機動大隊により証明されつつあり、ジオン公国はモビルスーツを中心とした戦略大系をつくり、圧倒的な戦力差のある地球連邦軍との本格的な全面戦争を視野に入れることとなる。一方、地球連邦軍もモビルスーツの開発の情報を得ていたが、ミノフスキー粒子の効果とその戦術には疑念的であり、開発投資はほとんど行われていなかった。

こうして、地球圏は徐々に戦争へ向かっていき、ジオン公国のモビルスーツを基礎にした戦術体系の整備はより完成度を増しつつあった。しかし、ここで問題が発生した。来るべき地球連邦軍との全面対決に際して、戦術的にMS・05が若干の性能不足である事が判明したのだ。幸いな事にMS・05ザクの設計は、まだ発展の余地があり、教導機動大隊の運用による結果を踏ま



え、改良型が開発されることになる。
MS・06ザクⅡである。

宇宙世紀0077年8月、MS・06ザクⅡの最初の生産型であるMS・06Aがロールアウト。程なくして生産の主力は改良型であるMS・06Cに移行し、大量生産と乗員の大量養成に着手。地球連邦軍との開戦に向け、着々と準備を進めることになる。

一年戦争の開戦 時代の寵児となったザク

ジオン公国軍が、地球連邦政府に対して宣戦を布告したのは宇宙世紀0079年の1月3日。布告の3秒後、連邦軍パトリール艦隊へ攻撃を行ったほか、サイド1、2、4に侵攻を開始。ジオン公国は毒ガス兵器を使用しサイドの住民を虐殺。翌4日には住人のいなくなったサイド2のコロニーの一つに核バルスエンジンを着せ、地球へ向けて移動を開始させる。連邦軍本部のあるジャブローにコロニーを落下させる「ブリティッシュ作戦」だ。

コロニーは1月10日に地球への落下を開始したが、落下を阻止しようとした連邦艦隊からの砲撃や、地上からの攻撃によりコロニーは損傷しており、落下途中で崩壊。軌道がそれたコロニー前部がオーストラリアのシドニーに落着いた他、アメリカや太平洋へも破片が降りそそぎ、地球環境は激変、多大



な被害をもたらした。この1月3日から10日までの一連の戦いは「一週間戦争」と呼ばれる。この戦いにおいて、ザクはコロニー制圧戦にも威力を発揮した。

ジャブロー破壊に失敗したジオン公国は、今度はサイド5のコロニーを落下させようとする艦隊を差し向ける。一方の連邦軍は三倍以上の戦力で迎戦。サイド5の別名から「ルウム戦役」と呼ばれたこの戦いで、モビルスーツ・ザクは本格的な宇宙における大規模艦隊戦を経験することになる。

このルウム戦役は、コロニー落としには失敗したものの、公国軍の大勝利となった。とりわけモビルスーツの威力は凄まじく、黒い三連星が連邦軍の名将レビル將軍を捕虜にしたこと、シヤア・アズナブルが5隻の艦隊を沈め

たことなど、様々な伝説が産まれることになり、結果的に連邦軍は80%近くの艦隊を失ってしまった。

この一連の戦いにおけるザクの活躍は、モビルスーツという新兵器の有効性を存分に証明した。そして宇宙世紀0079年3月の地球降下作戦において、モビルスーツ・ザクは地上での能力の高さも証明してみせる。

これ以降、地球圏における戦略体系は、長らくモビルスーツ中心で形成されることとなる。

華々しい戦火の影で 汎用の衣を捨てて!?

さて、こうして華々しくデビューしたモビルスーツ・ザク（I&II）だが、問題点が全くないわけではなかった。

ひとつは思ったよりも損耗率が高かった事だった。特に地球降下作戦以降に地球連邦軍はザクの対策法を次第にあみ出しつつあり、モビルスーツの有効性は依然高かったものの、数の不利を完全に覆すまでにはいかなくなり、戦況は膠着状態になってしまった。

もう一つはモビルスーツ・ザクの最大の特徴のひとつである汎用性という恩恵が思ったよりも高くなかった事だ。つまり、より状況に特化させる必要が出てきたのだ。

また、地球連邦軍がモビルスーツを実用化する事も考慮に入れると、対モ

ビルスーツ戦用のモビルスーツ開発も重要な事と言えた。

こうしたことはジオン公国側もあらかじめ想定していたようで、MS・06ザクⅡがロールアウトする8か月前には、はやくも局地戦を考えたモビルスーツの開発に着手していた。

このプロジェクトの要点は主に2つあった。ひとつは従来まで別の兵科が扱ったようなミッションにザクを使用すると言ったものだ。傾斜型であるD型、対空兵器型のK型などがそれにあたる。そしてもう一つは汎用型であるザクを、より局地的な専門型に改良していくものだ。代表的な例としては、高機動型であるR型や、広く見ればF型の地上型であるJ型や、地上用の対モビルスーツ戦機として再設計されたMS・07Gフナなどもそれにあたるだろう。

つまりこれは、ジオン公国が極端にモビルスーツ偏重で戦略体系を整備したと言う事であり、極端な話、ジオンはザクとモビルスーツとを心中するつもりだったと言っているだろう。

一年戦争末期 旧型化したザク

ザクという機体のターニング・ポイントには宇宙世紀0079年10月の地球連邦軍によるモビルスーツの生産開始と言っているだろう。

この地球連邦軍製のRGM-79ジム

⇒2 / 宇宙世紀
インフラに
対応したサイズ



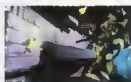
⇒3 / マニピュレーター
による
武器の換装



⇒4 / 戦場を選ばない
汎用性



⇒5 / AMBACによる
高い機動性



ザクから読み解くMSの革新とは!?



は、MS・06ザクよりもはるかに高性能だったからだ。言い換えれば、この時点よりザクは、旧型という烙印を押されることになる。

このRGM-79ジムの対抗馬として、ジオン公国軍は大战末期にMS・14ゲルグを戦場に投入させる。この新型機は後に一年戦争最良機と呼ばれるが、その登場は遅きに失した観があり、生産数も少なく、戦況を左右するには至っていない。

一方で、このMS・14ゲルグや

MS・09ドムといった新型モビルスーツは、ベテラン・パイロットに必ずしも歓迎されたとはいえないようだ。実際、一部の記録に、こうした新型機をルーキー・パイロットへ支給したという記録も残っており、ベテラン・パイロットはザクを選んだという可能性も高い。つまり、これはザクが扱い易い機体であった証明であろう。

また、新型機の開発や生産の遅れもあり、新型機の開発に並行してザクをベースにした機体の開発・生産は一年

戦争終結時まで続けられた。軽量化による性能向上を狙ったF2型、スラストス力を大幅に強化したFZ型などがそれであり、それはすなわちザクはMS・05からMS・06に移行後も、設計的にまだ改良の余地がある機体であったという事だ。さらにザクの設計の優秀さは、一年戦争終結後に、地球連邦軍によってザクをベースとして大改修したRMS-106ハイザックが開発された事でも証明された。

実際に稀な機体であるといえるだろう。人類初のモビルスーツであるのに、その系譜に連なる機体が20年近く使用される程の完成度を誇っていた。

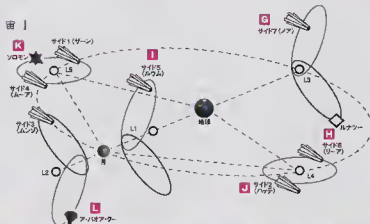
ザクが歴史に名を残した背景には、人類初のモビルスーツとしてばかりでなく、最初のひな形であるMS・01より10年近くに渡り熟成が続けられたがゆえ、完成された機体だったことも大きい。それこそが一年戦争で名機として評価される最大の要因なのかもしれない。



【 地 上 】



【 宇 宙 】



ザクが活躍した戦場

史上初のモビルスーツ、ザクは一年戦争において様々なエリアで活躍した。それはザクの汎用性の高さを物語るものであった。ここでは一年戦争時を中心に、ザクが活躍したエリアを振り返ってみる。



A 北米

U.C.0079.3.11、ジオン軍の第2、3次地球降下作戦が展開。北米大陸を手中に収めることに成功する。ニューヨークにはジオン軍の地球方面軍司令部、ガルマ・ザビが駐留し、ジオン軍の北米における拠点となった。



B ユーラシア (オデッサエリア)

U.C.0079.5.31、ジオン軍の第1次地球降下作戦によって、地上侵襲部隊がオデッサに降下。HLVによって、ザクが地上へと降り立つ。制圧後はジオン軍の重要な補給拠点として、北米に資源を送り続けた。



C ユーラシア (アジアエリア)

第4次降下作戦によって、北米大陸に引き続くジオンの勢力下に置かれる。アジア区域では、ジオンのアジア方面軍と連邦軍初のモビルスーツ部隊、第1機体化混成大隊（コジマ大隊）が激戦を展開した。



D アフリカ

一年戦争時、ジオンの勢力下に置かれる。キンバライト鉱山基地には戦後も基地司令ノイエ・エン・ビッター少将率いるジオン残党が潜み、U.C.0083.10.13に発生したガンダム奪取作戦では、ガンダム試作2号機を宇宙に送り出した。



E 南米

一年戦争時における、数少ない連邦軍の勢力地域。アマゾン川流域に存在する地球連邦軍本拠地ジャブローへの攻撃は、ジオン軍によって何度も行われたがすべて失敗に終わっていた。U.C.0087に戦場上の都合によって消失。



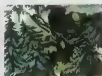
F オーストラリア

一年戦争時は、ジオンのコロニー落としによって、アイランド・イフィッシュの一部が落下した。これにより壊滅的な被害を受ける。U.C.0083には連邦軍のトリントン基地でガンダム奪取事件が発生し、再び戦火に巻き込まれる。



G サイド7

ラグランジュ3で建造中のもっとも新しいエリア。まだコロニーは建設の途中であった。ジオン本国のサイド3とは地球を挟んで対極に位置しており、そのためV作戦の試験場として選ばれた。



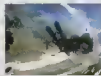
H サイド6

連邦にもジオンにもつかないうちのサイドであり、一年戦争での被害を最小限にとどめる。だが一年戦争末期には連邦軍部隊が駐留し、アレックスの訓練も行われるなど、戦後を見越して連邦軍を強めている。



I サイド5

ルウム戦役の舞台となったエリア。連邦軍の圧倒的に優位な状況を覆ったのが、ザクの活躍であった。この戦いによってサイド5は消滅し、陸地領域にのちにデラーズ・フリートが茶の国と呼ばれる本拠地を築く。



J サイド2

ラグランジュ4に設置されたコロニー一帯。コロニー落としに用いられたアイランド・イフィッシュは、サイド2にあった。コロニー制圧時には、ザクIを用いた電ガス攻撃が行われ、その後移転されている。



K ソロモン

ジオンの宇宙要塞。連邦軍のチェンバロ作戦によって陥落。以降はコンバウトと呼ばれる、連邦軍の要塞となる。U.C.0083年に行われた式典中、強奪されたガンダム試作2号機による核攻撃を受けた。しつう。



L ア・バオア・クー

一年戦争の最終決戦の地となった宇宙要塞。一年戦争後はゼダンの門と呼ばれる。地球連邦軍の要塞となる。グリプス戦役時、ハマーン・カーンの率によって小惑星アクシズと衝突し、致命的なダメージを負う。

UC.0079.9～ サイド7脱出～大気圏突入 パプワ補給艦襲撃戦

参加人員 シャア・アズナブル、ガダム

投入モビルスーツ シャア専用ザクⅡ、ザクⅠ

シャアの補給要請によって到着したのは老朽艦パプワ。だが、ホワイトベース勢の強襲にあい、補給物資の多くを失う。パプワ艦長のガダムはザクⅠで応戦するも、ガンダムとの世代の差を痛感させられることになる。



ルナツー防衛戦

参加人員 シャア・アズナブル、マチュー、フィノクス

投入モビルスーツ シャア専用ザクⅡ、ザクⅡ×2

連邦軍基地へ寄港したホワイトベース。同基地司令のワッケインの判断は「赤い彗星がムサイごとき軽巡洋艦でルナツーを襲撃するようなどことはない」だったが、シャアは潜入作戦で敵の裏をかき、ルナツーを混乱に陥れる。

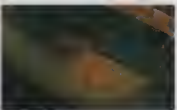


大気圏突入戦

参加人員 シャア・アズナブル、クラウン、コム、ジェイキュー

投入モビルスーツ シャア専用ザクⅡ、ザクⅡ×3

ホワイトベースの大気圏投入を預い、シャアが再度奇襲をかける。だがこのタイミングで戦艦を仕掛けた事実は古今例がなく、大気圏に突入してしまえばザクといえども一瞬にして燃え尽きてしまう。実質的な戦闘時間は2分。コム機、ジェイキュー機は突入前に撃破されるも、ガンダムを深追いしたクラウン機は、大気圏で燃え尽きてしまう。



サイド7

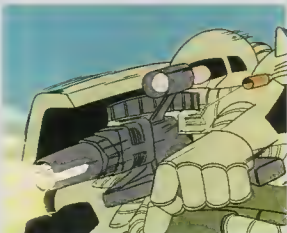
ジオン本国であるサイド3からもっとも離れた場所に位置するため、連邦軍は当初から軍事施設の設置を念頭に置いていたといわれる。また、そうした環境下から極秘裏に「V作戦」で開発されたモビルスーツ群のテストが行われている。だが結果として軍事施設を置いたことで、サイド7が戦場になるという悲劇を巻き起こしてしまう。

UC.0079.9.18 サイド7戦

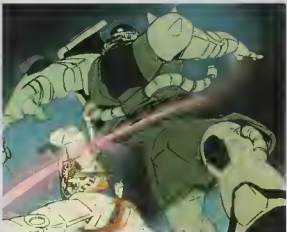
参加人員 デニム、スレンダー、ゾーン、シャア・アズナブル

投入モビルスーツ ザクⅡ×3、シャア専用ザクⅡ

任務からの帰還中、連邦軍の「V作戦」をキャッチしたジオン軍のシャア・アズナブルは、残存勢力からザク3機でサイド7を独断。サイド7にてテスト中であつた連邦軍モビルスーツ、ガンダムと戦艦を展開した。これが宇宙世紀史上初のモビルスーツ戦となる。初戦でデニム、ゾーン機を失ったシャアは、調査のためにサイド7へと向かった。だがすぐさま発見され、ガンダムの追撃を受ける。シャアは自身のザクの射出を要請し、ガンダムを迎撃。だが、さらに部下のスレンダーを失うなど、ガンダムの恐るべき性能を見せつけられる結果となった。



↑連邦軍の防衛部隊はなすすべもなくザクに破壊されていく。モビルスーツが新たに兵符体系の頂点に立つことを印象づける。



↑だがザクを圧倒するガンダムの登場によって、時代が動く。ザクを指標として開発されたガンダムは、基本スペックからザクを圧倒していた。



ユーラシア

ガルマ・ザビと激闘を展開し、北米を脱出したホワイトベースは、太平洋を渡ってユーラシア大陸へ。だがジオン側は追撃の手を緩めることなく、激戦が展開する。ジオン側の戦力の中心はザクであったが、徐々にランバ・ラルの駆るグフ、黒い三連星のドムなど新型機が目立ち始める。この戦いは、さらに地上最大の激戦地、オデッサへつながっていく。

UC.0079.10 ~ ガルマ・ザビ仇討部隊

参加人員 アコース、コズン、ステッチ、タチ（ランバ・ラル）

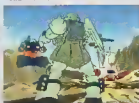
投入モビルスーツ ザクⅡ×4、グフ

北米から脱出したホワイトベースは新たなジオンの追っ手と太平洋上で遭遇。それはガルマの仇討のために地球へと派遣されたランバ・ラル隊。新型機グフを要する部隊ではあるが、彼らはドズル旗下の部隊。キシリア旗下のマ・クベからの補給は中古のザクやマゼラ・トップ4機など、バックアップは潤沢ではなかった。



↑太平洋上の孤島でホワイトベースと遭遇。ランバ・ラル隊は、すでに地上戦への高い順応性を見せていた。

↓MS-06は砂漠専用のD型も開発されたが、J型でも問題なく運用が可能だった。



Other Area

ククルス・ドアン

ククルス・ドアンは戦争孤児を育てながら暮らすジオンの逃亡兵。脱走の際に、自らのザクを持ち出して、追っ手であるジオン軍のザクとのザク同士による格闘戦を展開する。



UC.0079.11.07 オデッサ作戦

地球連邦軍による地上最大の反攻作戦、オデッサ作戦。ホワイトベースと黒い三連星との死闘が繰り広げられる一方、激戦の中心部では連邦の大戦力がジオンを圧倒しつつあった。連邦軍は圧倒的物資を投入したほか、独立混成第44旅団など、モビルスーツ部隊も展開。ザクやクフ、ドムを展開したジオン側の優位性は薄れることとなり、ジオンは配送を余儀なくされる。



↑ホワイトベース隊との戦いでは運送しなかったザクⅠ。だが、連邦軍独立混成第44旅団はザクを始め、多数のジオン側機体と戦闘を展開。

北米大陸

ジオン勢力下の北米へと降り立ったホワイトベースは、ジオンの地球方面軍司令官、ガルマ・ザビ率いる地上部隊と激戦を展開する。ザクは地上戦力の一角として組み込まれており、マゼラ・アタック、ドップとの連携によって、ホワイトベースを攻撃する。だが、もっともガンダムを苦しめたのは、ホワイトベースを追撃してきたシャアだった。

UC.0079.10.04 シアトル市街戦

参加人員 シャア・アズナブル、ジオン兵

投入モビルスーツ シャア専用ザクⅢ、ザクⅢ×2

旧シアトルの廃墟群は、逃亡を続けるホワイトベースにとってカモフラージュとなった。全高18mのモビルスーツにとっても同様で、双方とも厳しい戦いを強いられる。だが、そうそうにホワイトベースの作戦を見抜いたシャアがザビ家への復讐という目的を持っていなければ、ガンダムは撃破されていたかもしれない。



↑巨人といえるモビルスーツのサイズでも、高層ビル街の残骸は大きな脅威となったザク。



↑建物などの障害物に巧みに対応するザク。モビルスーツという新兵器の特性を生かす。

Other Area

アリゾナ砂漠

運送したザクを使用する連邦軍部隊であるセモベンテ隊。ザク3機と61式戦車1両を1小隊とし、2部隊で構成されていた。ジオン軍に偽装して、アリゾナ砂漠で行動。



ソロモン、ア・バオア・クー

一年戦争後半に入ると、宇宙戦の主力モビルスーツはリック・ドムへと移行。だが主力の座を降りたとはいえ、多くのザクが決戦の舞台へと投入されている。ア・バオア・クーでの最終決戦になると、学徒動員兵がパイロットを務めるケースも見られた。



●最終決戦で活躍したザクの指揮官機。歴戦のパイロットの多くは新型機に乗り換えたが、使い慣れたザクにこだわるパイロットもいたのかもしれない。

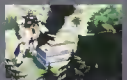
●能力戦となった最終決戦では、ザクⅠも武装して投入されている。



Other Area

サイド6リボー・コロニー

一年戦争末期、連邦軍のRX-78-NT1を追って、ジオンのサイクロプス隊がリボー・コロニーに侵入。U.C.0079.12.25、MS-06F2とRX-78-NT1の戦いがコロニー内で展開される。



【一年戦争後の地球圏エリア】

一年戦争終結後もMS-06系の機体は、世界の各地で運用されていた。ここでは戦後、姿を見せたMS-06系機体の主要な地域に触れる。

【地 上】

南 米

戦後、ジオン軍の機体を接収した連邦軍が様々な機体をジャブローにて運用。ザクタンクといった派生型も、作業用として使用されていた。

ユーラシア（アジア）

ジオンの水陸両用モビルスーツの育成が去った戦後では、海中エリアへのモビルスーツ配備の意欲は薄れた。それゆえ、連邦側ではジオンが使用していたMS-06Mを改修し、マリナー・ハイザックとして運用。香港などの一部エリアで、運用が確認されている。

オセアニア

オーストラリア・トリントン基地では、戦後接収されたMS-06F2型が連邦軍のカラリングにリペイントされ、訓練機として使用されていた。

ダカール

U.C.0088.8.29、アクシズがダカールを占拠。「ネオ・ジオン」を名乗った。その際にMS-06 ザクⅡが同勢力の機体として確認されている。その後、宇宙でもガンダムチームと戦闘したが、性能差はいかんともしがたく、撃墜されてしまう。

アジア方面

ギニアス・サハリンが率いるジオンのアジア方面軍と、連邦軍第1機械化混成大隊が激突するアジアエリア。地球上で、比較的初期からモビルスーツ戦が展開していた。ジオンのアジア方面軍には、陸戦用MS-06Jの派生モデルであるJC型が配備されている。同エリアで活躍したザクは主にこのJC型である。水中戦にもある程度対応しており、湿地や亜熱帯向けの変更が施されていたのかもしれない。



●陸戦型ガンダムと水中戦を展開するJC型。各部の防水用のシーリング処理などが、J型と異なっているのかもしれない。

●ザクⅠも戦場で運用されていた。連邦軍側モビルスーツのシールドを使用しているなど、補給状況がうかがえる。

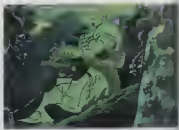


南 米

連邦軍本拠地を持つ南米大陸は、ジオンの制圧を免れたエリア。その理由としては、ジャブローが特定できない地下基地であったこと、モビルスーツには適しない湿地帯であることがうかがえる。そのため、水陸両用モビルスーツなど、特殊な機体が派生した。ザクもアジア方面と同様、JC型が配備されていたのかもしれない。

UC.0079.11.30 ジャブロー攻略戦

一年戦争後半に展開した大規模な攻略作戦。これまでもジャブローには、爆撃を中心とした攻撃は繰り返されてきたが、これほどまでの本格的なモビルスーツ侵襲作戦は行われたことはなかった。ザクなど陸戦用機体の多くはキャリアフォルニアベースから出撃し、ガウからの降下によってジャブローへと投入された。降下中、対空砲火によって失われた機体も。



アフリカ

一年戦争直時にジオンの制圧下にあったエリア。戦後、ジオン軍の武装解除が行われたが、多くの部隊や戦力がゲリラ化。ノイエ・ビッターやデザート・ロンメルなど、ジオンの再興を企てる者たちのほか、宇宙世紀80年代後半に入ると、アフリカの解放を求めて戦うゲリラもザクを戦力として使用。のちに90年代にもモーリタニアにMS-06Dが存在した。運用されていたザクは環境を考慮してかMS-06D系が目立ち、戦後にも数多くの機体が存在していた。またキンバライト鉱山基地には後継生産型である新鋭機、MS-06F2が配備されるなど、オデッサと比較的近い立場から補給面は充実していた可能性がある。



【宇 宙】

アンマン（月面）

一年戦争後、連邦軍はジオン側のモビルスーツを数多く接収。その中でも機能に特化した機体は、そのままの形で購入されている。MS-06Eもそうした機体のひとつで、アンマンに派遣したアーマーガの偵察任務に用いられた。



スペックとディテールに見る

ザクシリーズ

その変遷と歴史

0075年のザクI以来、50年近くにかけて開発され続けたザク系モビルスーツ。その長い歴史の間に、機体サイズから装甲材質、推力にいたるまででありとあらゆる部分で大きな変化を遂げているが、その変化はどのような意味を持っているのだろうか。ここでは、スペックや外観に現れている意匠を手がかりにして、各時代を代表するザク系モビルスーツ7機を比較しながらその変遷について迫ってみよう。

頭頂高&本体重量&全備重量

頭頂高と重量はモビルスーツのサイズを表す。使われる装甲やフレームの材質、機体構造、そして盛り込まれた装備（機能）によってその値が生まれる。また、本体重量と全備重量の差が大きいほど武装や推進剤など装備品が多いことを示すが、モビルスーツの場合は推進剤がその重量の大きな割合を占める。



MS-106
ハイザック
地球連邦 (A.E社)
0084
18.0m
38.7t
59.8t



MS-X-011
ザクIII
アウクス
0088
21.0m
44.2t
68.3t



MS-05B
ザクI (B)
ジオン公国(ジオン公国)
0079
17.5m
50.3t (本体重量)
85t (全備重量)



MS-07F
ザクII (F)
ジオン公国(ジオン公国)
0079
17.5m
58.2t
74.5t



MS-06F
ザクII (F)
ジオン公国(ジオン公国)
0079
17.5m
58.2t
74.5t



MS-129
ギラ・ザク
ジオン公国 (A.E社)
0094 ~ 96 ?
20.0m
21.8t
55.2t



MS-06FZ
ザクII (FZ)
ジオン公国(ジオン公国)
0079
17.5m
58.2t
74.5t

重量は軽いほど運動性は向上する。宇宙空間でも慣性質量は存在するので重量は無関係ではない。モビルスーツは機動兵器であり、運動性は高いほうが基本的には望ましい。数値を見てみると、ザクIからFZ型ザク改までは重量、頭頂高ともに変化がほぼ変化はない。超硬鋼合金製のこれらの機体は連邦軍のジムより重い。ジオン公国はニュータイプ研究などは進んでいたが、金属工学に関しては地球連邦にアドバンテージがあった。その進んだ連邦の金属工学を用いたハイザックでは、チタン系複合材採用で一気に軽量化するが、アウクス製のザクIIでは機体が大型化し、重量も増加している。ザクIIIはメガ粒子銃といった内蔵火器を備えており、重量増を承知で火力の増強を優先したと見える。0090年代のギラ系は、再び大幅な軽量化が行われている。開発はアナハイム・エレクトロニクス社 (A.E社) だが、この時期同社はサイコ・フレームなども開発を行っており、金属工学における大きな技術革新があったため、この重量水準が達成できたと目される。機体構成も特別な内蔵兵装は持たずシンプルで、初代ザクIIのコンセプトに近い。



MS-06FZ
ザク改



3200m (110%)

MS-06F
ザクII (F)



3200m (110%)

MS-05B
ザクI (B)



2900m (100%)

頭部&センサー

顔に探知される前にこちらから一方的に攻撃を仕掛けるのがミノスキー粒子散布下におけるモビルスーツ戦のベストな形だ。そのため、センサーの能力は顔の前に勝負を決しきれない重要な項目でもある。

AMS-129
ギラ・ズール



18200m (628%)

AMS-119
ギラ・ドーガ



16400m (566%)

AMX-011
ザクIII



9700m (334%)

RMS-106
ハイザック



8900m (307%)

ザクは登場当初からモノアイを採用しており、ザクIから0090年代の新鋭機キラ・ズールまで変わらない。ガンダム型頭部がアイデンティティであるのと同様、モノアイという意匠も「ジオン公国のモビルスー

ツ」として強い象徴性を持っているからだ。センサー能力に関してはハイザックとギラ・ドーガで2回大きく進化しており、重量と同様技術革新の影響を受けている。機体面では例外的にザク3で「口」部分にメ

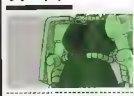
ガ粒子砲が内蔵されたほか、ギラ・ズールは口がダクトではなくタンクになっている(基本的には口はダクトだ)。過去の機体では機体外に排出していたものを貯蔵し循環させる新しい構造なのかもしれない。

MS-06FZ
ザク改



超硬スチール合金

MS-06F
ザクII (F)



超硬スチール合金

MS-05B
ザクI (B)



超硬スチール合金

シールド&装甲材質

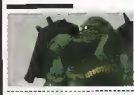
どの程度の防衛設備を持たせるか、防衛をどう考えるかは重量に直結し、運動性全般に関ってくる要素だ。見た目ではわからない装甲やフレーム材質の違いも劇的なスペックの変化を招く要因となる。

AMS-129
ギラ・ズール



チタン合金
セラミック複合材

AMS-119
ギラ・ドーガ



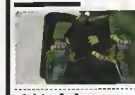
チタン合金
セラミック複合材

AMX-011
ザクIII



ガンダリウム・コンボジット

RMS-106
ハイザック



チタン合金
セラミック複合材

右肩に装備されているL字型のシールドもザクのアイデンティティだが、連邦軍のガンダム(ジム)以降、グリップ式のシールドがモビルスーツに採用されると、ザクもレイアウトの自由度が高いシールドを採

用するようになる。ハイザック以降、右肩シールド以外に左腕にもシールドを備え、さらにギラ・ドーガ以降ではウエポンキャリア的な意味合いを持っている。装甲材質は超硬スチール合金以後はガンダリウム合

金をよくめて(0150年代まで)チタン合金系複合材が主流。ただしギラ・ドーガ以降は機体重量が大幅に減っており、分類としては同じ「チタン合金系」でもそれ以前とはまったく別物の可能性もある。



MS-06FZ

ザク改



79,500kg (195%)

MS-06F

ザクII (F)



43,300kg (106%)

MS-05B

ザクI (B)



40,700kg (100%)

ランドセル

ランドセルと、それに備わるメインスラスタは、そのモデルスーツの強力・機動性に対する設計思想が見て取れる部分に、絶対的な推力の大きさ以外に、ノズルの大きさや配置（向き）、推進剤タンクの容量などにも注目したい。

AMS-129

ギラ・ズール



82,100kg (153%)

AMS-119

ギラ・ドーガ



54,000kg (133%)

AMX-011

ザクIII



172,600kg (423%)

RMS-106

ハイザック



64,800kg (159%)

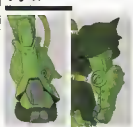
FZ型（厳密にはF2型から）からランドセル上部に逆ヘクトルのスラスタが装備され、ノズルの大型化と追加により推力自体も大きく上がった（推進剤の搭載量はほぼ同じ） 推力を向上させ、機体の速力を

高める流れはザクIIIで頂点を極めるが、ギラ・ドーガ以降では小型のスラスタを多方向に備え大型のプロペラントタンクを装備するという方向に変わった。3次元的な機動には有利な構成だが、推力の数値自体

は低めだ。その理由としてサブ・フライトシステムの普及で機体に大推力が必要なくなったこと、機体の軽量化により小さい推力でも大きな加速度が得られるようになったことが挙げられる。

MS-06FZ

ザク改



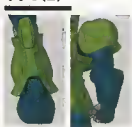
MS-06F

ザクII (F)



MS-05B

ザクI (B)

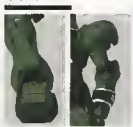


脚部&肘部

スベックとして急務では測れないが、後部に対する結構な厚みと、可能性をどの程度考慮しているのかや姿勢制御システムが配置、さらには動力パイプをさき取り回しているかといった点も変化が現れる。

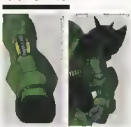
AMS-129

ギラ・ズール



AMS-119

ギラ・ドーガ



AMX-011

ザクIII



RMS-106

ハイザック



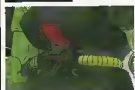
ザクIIで採用された脚部と胴体、頭部の露出した動力パイプは、後継機も採用している。これもモノアイ同様に強さとしての意味合いが強いだろう。ただし、ザクIIのように機体から大きく飛び出す構造ではなく、

胴や頭に半ば埋め込む構造で被弾率は低下させている。その一方、ギラ・ドーガでは腰や腕のフレームが露出するようになった。防弾性をあまり考慮しない構造だが、ギラ・ドーガはバイタルパート以外の防弾性を切

り詰め（装甲を薄化・省略化）軽量化を行っている可能性もある。また、脚部のスラスタはFZ型以降、大型化が進んだが、ギラ・ドーガでは最適化が行われ、FZ型やF2型並のバランスとなった。



MS-06FZ
ザク改



976kW (109%)

MS-06F
ザクⅡ(F)



978kW (109%)

MS-05B
ザクⅠ(B)



899kW (100%)

ボディ& ジェネレーター

スラスター推力と同様に連邦軍に
されるスペックがジェネレーター
出力だ。武装や機体の性能も出力
といった機能的な要素に影響する。
設計思想というよりは、装甲材質同様、
基底的な技術の差が
大きく左右している。

AMS-129
ギラ・スール



2470kW (275%)

AMS-119
ギラ・ドーガ



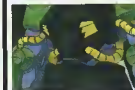
2180kW (240%)

AMS-011
ザクⅢ



2150kW (239%)

RMS-106
ハイザック



1428kW (159%)

ジェネレーター出力は、ザクⅠ〜ザクⅡではほとんど変化はない。ハイザック以降はようやく向上を果たしたが、機体全体にパイプを張り巡らせるほど手を加える必要があった。また、ハイザックだけは胸にジ

ムと同様ダクトがあり、連邦軍の技術流入を如実に表している。以後の進化はスラスター推力のような突然変異的な例もなく正常進化を続けているが、ザクⅢ以外は内蔵ビーム兵器も持たないため、特殊な機関は

必要がないだろう（逆に言えば、出力は近くてもザクⅢとギラ・ドーガでは特性が大きく異なる可能性がある）。ただし、ギラ・ドーガやスールは同時代のゼガンと比べると出力は高く設定されている。

スペックから見る「ザク」のポジションの違い



スペックの変遷を見てきたが、同じザク系の機体とはいえ、その方向性や機体特質は異なる。「ザク」といえばフラットな性能に加え、余裕のある設計で拡張性が高く操縦も容易というイメージだが、それにび

ったり当てはまるのはF型ザクⅡくらいだ。航続距離を犠牲にしても推力を求めた局地戦野戦的なFZ型ザク改や、速度と武装を突き詰めた性能を追い求めたザクⅢなど、「尖った」部分を持つザクも多い。そ

してそれは、ザクⅢならば数の劣勢をカバーするための性能が第一に求められた、というように開発時の状況・事情による。どのような理由でスペックや細部の構造の設定が行われたかを考えてみるのも面白い。





クローズアップポイント



⇒1 / 頭部

メインカメラはモノアイを採用。後のジオン公国軍モビルスーツにも受け継がれている。ただし中央に設けられたビラーはザクⅡ以降の機体では取り除かれた。



⇒2 / コックピット

コックピットは胸部に設けられている。二重ハッチになっており装甲強度も高く見えるが、歩兵の携行グレネード程度でも直撃すれば内部のモニターが割れたりすることもある。この脆弱性の改善はF2脱走機まで課題となっていた。



⇒3 / 胸部

人間の胸同様のマニピュレーターとすることで、武器を「持ち替える」ことにより状況にあわせて最適な武装を選択・使用することができるとされている。



⇒4 / 武装

口徑 105mmのザク・マシンガンや、口徑 250mmのザク・バズーカといった対戦車用武装が用意されたが、後のザクⅡ向け兵装も使用可能。また、人間のように格闘攻撃を行うこともあった。



⇒5 / 脚部

AMBACによる推進剤を使わない方向転換が行えるほか、重力下での歩行も可能。なお、後継のザクⅡシリーズと異なり動力パイプは内蔵式を採用。



MS-05系

人類が量産した初のモビルスーツ

宇宙世紀に革命をもたらした兵器であるモビルスーツの祖、MS-05ザク。にもかかわらず、MS-05自身は開戦前にすでに旧式機となり、MS-06に主力の座を譲っている。MS-05が果たした役割とは何だったのだろうか。





MS-05とそのプロトタイプ

U.C.0075

MS-05(B)
ザクI

実験を想定し量産化されたが、ジオン独立戦争開始以前にザクIIに主力機の座を譲った。



U.C.0073
~0074?

MS-04
プロト
タイプザク

MS-05の前身の試作機。マニピュレーターによる状態検知や熱検度応答などの要件はすでに備える。



→コロニー建設に使われたスペース・ボッドSP-W03。モビルスーツの出発点はこのような作業機だったと思われる。



量産は開始したものの必要性能に届かず発生!?
産業用機械ではなく、戦闘用の人型兵器としてモビルスーツを開発してきたジオン(公国)が、実用(実戦)に耐えうるモデルとして初めて量産化を行ったモビルスーツがMS-05ザクIだ。先行量産型(A型)の生産開始は宇宙世紀0075年。一年戦争の開始が宇宙世紀0079年1月であるから、4年ほど前となる。

しかし、ザクI配備開始から約2年後の宇宙世紀0077年、すでにMS-06ザクII(C型)が量産体制に入っていた。ザクIは「性能不足のため」改良が行われ、MS-06ザクIIに機種変更していったのだ。実験を想定した量産機であるはずなのに、本格的な実験を経験前から旧型機になった訳だが、なぜこのような事態が起きたのか。

それは、ジオン公国軍が「モビルスーツをどのように運用するか」をMS-05開発の段階で、まだはつきりと想定していない(できていない)ことに起因していると思われる。ザクIの競合機がモビルアーマーであるMIP・X1や、ザクIとMIP・X1の中間的な存在であるEMS・04ツダであったことからそれは見て取れる。空間戦闘や対艦戦闘を重視するなら、機動力や火力に優れたMIP・X1やEMS・04ツダが適しているし、コロニーの防衛やコロニー占拠、工作なども行うならザクIの方が適している。本来なら性質や目的が大きく異なる機体同士をコンペにかけることは不自然だが、それだけ当時の公国軍首脳部も決断を下しきれていなかったのだらう(ザクIの採用は、地球連邦軍との戦争においてコロニーを質量弾として使う計画も考慮していたためと考えられる。3機種の中ではザクIが適している)。

しかし、ザクIを量産したモビルスーツ部隊を実際に設立した上で、予想される戦闘や任務の訓練・演習を本格的に行うと、ザクIが持つ性能と必要と目される性能との間に若干のずれが生じた(恐らく不足した性能の要素には、EMS・04ツダやMIP・X1が持つ機動性もあったと思われる)。そして、一年戦争開始前にザクIIへとモデルチェンジを行ったのは、このずれかを解消し最適化するためだった。実験を経験する前から旧式化してしまったザクIには、こういった事情があると考えられる。



→前編で直感的に遠距離と戦闘を行うほか、ブリティッシュ作戦におけるコロニー制圧や植バルスエンジン試作機などでも活躍した。



ザクIの主なパイロット

ガダム

ジオン公国の補給艦バブワの艦長だが、自らザクIでガンダムに戦いを挑んだ。



トップ

オデッサ作戦後、オデッサからアジアに逃走してきた部隊長。ケリラの村で戦死。



ランバ・ラル

MS-07 ゴフのパイロットとして有名なが、ザクIの搭乗経験も持つ「青い巨星」。



黒い三連星

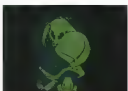
ルウム戦役においてザクIで連戦軍のレビル将軍を捕虜にする功績を挙げた。



武器・装備

シールドアーマー

厳密には武装ではないが、シールドアーマーを利用して体当たりなどで格闘戦を行われた。



ザク・マシンガン



当初は口径が105mmで、ドラムマガジンもサイドに装着するタイプ、後にザクIIのマシンガンも使用。

Sマイン

重力下仕様に変更されたザクIが装備している対人兵器。J型ザクIIも同様の装備を持つ。



ザクIとザクIIの武装は共通したものが多く、マシンガンのように後に改良が行われたものもある。南極条約前の機体のため、バズーカは核弾頭使用を前提としたタイプを装備。なお、ザクIはバズーカの発射を安定させるため、マウントが設けられた機体も存在する。

スペック比較

	ザクI	ザクII	ゴフ
全高	17.5m	17.5m	17.3m
重量	65.5t	55.2t	61.0t
ジェネレーター	899kW	976kW	1150kW
スラスター	40700kg	43300kg	58700kg

Z A K U I

■ MS-05 ザクI ■

Spec

- 頭頂高: 17.5m ●本体重量: 50.3t ●全備重量: 65.5t ●ジェネレーター出力: 899kW
- スラスター総推力: 40,700kg ●装甲材質: 超硬スチール合金
- 武装: ヒート・ホーク ザク・マシンガン ザク・バズーカ ガス弾銃、他

- 1 バイピングは内蔵式になっている。ブレードアンテナを装備し、通信機能が強化された機体（いわゆる指揮官機）も存在する。
- 2 ショルダーアーマーは当初スパイクレスだったが、後にスパイクの装備が可能なタイプに変更された。ザクIIのショルダーアーマーやシールドの汎用も比較的容易と思われる。
- 3 動力パイプは内蔵式で故障性は高いが、ボディ内部の有効容積や放熱効率には難があった。
- 4 姿勢制御用のスラスターは少なく、主推進器であるランドセルの推力とAMBACで機動を行う。

23m

22m

21m

20m

19m

18m

17m

16m

15m

14m

13m

12m

11m

10m

9m

8m

7m

6m

5m

4m

3m

2m

1m

0m

0m

0m

0m

0m

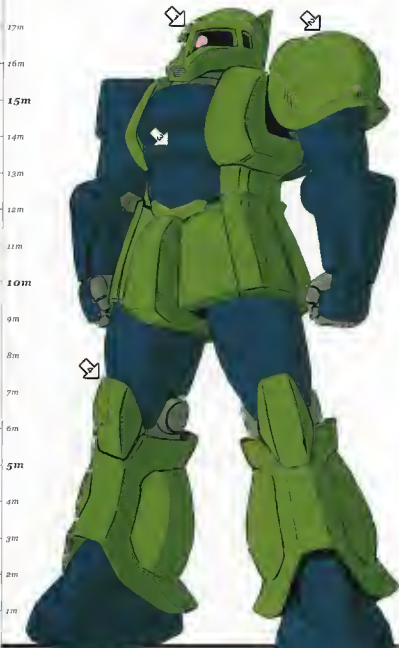
0m

0m

0m

0m

0m





↑一年戦争を終戦まで戦い続けたザクI。「実戦に耐えうる」の判断に依りはなかった。

基本的な機体要件は「ザク」として既に完成

MS・05ザクIは、ジオニック社が開発したジオン公国初の主力モビルスーツだ。試作機のみで開発が終わった前身であるMS・04から採用された熱核反応炉をはじめ、モノアイや流体バルスシステムを用いた関節駆動など、後のジオン公国製モビルスーツが持つ機械的要件をすでに持つとして、「モビルスーツの祖」と呼ぶに相応しい機体である。

一方、ザクシリーズの祖としてみると、その機体構成には奇妙な点もある。MS・05ザクIでは内蔵式の脚部や胴体部の動力パイプが、後のMS・06ザク2では機体外に露出する構造となっている点だ。これまでも外部に露出した小形化された、内蔵式になると一般的な機械の進化的発展（MS・04からMS・05の外見上の変化はまさにこの形だ）からすると、逆行しているようにも見える。

内蔵している部品を機体外に出すメリットは、その容積分を他の部品など分のスペースとして使えることが第一

だ。また、熱を持つ部品の場合は放熱に有利なほか、損傷なメンテナンスが必要であるならメンテナンス性の向上にもつながる。デメリットはいうまでもなく、損傷を受ける可能性が高くなることだ。しかしメリットにより機動性や関節駆動力が上げられればそれだけ被弾の確率は下がる。また、推進剤の搭載量を増やすことは、宇宙空間での行動可能時間延長やスラスターの能力アップには欠かせない要件だ。ザクIの運用データを解析した結果、ジオニック社のエンジニアはこのように全体としてはメリットがデメリットを上回るようになるかと判断し、ザクIIの仕様を決定したのである。

ザクIとザクIIとの比較では、スペック的には格段の進歩を遂げているわけではない。地球侵襲作戦時にはJ型ザクIIと共にザクIも戦線に投入されているが、これはザクIIに施した陸戦仕様化がザクIにも容易に行えたという点だ（無改修のまま配備されたのかもしれないが）。それは両者の基本的な構造や性能が近い証拠でもある。しかし、動力パイプの例に代表されるような熟成がザクIに無数に加えられることで、真に実戦に耐えうる量産モビルスーツたるザクIIの誕生へとつながった。ある意味では、ザクIすべてがザクIIに対する評価試験機だったと表現することもできるだろう。

ザクIの一年戦争における運用

ザクIはA型が27機、胸部形状が異なるB型が793機と計820機が生産されたとされている。一年戦争時にはすでに旧式となっていたが、それでも補給部隊の護衛用や、オデッサ作戦では重要なモビルスーツ戦力として配備されていた。また、決戦の場となった宇宙要塞ア・バオア・クーではザクIIや最新鋭のゲルググと共に防衛の任に就いている。部下がザクII J型、指揮官がザクIに搭乗するという編成も見られるなど、現場においては、ザクIIとザクIにはそれほど能力差がないと受け止められていたのかもしれない。



◀シャアは丸腰のザクIでガンダムに挑もうとしたガダムの熱戦を演じたが、ザクIが旧式機であることよりガンダムと「ザク全盛」の圧倒的な性能差を警戒していたためだろう。



◀トップ小隊では、指揮官であるトップがザクIに搭乗し、JC型の陸戦型ザクIに乗る部下たちを率いていた。信頼性の面などから、ザクIを好むパイロットも多かった可能性もある。

ザクIとツダ



ザクIとコンペを行った、もう一つのモビルスーツの祖がツィマツのEMS-04ツダだ。ジェネレーター出力、推力ともにザクIを大きく上回るスベックを持ち、宇宙空間での機動性に優れる。しかしコスト面や運用のしやすさではザクIに譲り、そのため最終的にはザクIが採用されたものの、後にはMS-06R型というツダに近いコンサプトのザクII派生機が登場している。





➡1 / 顔部

ジオンのスタンダードとなるモノアイ。連邦兵に一つ目と呼ばれるようになった。MS-05では中央設置強用ビラーは、視界を障害するため側サイドのみ。



➡2 / スパイクアーマー

対艦船を想定したスパイクアーマー。一年戦争初期、ザクの相対する艦は主に宇宙艦船であり、胸部アーマーを叩いた攻撃も効果的であった。



➡3 / コックピット

コックピット前面装甲の構造も変化。左胸から乗り込み、機動時にはシートごと右方向へ移動する。MS-06Fでは経路装置の強化が行われている。



➡4 / シールド

左胸に装備されている大型シールド。主に対艦攻撃時に、機体を防衛する目的が強かったと考えられる。



➡5 / ジェネレーター

MS-05で導入されたミノプスキー・イヨネスコ型の熱核反応炉。MS-06ではさらに熟成され、出力が向上。MS-05ではザクの構造は決まっていたが、すでに設計的には余裕がなく、これ以上の性能向上に対応できない状態にあった。そのブレイクスルーのひとつが、動力パイプであった。



➡6 / 動力パイプ

熱核反応炉の出力向上に伴い、導入された冷却システムのひとつ。高伝熱伝導体によって、発熱を分散する。



MS-06系

「MS-06」というスタンダードの系譜

様々な局地専用モビルスーツへと発展していったザク。その発展を支えたのはスタンダードとなるMS-06のベーススペック、基本性能だった。



ジオンの主力機として 正統的進化を続ける

MS・05からMS・06の進化の過程で、人型兵器モビルスーツとしてさらに洗練されたザク。それはザクにもたされた「巨大な歩兵」という側面をさらに浮き彫りにし、来るべき地球進攻作戦が戦略的状況としてクロースアップされていくことになる。

そのプロトモスはジオン公国軍が行った第一次地球降下作戦において顕著に表れており、本来空間戦闘用のMS・06F型をそのままH・Vで降下させるという戦略がとられた。これはザクのベーススペックの確かさを物語るエピソードであり、さらに基本構造を変更することなく、地上陸仕様のJ型への改修が行われた点も、モビルスー

ツの可能性を示した。かくして地球という過酷な環境は、ザクの系統に様々なファミリーを生み出し、やがて様々な局地専用機の礎となっていた。

それとは別に、純粋にスタンダード機のザクとしてのバージョンアップを面々と続けられることになる。そのきっかけは、最前線で戦うエースからの要求であつた。F型の生産ラインを転用したうえで、機体強化を行ったMS・06S型は、のちにエースパイロット用のスペシャルと言われたが、たとえば、スラスターは出力向上を図りながらもプロペラント搭載量はF型のまま。また、ジェネレーター出力の向上にもかかわらず、機体構造はF型を踏襲するなど、構造的にも問題が残る。これらを進化の流れに落とし込んでみると、S型はザクの高性能化を見越したプロ

トタイプだったのかもしれない。こうした基本性能を向上させる系譜は、やがて統合整備計画によって、ザクを次のステッパーへと導いていく。

俗に後期量産型と呼ばれるMS・06F・2型は、統合整備計画に即した改修がスタートしており、対ジム戦を考慮した軽量化と、出力向上を狙った改修が行われている。実際に統合整備計画に準じた改修が行われたのは最終生産型であるMS・06FZ型である。ジオン系モビルスーツとのパーツ共用を意識した改修は、スペック的にゲルダグに近づくものとなった。ロールアウトは一年戦争末期ということもあり、前線で見えなかったが、スタンダードな高性能機というコンセプトは、のちのキラ、ドーガにも受け継がれていく。

MS-06ザク系の進化

MS-06A

最初期モデル。MS-05からのバージョンアップ型。肩にスパイクはなく、シールドも装備されていなかった。



MS-06C

初期量産型。核弾頭の使用を想定していたため、各部に放射線防護処理が施されている。プリティッシュ作戦などに投入された。生産数 236 機。



MS-06F

いわゆるザクの基本型。MS-06Cから対機装備を削除したほか、新型ジェネレーターへの換装などマイナーチェンジ。生産数 3246 機（異論アリ）。

MS-06S

エースパイロット用のハイチューンバージョン。ジェネレーター出力、スラスター推力、センサーなどが向上。

MS-06J

陸戦仕様。空間戦闘装備を削除したもの。地球進攻作戦に合わせて開発された。

MS-06F-2

F型のマイナーチェンバージョンで、軽量化とジェネレーター改修が施された。その変更は、統合整備計画の沿うもの。



MS-06FZ

最終型。統合整備計画によって、大幅に各部のバンプ変更が行われた。スペック的にはジム・コマンドやゲルダグに匹敵。



→ザクは巨大な歩兵とも称える。中取、地上を飛ばす。あらゆる作戦に投入された。



ザクC/Fの主なパイロット

ジーン

サイド7において試験中のガンダムと史上初のモビルスーツ同士の戦闘を行う。



デニム

ジーンの上官、ガンダムと戦うも、コックピットをビーム・サーベルで貫かれ戦死。



クラウン

大気圏近辺で戦時中、重力にひかれ大気圏に突入してしまい機体ごと燃え尽きた。



武器・装備

ザク・マシンガン



主に対艦戦闘を行うためのマシンガン。初志は遅めでモビルスーツ戦での命中精度や貫通力は不足気味。RX-78には歯が立たなかった。

ザク・バズーカ

口径は280mmで、対艦戦闘を行うほか、C型ザクに装備されたものは対弾頭の使用も考慮されていた。



ヒート・ホーク



艦船の設備を破壊するほか、モビルスーツ戦でも白兵戦時に(射撃武器より高い)効果を発揮した。

ザクⅡC/F型の武装は、ザクⅠから若干の熟成が見受けられるもののコンセプトはほぼ同一。そのため地球連邦軍がモビルスーツの量産化に成功し、モビルスーツ同士の戦闘が行われるようになるとその組織により武装面では劣勢を強いられた。

スペック比較

	ザクⅡ (C)	ジム
全 高	17.5m	18.0m
重 量	56.2t	41.2t
ジェネレーター	976kW	1250kW
スラスター	43300kg	55000kg

Z A K U II

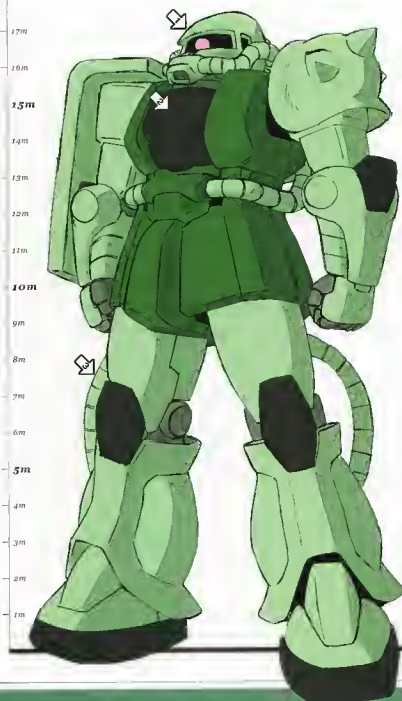
■ MS-06C/F

ザクⅡ (C/F型)

Spec (MS-06F)

● 頭頂高: 17.5m ● 本体重量 56.2t ● 全備重量 74.5t ● ジェネレーター出力: 976kW
● スラスター総推力 43,300kg ● 装甲材質 超硬スチール合金
● 武装: ヒート・ホーク ザク・マシンガン ザク・バズーカ、他

- ➡ 1 見た目でC型とF型では大きな違いは認められないが、細かな構造や使用材質などには変更がある可能性が大きい。
- ➡ 2 C型は複合装甲とし、核兵器による放射線防護のためのシールド材を封入している。F型ではこれら装備を廃止。
- ➡ 3 ザク1からザク2になるにあたってボディ外に出されたパイピング。しかしC型からF型ではこの動力パイプに変更は加えられていない。



C型からF型における「簡略化」の本当の目的

C型ザクは0078年1月より製造されていたモデルで、ABC（核・生物・化学）兵器の使用禁止等を定めた0079年1月の南極条約批准前に生産された機体であり、対核装備をしているのが特徴だ。装甲間に重く密度の高い合金や特殊な液体を封入し放射線を遮蔽するほか、電子機器も強力な電磁パルスから護る処置が施されている。

そして「もつともスタンダードなザク」といえるF型ザクは、南極条約の締結により、対核装備防護装備を廃し、簡略化を図ったモデルだ。F型ザクの本体重量は約56トンで、自重が72トンに達していたとされるC型に比べると大幅に軽くなっている。

しかし、パイロットの保護という観点から見ればコクピット周りのみに放

射線遮蔽用のシールド材を使用すれば問題はないはずで、そうであれば十数トンに及び重量になるとは考えにくい。装甲以外の設備や電子機器に施す防護措置の重量も考慮しても、「放射線遮蔽用の装備を簡略化しただけ」というには差がありすぎると思われる。

この背後には、F型の再設計にあたって単に装備を簡略化しただけではなく、モノコックフレームや装甲厚の設定などより根幹的な部分にも変更が加えられていると見るべきだ。このような変更が加えられた理由としては、機体の性能アップと生産性の向上や省資源化のためという2つの面があるだろう。性能に関するC型とF型の違いは軽量化による部分がほとんどと思われるが、モビルスーツにおけるもつとも重要な性能の1つである機動性については、この軽量化はもつとも大きく作用する項目である。

つまり、F型はC型の装備と構造を見直すことにより、より低コストで大量生産に向けた機体としつつ、戦場で求められる性能により最適な機体として最適化されたモデルといえる。F型は一年戦争において3000機以上が生産されたとされ、地球連邦軍がジムを開発した後も「数の上では」主力として使われ続けたモビルスーツであり、ザクとしてのひとまずの完成の域に達した機体であるといえるだろう。

ザクに課せられた役割とは？

C型/F型にはザク1の後継機としての重要なポジションが存在するが、C型はザク1の運用で見出したモビルスーツのコンセプトをそのまま継承していた。すなわち拠点（コロニー）の制圧および対艦戦闘である。F型に移行した時期の地球連邦軍はまだモビルスーツを保有していなかったが、F型では軽量化によりある程度モビルスーツ戦にも対応しようとしていた可能性もある。しかし装甲材質とビーム兵器を持たない（待てない）点は後々まで問題となった。



↑ 武装や機動性は艦船や建群破壊物との戦闘に基準が置かれた。真の対モビルスーツ戦闘を考慮した機体はゲルググまで待つこととなる。

バリエーションモデル

F型をベースにした機体では、ドズル専用ザクが有名。当初はモビルスーツに後継的だったドズル・ザビだが、専用機を分たえさせ、前線に身を投じた。ただし、エンゲル・ピングと大型のヒート・ホーク、スパイク以外に特別な性能向上などは行われていない様子。



MS-06F
ドズル専用ザク



ZAKU II GROUND TYPE

■ MS-06J/JC

陸戦型ザクII (J/JC型)

Spec

●頭頂高：17.5m ●本体重量：56.2t ●全機重量：74.5t ●ジェネレーター出力：976kW
●スラスター総推力：43,300kg ●装甲材質：超硬スチール合金
●武装：ヒート・ホーク/ザク・マシンガン/ザク・バズーカ、クワッカー/マゼラ・トップ砲/三連ミサイル、他

陸戦型ザクの主なパイロット

コズン

ランバ・ウル強パイロットガンダムを破壊しようとするが逆に捕虜となる。



エルマー・スネル

「ホワイトオウガ」の二つ名で知られる白いJ型ザクのパイロット。



ノリス・バックカード

B3 グフを駆るエースだが、陸戦型ザクで陸戦型ガンダムと水中戦を行った。



フェデリコ・ツァリアーノ

南蛮したザクを中心に編成された連邦軍のセモベンテ隊隊長。素早いJ型ザク。



武器・装備

ザク・バズーカ

弾種の選択により、通常兵器との戦闘から大口徑を活かした集点攻撃まで幅広く利用。



マゼラ・トップ砲

マゼラ・アタックの主砲を携行火器に転用。口径175mmで弾速・射撃に優れ対モビルスーツ戦にも使用。



クワッカー

投擲式の小型爆弾。モビルスーツのカメラ・センサー頭を破壊させるフラッシュパンタイプもある。



3連ミサイルポッド

ベルトで腰部にマウントする小型のミサイル発射機。J型では一般的に見られる装備。



宇宙空間に比べ地形や環境の変化が大きいことや、無重力空間と異なり反動に対する姿勢制御もしやすいことなどから陸戦用の各ザクにはザク・マシンガンやバズーカ以外にも、様々な武装が用意されている

スペック比較

	ザクII (J/JC)	ザクII (MS)	陸戦型ザクII
全高	17.5m	16.2m	18.0m
重量	56.2t	56.5t	63.8t
ジェネレーター	976kW	1034kW	1150kW
スラスター	43300kg	40700kg	49000kg

- ※1 / 宇宙空間では必要ない開閉対策のため、頭部装甲に「雨どい」やカメラにクリーナーをつけた機体もある。
- ※2 / スライドして開くF型などのものと異なり、ハッチ状に開くタイプも存在する（J型として生産された機体が属している）。2重構造となっており、防弾性向上に寄与。
- ※3 / 取り外して格闘武器として使用できるよう、スパイクを備えたものもある。また、取り外し可能な構造は「自由にシールドを構える」という悪徳の基になり、後のグフに受け継がれた可能性もある。
- ※4 / ザクには珍しく、内蔵型の兵装として対歩兵用近接防衛兵装（Sマイン）を持つ。これはMS-05 ザクIなどにも見られる。



環境へは対応できたが
装甲の問題は未解決!?

MS・05ザクⅡ、そしてMS・06ザクⅡ(C・F型)は、コロニー内部に代表される重力環境下での行動も可能なよう設計されていた。しかし、地球連邦との戦争が長期化し地球侵攻の可能性も予見されると、地球上での行動に特化したザクが必要とされるようになる。



■米 コロニー内で活動するザクの陸戦型への改修は、機体そのものにあった。

こうして、ザクⅡF型(およびC型)をベースに、重力下仕様として改修が行われたのがJ型と、JC型の陸戦型ザクⅡだ。改修はF型のラインを使って行われ、0078年10月の段階で80機が生産されていた(本格的に生産されたのは、0079年2月以降)。また、F型を改修した機体だけではなく、後J型として生産された機体も存在する。これらの多くは月面のグラナダ基地製だった。

具体的な改修点としては、重力下では移動のための歩行時間が大幅に増えるため、脚部のフレームや関節駆動用アクチュエーターが強化されたほか、熱核反応炉の冷却系などを冷凍剤として大気を使うシステムに改めている。その一方で、宇宙空間ほどスラスターを使用する機会はないという推進剤の搭載量を減らすなど、宇宙での装備は取り除かれた。

また、飛行姿勢をとる宇宙空間と直立姿勢をとる地上では、当然被弾箇所も面積も異なってくる(肩上部までをカバーするJ型とシールドや、シールドアーチャーは飛行姿勢をとった際の防御に有効だ。そのため、F型とJ型では、機体各部の装甲厚を変更し最適化された可能性もある。特に直立姿勢では被弾面積は増える傾向にあり、強化が必須であっただろう。J型では、2重ハッチ構造のcockピットを新採用し耐弾性を高めた機体も存在する。しかし、機体の外見には変化がないということは、逆に言えば強化はcockピット周りのみで、全体としては強化しただけだった可能性も高い(F型とJ型の本体重量は同等だ)。

装甲の強化を含めザクⅡJ型を陸戦用モビルスーツとして新規設計したグフの登場や、連邦軍のジムが装備していたシールドを回収・使用しているザクが存在するケースは、装甲に関する不十分さを証明する例だったと見ることもできる。

曲獲の多かった陸戦型ザク

地球侵攻作戦に投入されたザクⅡは、地球連邦軍に捕獲されることも多かった。地球連邦軍はこれら捕獲したザクⅡを中心とした部隊を編成している(セモベンテ隊が有名)。連邦軍が量産モビルスーツを持たない時点では貴重なモビルスーツ戦力として利用されたほか、曲獲機の解析により連邦軍のモビルスーツ開発に「貢献」することにもなった。



バリエーションモデル

陸戦型ザクⅡとグフ

陸戦型ザクⅡはあくまでザクⅡの改修型だが、「ザク」の枠を超えた陸戦用新型機として開発されたのがMS-07B グフだ。地球侵攻作戦時のザクⅡのデータを参照し北米カリフォルニア・ベースにおいて量産されたグフは、さらなる装甲の最適化(強化)と出力向上により、重力下における総合的な能力はJ型ザクを大きく上回った。

MS-07B
グフ

J型とJC型の違いは?

陸戦用に改修された機体はJ型だが、一部東南アジアなどにはJC型と呼ばれる陸戦型ザクⅡが配備されている。cockピットが更新されているという説もあるが、型式からC型を改修して作られた陸戦型ザクとるのが自然だろう(それぞれの配備地域によって仕様変更がされた可能性もある)。J型はF型からの改修機と純陸戦仕様として生産された機体の両方を含むので、厳密に陸戦型ザクの種類を限定すればJC型、JF型、J型(純陸戦型)となるのではないだろうか。





ZAKU II COMMANDER TYPE

MS-06S

シャア専用ザク(S型)

Spec

●頭頂高：17.5m ●本体重量：56.2t ●全備重量：74.5t ●ジェネレーター出力：976kW
●スラスター総推力：43,300kg ●装甲材質：超硬スチール合金
●武装：ヒート・ホーク ザク・マシンガン ザク・バズーカ

指揮官型の主なパイロット

シャア・アズナブル

ルウム戦役で連邦軍の艦艇5隻を撃沈する武功をあげた「赤い彗星」という異名を持つ。



武器・装備

ザク・バズーカ



280mm口径のバズーカで、F型が装備しているものと同様。ガンダムのシールドを破壊したことも。

ザク・マシンガン

バズーカ同様、F型と共通装備。ガンダムには弾が立たず、装甲を化け物呼ばわりしたパイロットもいた。



シュツルム・ファウスト

使い捨て型の無反動砲で、その成形炸薬弾頭は艦艇の装甲をもたやすく貫く威力。



ヒート・ホーク

実体刃を加熱し対象を溶断する格闘兵器。対艦船から対モビルスーツまで広く使われた。

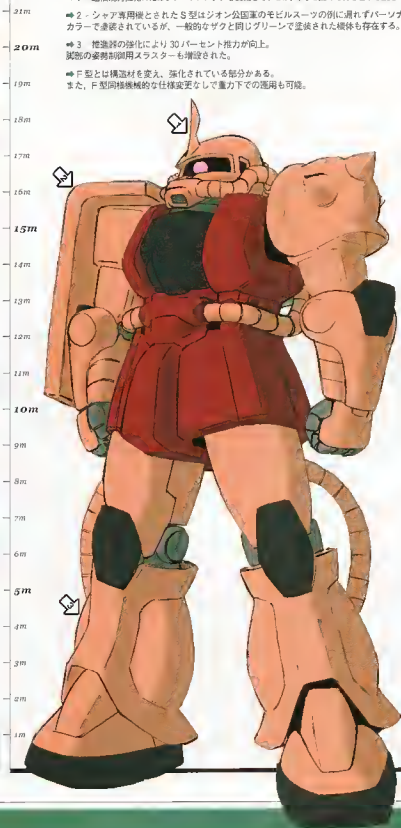


S型の用いた兵装は基本的にF型と同じ。バズーカもF型準拠である以上、核弾頭にも対応していると思われる。また、ルウム戦役時にはシャア・アズナブルのS型がシュツルム・ファウストを装備し出撃しているが、これも装備自体はF型でも可能だ。

スペック比較

	ザクII (S型)	リック・ドム	ザクII (F型)
全高	17.5m	18.6m	17.5m
重量	56.2t	43.8t	55.8t
ジェネレーター	976kW	1199kW	1012kW
スラスター	51600kg	33000kg	49800kg

- 1 通信能力強化のためブレードアンテナを装備しているが、単なる飾りであるとすると読める。
- 2 シャア専用機とされたS型はジオン公国軍のモビルスーツの例に照らすパーソナルカラーで塗装されているが、一般的なザクと同じグリーンで塗装された機体も存在する。
- 3 推進力の強化により30パーセント推力が向上。腕部の姿勢制御用スラスターも増設された。
- F型とは構造材を変え、強化されている部分がある。また、F型同様機械的な仕様変更なしで重力下での運用も可能。



「指揮官機として開発された 高機動型ザク」の元祖

ザクⅡのS型は、F型を改修し主に機動性をアップさせた性能向上型である。脚部やランドセルのストラターの強化によって、推力が30パーセント増加されているのが最大の特徴だ。しかし推進剤の搭載量はF型とは変わらずないため、ストラターを主力で稼働できる時間はF型より短くなっており、その航続時間は短かった。また、このような特性を持ったため操縦にはより熟練のパイロットを要した。その他にも各部構造材にF型と異なる特殊な素材を用い、強化されたストラターの熱とGに耐えられる仕様とされた。

また、指揮官が搭乗する機体として、通信能力向上のため頭部にブレードアンテナを装備しており、一般的なF型ザクとの外見上の相違点となっている。S型が生産開始となった正確な時期は不明だが、0079年1月のルウム戦役の時点でジオン公国軍のシャア・アズナブルがS型ザクで活躍を見せているとされるため、少なくともこれ以前であるだろう。



このS型ザクには、熟練パイロットたちが、F型の機動性に不満を持ったという開発背景があるとされている。しかし、一説には意外なことにS型の生産数はおよそ100機と、指揮官（エアパイロット）用の機体というには多い。

それでは、このS型はどのような意図をもって100機も量産されたのだろうか。考えられる可能性としては、より空戦戦闘向け改良されたザクを投入しようとした、ということである。実際にはF型とS型では特性が異なるため、一般兵が搭乗するF型ザクで構成された部隊を、S型に搭乗した指揮官が率いるという編成より（シャアが率いた部隊はこの編成だった）、S型ザクのみで部隊を構成した方が効率的である。

混成部隊ではS型の速度が活かしきれないほか、機関のメンテナンスサイクル（性能から見てS型はF型より設定が短いはずである）や使用パーツの調整・調達という面でも非効率的だ。実際にはジオン公国軍の記録にはそのようなS型のみで部隊の記述は見当たらず、指揮官機としてバラバラに配備されていた。しかし、より空戦戦闘に特化した機体が一定数必要だったことは、後のMS-09リリック、ドムやMS-06Rザク高機動型の登場を見ても明らかだろう。

「指揮官機」の意味とは？

S型ザクの多くは指揮官に用いられるとされるが、これはジオン公国軍が組織として拡張段階にあり、年齢を問わず戦功を挙げた者を機動的に昇進させたため、有能なパイロットが多く指揮官機についたためと思われる。本来なら本文中で述べたようにS型ザクのみで部隊を構成すべきだが、S型ザクには一種の熱意のような側面があったのかも知れない。



S型ザクとガンダムの戦い

シャア・アズナブルと彼のS型は、地球連邦軍のガンダムと再三にわたり戦闘を行った。ガンダムのルナ・チタニウム合金製装甲の前にザクの兵装は役に立たないと見や、シャアは格闘攻撃を行い、結果的にガンダムに対し最も有用な攻撃法となった（しかし撃破することはできなかった）。後にMS-07グフが開発された際には、この戦闘によるデータも利用され、結果として格闘重視のモビルスーツとして完成した可能性もある。



バリエーションモデル

指揮官が搭乗したザクとしてはS型のほかにFS型も存在する。この機体もS型同様F型を改修したもので、内蔵武器として頭部にバルカン砲を備えているのが特徴。しかしS型のように実戦的機体というよりは、少数が作られたカスタム機という側面が強い。ガルマ、ザビの所有する機体が有名だが、実際に彼が実戦で用いた例は少なかった。



MS-06FS
ガルマ専用ザク



Z A K U II TYPE F 2

■ MS-06F-2

ザクII後期量産型(F2型)

Spec

●全高：17.5m ●本体重量：49.9t ●全備重量：70.3t ●ジェネレーター出力：986kW
 ●スラスター総推力：53,400kg ●装甲材質：超硬スチール合金
 ●武装：ヒート・ホーク、MMP-80マシンガン MMP-78マシンガン ハンドグレナード シュトルムファウスト など

後期量産型の主なパイロット

ノイエ・ビッター

キンバライト基地指令。自らザクII F2型でアルビオン隊と交戦、HLVの発射を成功させた。



コウ・ウラキ

連邦軍が採取したザクII F2型に模擬戦時に搭乗している。「動きが重い」との評を下した。



チャック・キース

コウと同じく模擬戦時に搭乗したほか、強奪されたGP02A 追撃隊にザクII F2型で参加。



武器・装備

ザク・マシンガン (MMP-78)

対モビルスーツ版も考慮に入れ開発された新型マシンガン。弾薬により絶対空攻撃も行える。



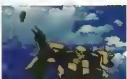
MMP-80マシンガン

ジオン公国軍が採用したモビルスーツ用マシンガンの決定版。90mm口径で貫通力に優れている。



ハンドグレナード

マニピュレーターで投擲するモビルスーツ用手榴弾。クワッカーに比べると小型で扱いやすい。



追加ブースター



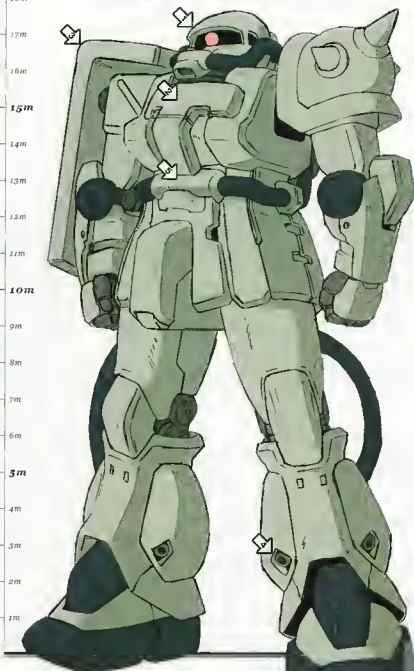
ランドセルの脇に併せて装着する補助ブースター。使い切り型だがジャンプ力は大幅に向上する。

モビルスーツ版の時代到来に合わせ、コンセプトを改めた武装が開発されている。MMP-80マシンガンは着脱可能なグレナード発射機を備える90mm口径のマシンガンで、登場以来終戦時まで主力実体弾兵装として使用された。

スペック比較

	221 540 771 (F1)	540 771 (F2)	771 540 (F3)
全高	17.5m	17.5m	18.0m
重量	56.2t	49.9t	41.2t
ジェネレーター	976kW	986kW	1250kW
スラスター	43000kg	53400kg	57450kg

- ◆1 F型からの大きな変更点はないが、アップリケアーマーを装着している機体も見られた。
- ◆2 胸部装甲ハッチが強化されており、脆弱性が改善されている。構造自体は（改修ではなく）最初からJ型として作られた陸戦型ザクに近い。
- ◆3 重量は約1割は軽減化が行われた。また、アフリカなどで用いられた機体も多いが、陸戦用としての改修（宇宙用との差別化）をうけているのは不明。
- ◆4 推力はF型に比べ大きく向上し、胸部のスラスターも大型化した。また、バックパックには上部にスラスターが新設されている。
- ◆5 スペック上はF型から10kWほど出力が向上しているが、これは細かい使用部品やアッセンブル方法の変更によって生じたもので、意図されたものではないだろう。



地球連邦軍のジムに 対抗すべくアップグレード

MS・06F・2ザクⅡは、一年戦争後期に製造されたモデルであり、その生産時期から後期生産型ザクⅡとも呼ばれる。

型式からもわかるとおり基本的にはF型ザクの改良バージョンだが、外観からわかる、もっとも大きな変更ポイント形状（開き方）が前期型のF型と異なる以外にも、コクピット自体もセンタリーに位置された、ジオン公国軍の規格でいう第2期生産型に変更されている。ザクⅡ登場当初から指摘されていたコクピット周辺の防御能力の不足を改善し、さらに共通規格の洗練された操縦系とすることで、パイロットの生存性を総合的に高めることとなった。

なおこのコクピット周辺の改修には、ザクⅡF2型開発当時によりやく実現に向けて動き出した統合整備計画の成果が盛り込まれている。

スベック的には、ジェネレーター出力はほぼ変わらないものの、スラスト1推力は約23パーセント向上し5万3400キロ（RX-78ガンダムの推力5万5000キロに近い値）となり、同時に本体重量も約10パーセント軽量化している。また、脚部にセントラルスターが設けられたほか、ランドセル

にもリバー方向にノズルが新設された。これらはベクトルを揃え速度を重視する一撃離脱の対艦戦向けというよりは、機体各部にスラストを配し3次元的機動を重視した方向性だ。

この改良が行われた背景には、地球連邦軍もザクⅡを上回るスベックを持つRGM-79ジムを量産モデルスライツとしてすでに投入してきており、その対策が必要だった点が挙げられるだろう。スラストは宇宙空間での戦闘はもちろん、ジャンプによる機動戦が戦術としてとられるようになって以降、地上戦においてもその重要性を増していた。戦後連邦軍によって行われたザクⅡF2型とバワード・ジムによる地上における模擬戦において、推力に劣るザクⅡF2型は、バワード・ジムに苦戦を強いられたという例は、その事を端的に表している。

モビルスーツ同士の戦闘を考慮した設計は、スラストのみならず武装にも現れている。90ミリと従来型のザク・マシンガンから小口径化し、貫通力と弾速を高めたMMP・80マシンガンは、対モビルスーツ戦を主眼に置いている武装だ。

このように、機体の仕様や武装などの要重点から見ると、F2型はF型をモビルスーツ戦向けにバランスを振りなおした機体であると結論付けることができるだろう。

ジオン公国軍残党が用いたザクⅡF2型

終戦から3年が過ぎた0083年の時点においても、ザクⅡF2型はゲリラ化したジオン公国軍残党の貴重な戦力であった。もちろんジオン公国軍は解体されておりすでに補給を受けることはできないが、樹海や戦跡をまぎれた部位同士を組み合わせ、「共食い」する形で稼働し続けることができた。アフリカにあるジオン残党のキャンパイト基地では、上半身と下半身でカラーの違う機体が見られた。ザクⅡF2型は統合整備計画の成果が一部ではあるが盛り込まれており、整備性が向上していたためにこのような運用もしやすかった。



←手前のザクⅡF2型は対空用銃を装備したMMP-78。奥の機体はMMP-80マシンガン装備。



←奥のデッキには下半身と上半身で色が異なるF2型ザクが行む、いわゆる「ニコイチ」状態である。

連邦軍が用いたザクⅡF2型

一年戦争終結後、解体されたジオン公国軍の装備を接収した地球連邦軍は、それら装備を性能評価試験や模擬戦訓練に使用している。オーストラリアのトリントン地球連邦軍基地では、推力を強化したバワード・ジムと複数のザクⅡF2型による模擬戦が行われた。また、強奪されたガンダム試作2号機を追跡する際は、ザクⅡF2型とジム改、そしてガンダム試作1号機という風変わりな編成で追撃を行ったこともある。緊急時の措置だったということもあるが、この編成はスムーズに認められており、ザクⅡF2型の能力が連邦軍パイロットにもそれなりに認識されていたことを示している。



←ペイント弾で模擬戦を行うトリントン基地のザクⅡF2型。マシンガンは旧来の120mm口径タイプを使用している。



←ガンダムとジム、そしてザクが同じ任務に重くという例もあった。戦後ならではの混成である。





ザクII最終量産型の主なパイロット

バーナード・ワイズマン

サイクロプス隊のメンバーで、FZ型に移乗しアレックスとの一戦打ちに挑む。結果は不明。



武器・装備

MMP-80マシンガン



口径を90mmとすることで弾速を速め、炸薬も改良された対モビルスーツ用マシンガン。

ハンドグレナード



投擲型の爆弾。ザク改が装備していたものは伸縮式の柄を伸ばしそこを握って投げるタイプ。

ヒート・ホーク



ザク伝統の格闘兵器だが、効率が上がっているためアレックスの頭部を一撃で断り落とした。

主兵装は大戦末期のジオン公国軍で多くのモビルスーツに用いられていたMMP-80マシンガン。ジム・コマンドを正面から撃破可能な威力を持つ上に、口径が90mmとなった分弾丸も小型化され、予備マガジンの携行もしやすくなっている。ハンドグレナードは腰部の専用マウントに3基を備える。腰の後ろもマウントになっており、ヒート・ホークやシュツルム・ファウストを装備できる。



スペック比較

	Zaku II (FZ型)	ザク改	ジム・コマンド
全高	17.5m	19.2m	18.0m
重量	56.2t	42.1t	43.5t
ジェネレーター	976kW	1440kW	1330kW
スラスタースター	79500kg	61500kg	67000kg

ZAKU II LAST MASS PRODUCTION TYPE

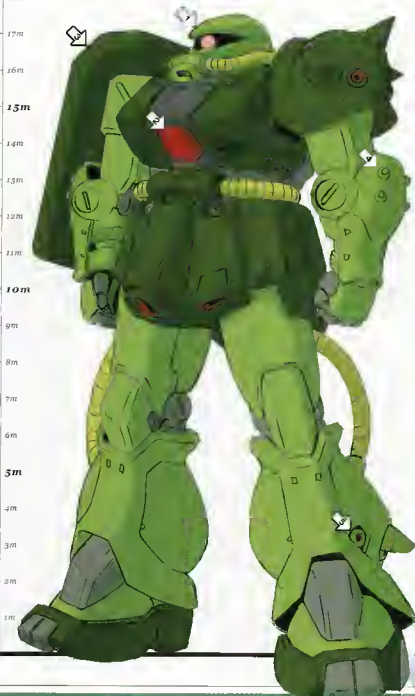
■ MS-06Fz

ザク改 (FZ型)

Spec

- 頭頂高：17.5m ●本体重量：56.2t ●全備重量：74.6t ●ジェネレーター出力：976kW
- スラスタースター能力：79,500kg ●装甲材質：超硬スチール合金
- 武装：ヒート・ホーク MMP-80マシンガン ハンドグレナード シュツルムファウストほか

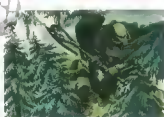
- ⇒1 これまでのザクを継襲した丸型の頭部を持つ機体が大部分だが、フリッツヘルムと呼ばれるヘルメット状の頭部になっている機体（ジオン本国防衛仕様機）もある。
- ⇒2 統合整備計画により、これまでのザクとまったく異なるコクピット構造。操作性と生存性が向上したが、ビーム・サーベルの連撃を受ければ、やはりひとたまりもなかった。
- ⇒3 F-2型までと異なり、直角ではなく二段階に折れ曲がる構造になっている。
- ⇒4 格闘戦を考慮してか、肘の装甲は大型化し小さなスパイクも設けられた。
- ⇒5 F-2型に追加された関節のスラスタースターはさらに大型化が進んだ。また、機体各部に内蔵されている姿勢制御用スラスタースターの数も大きく増えている。



統合整備計画を通し 戦況に合わせた仕様へ

一年戦争を通じて、様々なバリエーションが開発されたザクⅡだが、ザク改は戦争末期に生産された最終量産型にわたる機体だ。

大戦末期のモビルスーツであるため、機体のメーカごとに異なっていた部品やコクピット周りの規格を統一し効率化を図る統合整備計画にのっとり開発がなされている。ザクⅡF2型とは、大きく異なるフォルムをしているが、これは統合整備計画によって使用するパーツや構造が他のモビルスーツ（ゲルググJやリック・ドムⅡなど）と共用とされたため、その都合に機体構成を合わせた結果である。言い換えれば、ゲルググJやリック・ドムⅡといったモビルスーツに使われている技術が機体にフィードバックされていることになり、ザク改はザクⅡF2型と比較しても大きな能力向上を達成している。



しかし、スペックをみるとF型を統合整備計画にのっとり純粋にアップグレードさせただけではなく、という側面もつかう。

える。それはスラスター推力だ。7万9500キロと、高性能機とされたMS-14ゲルググの6万1500キロすら大きく上回る数値に設定されている。にもかかわらず全機重量はF型とほぼかわらない74.5トンであり、推力に

比して推進剤の搭載量が増えているわけではない。さうに言えば機体各部の姿勢制御用スラスターも従来機より大型化され数も増えており、これまでの水達からいえば一回の出撃での航続時間は大幅に短くなっている。

この仕様設定は、ザク改が開発された大戦末期のジオン公国の状況を考えれば納得がいく。当時ジオン公国軍は連邦軍に押されあらゆる戦線が縮小しており、防戦一方であった。そのため、モビルスーツも防空のための局地戦用機としての資質が求められ、航続距離より推力を優先させる必要があったのだ。

実際には、この追撃の役割はさらに大推力のゲルググJやリック・ドムⅡの担当となる。ザク改は真先に戦場に駆けつけるこれらモビルスーツを追う形で出撃し、推進剤を使い果たた敵機を撃つという先発隊の援護と残存敵機の掃討を行う、という運用が本来の理想的な図だ。もともと、ゲルググJは生産数が極端に少ないため、実際にはザク改がそのまま追撃の主力となる機会も多かっただろう。

ザク改の能力は？

スペック上、スラスター推力はゲルググも上回るがビーム兵装の有無とジェネレーター出力、重量では譲る。操縦性や整備性は統合整備計画以後のモビルスーツらしく良好で、経験の乏しいパイロットでも操縦しやすかった。このような扱いやすさはスペックに現れないザク改の利点だ。



↑その能力は短時間ながら重力下をホバ移動できるほど。同型に準拠を測っていたとはいえず、専らテストパイロットが操縦するアレックスと新兵のザク改が相対し合ったことも。

統合整備計画後のモビルスーツたち

統合整備計画によって開発された宇宙用のモビルスーツは、ゲルググJやリック・ドムⅡなどがある。これらはザク改と同様に、航続距離より推力を優先させた設計となっている（増補として大型の推進剤タンクも用意されていた）。また、ズゴックEやハイゴッグも統合整備計画によって生まれたモビルスーツで、操縦系の統一がはかられている。なお、ザク改はジム・コマンドのパーツを使って修理された例もある。統合整備計画を進める際、南進した連邦軍のモビルスーツに使われた部品を解析し、優れたものはコピーして採用していたのかもしれない。

MSM-03C
ハイゴッグ

MS-14
ゲルググJ





激化する戦局に 変化していくザク

モビルスーツを巨大な歩兵ととらえることで、幅広い用途を想定していたジオン軍。それは来るべき地球侵略作戦における、ザクの局地戦用機開発へと帰結する。そもそもU・C・0076年12月には、これらの構想がスタートしていたとされており、いかにジオン公国軍がモビルスーツという可能性に賭けていたかが理解できる。

とはいえ、地球上でモビルスーツを運用するということは、想像以上の困難を強いられに違いない。重力、砂やほこり、熱、湿度……、さまざまな予期せぬファクターはモビルスーツ運用の障壁となった。さらに地上に街頭保のない一年戦争の初期の段階では、適度な補給も整備も望めない。各部のメンテナンスフリー化や、整備不足による性能低下を緩やかなものとするために、各部の設計に余裕をもたせるなど、性能だけではない、稼働時間を延ばすための措置が取られたのではないだろうか。

地上専用のベースとなるMS・06J型から、砂漠戦仕様様のD型、対空用キヤノン砲装備のK型と地上専用の様々な局地専用機へと派生。異色なのは水中専用のMS・06M型であり、これは宇宙用の機密性をそのまま水中に転

用するという理由から、MS・06F型がベースとされたと思われる。

このように当初から想定にあつた局地戦用機開発の流れは、あくまでザクをベースとすることを基本としているが、ザク派生型の系譜は、また異なる潮流を生み出している。

1つはMS・06R型など高性能化を追求した流れであり、こ

れはS型に端を発し、ベースベックの底上げという流れとは別に、純粋に高性能化を追求した機体の流れである。それはザク

とは異なる高性能モビルスーツへと昇華していく流れであった。いわば、他機体開発のベース機としてのザクという側面である。これはサイコミュの試験機となったMS・06Z系がわかりやすい例となっている。

一方、実戦を経ている中で、ザクの構造が想像以上にタフで拡張性のあるものということが理解されたのか、被弾したザクを作業型に特化させたMS・06V、空同戦闘用に特化させることで、現代的な性能を獲得したMS・21Cなどが誕生していた。



↑ザクは、高度な多様な仕様が可能とされるベースとなった。

MS-06 バリエーション系

局地専用機への発展性を秘めたザクの可能性

環境の要求、そしてさらなる高性能化への要求。戦局が動くにつれ、ザクに求められる要素もさらに多様化していく。ザクは、様々な要求にこたえる可能性を秘めた機体であった。

ザクバリエーション 3つの流れ

MS-06から派生したバリエーションモデル。それらは大きく分けて3つに大別できる。
ここではバリエーションモデルの方向性をチェックしてみる。

改修型 バリエーション

MS-06V
MS-06W
MS-21C

MS-05からスタートし、多くの派生モデルが登場したザク系。それゆえ、パーツの互換性は高く、現地改修や生産拠点独自の改修が施されたモデルも多い。代表的なのはMS-06VやWである。艦船用としては使用できなくなったザクを作業や運用用として特化したこれらのモデルは、モビルスーツの原点である作業用スーツを思い起こさせる。いわば作業用特化型だ。また、MS-21Cなどは空間戦闘に特化したタイプゆえ、くくりとしては用途別バリエーションともいえる。だが最新鋭や戦役に、集められた機体を有効活用した改修型という観点から、改修型バリエーションとして分類した。



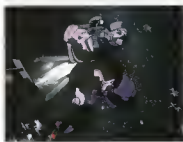
改良ポイント

- 目的房機能の付加
- 現地改修

次世代進化 バリエーション

MS-06R系
MS-06Z系
MS-11

目的別に特化したタイプではなく、性能向上によりザクの次を見据えた機体バリエーション。Z系のように新機能のテストベッドであるほか、純粋に次期主力機開発に名乗りでたR型のようなケースも。MS-06Sに就き発したザク高性能化の要望は、やがてMS-06Rへと発展。宇宙用として操縦にまで機動性を向上させた同モデルは、腕部に大型プロペラント、背面ユニットおよび両部スラスターの強化、ジェネレーター出力の向上に伴う仕様変更などが行われ、次世代もザクを予感させる。実際にリック・ドムやゲルググと時局主力機候補に名前が挙がるなど、ザクの枠を超えたモデルとなっていた。



改良ポイント

- 新機能の付加
- 次世代を見越した性能向上

用途別 バリエーション

MS-06K MS-06E
MS-06D MS-06F
MS-06M

用途に特化した機体バリエーション。地球降攻に際して薄きだされた、局地戦仕様なども含まれる。別名、マインレイヤーと呼ばれるF型バリエーションのように、専用ランドセルへ換装しただけの機体改修や、各部のマイナーチェンジから、座席をともめない改良が加えられたものも多く存在する。砂漠仕様のD型などジェネレーター冷却方式の変更や防塵対策を実施。キャノン砲装備のK型では、頭部センサーの変更なども行われるなど、結果、別モデルといえるほどの変更が施された。



改良ポイント

- 目的別機能の付加
- 環境適応のマイナーチェンジ

MS-06バリエーション系の進化

MS-06F

MS-06M
初の水中用モビルスーツ。別型式MSM-01。

MS-06R系
機動性向上を主眼に置いた次期主力候補。

MS-06J

MS-06D G系
砂漠専用や地上戦に特化。

MS-06E系
偵察型としてセンサーやカメラ機能が向上。

MS-06Z系
サイコミュ搭載型の試験機。

MS-06K
180mm キャノンに装備した対空砲型。

MS-06F
稼働数回バック装填型。別名、ザクマインレイヤー。

MS-21C
デラーズ・フリートが開発した宇宙戦用型。

他

MS-06V W
作業用の特化したタンク型。

MS-11
ベゼン計画で開発された次世代型ザク。





ザク・デザートタイプの主なパイロット

ロイ・グリンウッド

地球攻撃軍所属のエースパイロット。カラカル部隊隊長として終戦まで戦い続けた。愛機はダブル・アンテナ型。



エロ・モロエ

「青の部隊」の兵士。強化型のデザート・ザク、ゲルダグと乗り継ぎ、グレミー・トモをかい戦死。



デザート・ロンメル

ロンメル部隊の指揮官であるロンメル中佐は、一年戦争時、ロングレンジ・ライフル装備のD型で戦果をあげていた。



武器・装備

頭部バルカン

ザクFS型と同じ頭部に搭載したが、数は4門から2門に減らされている。補助武器として使い勝手が悪かったが、弾数は少なかった。



豊富な武装オプションがD型の特徴といえるが、装備だけでなく本体にもかなり手が加えられている。放熱用のヒートシンクを採用した専用のランドセルをはじめ、ラッツリバー3連装ミサイル・ポッドを装着できた左腕スモール・シールドなど、他のザクに見られない特殊な装備が多い。これらを見ると、陸戦用のMS-07Bグブに導かれていく兵器系統といえる。また、D型4機で運用するG92という組み立て式砲座も存在する。



ZAKU DESERT TYPE

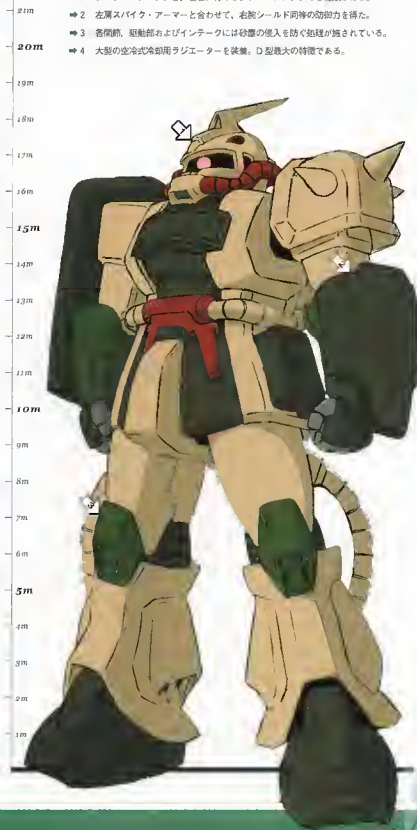
■ MS-06D

ザク・デザートタイプ(D型)

Spec

- 全高: 18.5m ● 本体重量: 48.8t ● ジェネレーター出力: 976kW
- スラスター総推力: 42900kg ● 装甲材質: 超硬スチール合金
- 武装: 頭部バルカン ヒート・ホーク 改造ザク・マシンガン、他

- 1 シングル・アンテナと、左右に付けるダブル・アンテナの2種類がある。
- 2 左肩スライク・アーマーと合わせて、右腕シールド両側の防御力を得た。
- 3 各関節、駆動部およびインテークには砂塵の侵入を防ぐ処理が施されている。
- 4 大型の空冷式冷却用ラジエーターを装備。D型最大の特徴である。



熱砂の戦場を制した 砂漠戦用装備の数々



↑戦後も現地では改修が続けられたD型。

MS・06ザクⅡF型を地球重力使用に特化したMS・06J型は、広範な地球環境に適用して成功例と評価されたが、より過酷な砂漠や熱帯での運用を想定してJ型と並行開発されたのがD型、通称ザク・デザートタイプである。D型とJ型のスペックを比較した場合、D型の重量が14パーセントも軽減されている点が目立つ。この点で考えられるのは地上戦用のJ型よりもさらに砂漠・熱帯地方という局地での運用を想定して、冷却系を中心に大胆に装備を絞り込んだということだ。D型が外見からもしっかりとわかる空冷式ヒートシンク付きのランドセルを搭載し

ているところなどは、その最たる工夫だといえる。

重量の軽減はいい事づくめだった。砂漠で戦うにしても、重量が軽い事は砂で足を取られるにくくするし、砂漠以外の戦場ではより多くの装備を搭載することができるからだ。D型は期待通りの働きを見せて、終戦まで戦い抜いたとされる。使われた戦場が砂漠中心ということもあり、砂漠戦用と呼ばれるが、地球環境下における局地戦用モビルスーツとして適切に設計された機体といえるだろう。

武装面ではクラッカーボッドや3連装ミサイルボッドなど、専用装備が多い。機体傾向としては陸戦用に特化したMS・07Bグフに近く、J型とグフの橋渡しとしてのテストベットの位置づけとも見ることができるといえる。

このように、実験機的な要素もかなり盛り込まれていたD型は、生産数が少ないこともあり、過酷な環境である中東やサハラ砂漠などに投入された。アフリカは連邦軍にとって副次的な戦線だったため、小規模な戦闘が中心であり、これがD型の優秀性を際立たせることになった。現場の兵士たちから信頼を得たD型は、戦争終結から8年経過後の第一次ネオ・ジオン戦争の頃まで改修を続けられ、デザート・ザクと名前を変えつつ、第一線で戦える力を備えていた。

バリエーションモデル



一年戦争終了後、アフリカのジオン公国軍現況が用いていたD型の改修機体。細々とした供給資材や戦術物資を元に、時代にに合わせて武装強化をすることともに、ジェット・スキーなどの砂漠戦用装備や、プロペラントを添設して、一線でも使用できる機動方向上に努めていた。

MS-06D
デザート・ザク

MS-06Dの実戦運用



MS-09H
ドワッジ改

D型の活躍はアフリカ戦線で際立っている。砂漠戦のエキスパートとして連邦軍に恐れられていたロンメル中佐は、一年戦争時は、ロングレンジ・ライフフル装備の専用D型を駆って部隊指揮をしていた。即部隊で敵を待ち伏せポイントに引きつけ、一斉射撃で敵を殲滅するというゲリラ戦術を得意としていた。これも砂漠での運用を前提としたD型だからこそ、砂の中に潜り込んで待ち伏せる過酷な作戦が可能だったのだらう。第一次ネオ・ジオン戦争時、8年間の離れの間は、専用のMS-09Hドワッジ改を乗組としていたが、彼が率いるロンメル部隊の主力としてMS-06Dデザート・ザクは健在で、ガンダムチームに敗れこそしたものの、得意の待ち伏せ戦法で窮地に追い込んだ。ゲリラ部隊の面目躍如といえる。





Z A K U C A N O N

■ MS-06K

ザクキャノン

Spec

● 全高: 17.7m ● 全重量: 59.1t ● ジェネレーター出力: 976kW
● スラスター総推力: 41000kg ● 装甲材質: 超硬ステール合金
● 武装: キャノン砲 2連装スモーク・ディスチャージャー、他

ザク・デザートタイプの主なパイロット

アイン・グレーデン

ラビット・タイプと呼ばれる2本アンテナを装備したザク・キャノンを駆り、100機を超える航空機、軍用モビルスーツを撃破した「先鋒の名手」である。一説にはニュータイプであったとも言われている。キャリホルニア・ベース攻防戦に参加し、制圧した同基地の支援戦隊MS中隊指揮官となる。戦後のバーソナルマークを乗機に描く。最終階級は中尉。



武器・装備

180mmキャノン砲

右腕に装備している、実体弾を用いたキャノン砲。当初はより長砲身の対空砲の搭載を考えていたが、バランスの問題や運用の相応さを考慮して、180mmキャノン砲になった。



キャノン砲は強力な反面、換弾弾数が少なく、また自力での弾倉交換ができなかったために、中へ長距離支援や遠蔵が確保されている場合、他のモビルスーツが弾倉交換に協力していたという。



- ➡1 モノアイは360度回転できるが、後方は速度を維持するためにステーが多くなっている。アンテナ形状のサブ・カメラも搭載している。
- ➡2 機体の重量バランス悪化を押しでも、右腕全体を覆うシールドを採用した。
- ➡3 機動性の向上とキャノン砲射撃時の衝撃吸収のために、胸部に強力な補助スラスターを装備。
- ➡4 砲と一体化した特製仕様のランドセル。J型とは形状が大きく異なっている。
- ➡5 足関節の対位置に装備。部隊の撤退支援や、自身の退避時に使用する。



高性能キャノン砲で
前進する友軍を支援

地球侵攻作戦を前に、ジオン公国軍
の中では早くから連邦軍の強力な制空
権に対抗する手段を模索していた。そ
の一つの答えとして開発されたのが
MS-06Kザクキャノンである。

ジオン軍はドップによって航空戦力
の差を埋めようとしたが、ドップは高
性能ながら、航続距離が短く、なによ
り連邦軍に比べて数が少なかった。そ

くて、強力な対空能力を持ったザクを
随伴させて、敵の空からの侵攻を無力
化しようと考えたのである。

ジオン軍では最初、対空砲とランド
セルを組み合わせて、これを「型」に搭
載する計画を進めていたが、期待する
ほどの性能得られなかった。そこで、
高初速で弾道伸性に優れた180ミ
リキャノン砲を搭載する計画に変更し、
右肩にランドセル一機型のキャノン砲
を搭載した案へ改められた。これが
MS-06Kザクキャノンである。搭載
される砲は、対空作戦だけでなく水平
射撃による効果も期待されていたため、
地上戦においてもザクの支援機として
広範囲に使用が可能だった。モノアイ
を全周型に改修、頭頂部はサブカメラ
も搭載して、情報収集性能の向上を果
たしている。また、火器管制システム
も専用のものが搭載されていたと考え
られる。

本機の完成は地球降下作戦の後、キ
ャリフォルニア・ベースにおいてであ
った。生産数は少ないものの、対空、
対モビルスーツともに、それなりの効
果を発揮し、イアン・グレーデンなど、
エースの乗機としても知られる。戦後
では、連邦軍に接収され、グリプス戦役
では、宇宙巡洋艦ハリオのデッキ内に
宇宙戦用に改修されたザクキャノンが
確認できるように、ジム・キャノンⅡ
の新型機投入後も使用され続けた。

MS-06Kの実戦運用と派生型



MS-06K ザクキャノン。その特徴は、右肩の180mmキャノン砲
に集約されている。おおまかに砲は、対空砲、野砲（榴弾砲）、
キャノン砲の3種類がある。対空砲は高速で撃ち出された砲弾
が、限りなく直線に近い弾道で目標に直接命中する。野砲は山
なりの弾道を描き（曲射）、爆発力で命中付近一帯を破壊する。
キャノン砲は両方の用途を兼ねる。したがって、ザクキャノン
が対モビルスーツ戦の支援以外にも、幅広い任務を期待され
ていたことがわかる。また、東南アジア戦線では派生型も確認
されている。こちらはトーチカのように使用されており、ラン
ドセルには砲撃装置が付き大型化している。また後期にな
ると、近接戦利用のビッグガンを搭載するが、これらの装備は
ジオン軍の戦況悪化の証とされるだろう。

vs ジム・キャノン

設計強度の都合から反動が小
さい360mmロケット砲を搭載
していたので、拠点攻撃には
該群の火力を発揮した。初速
が速いロケット砲は、モビル
スーツ戦には使い勝手が悪か
ったと思われるが、ジム用装
備を併用することで使用しに
できた。右肩キャノンのウェ
イトバランスの悪さは、後に
西前線配備のジム・キャノンⅡ
で解消された。



RGC-80
ジム・キャノン



ザク・マリンタイプ(主な配備部隊)

シーサーベント隊

北大西洋の部隊。同隊で試験後、生産機7機は5つの各潜水艦部隊に分散配置された。試験後の配備数は2機。



グリーンサイレン

南大西洋で活動した部隊。配備数1。



ナーガ軍

“赤い蛇”の異名をとる太平洋の潜水艦部隊。配備数1機。



武器・装備

60mmバルカン

ザク・マリンタイプの腰部に装備される火銃。上陸戦闘時の掃射用兵器として運用された。



サブロック・ガン

M6-G240 mm ロケットを4発内蔵した、射撃兵器。艦船、潜水艦が相手には充分な性能だ。



開発開始後のコンセプト変更に伴って、水中モビルスーツの実験機となったために、総じて火力は貧弱である。しかし、対艦戦では充分な威力を発揮できた。



ZAKU MARINE TYPE

■ MS-06M

ザク・マリンタイプ(M型)

Spec

◎頭頂高：17.5m ◎本体重量：43.3t ◎全備重量：60.8t ◎エンジン出力：951kW
◎スラスター総推力：66000kg ◎装甲材質：超硬スチール合金
◎武装：サブロック・ガン/ 60mmバルカン 240mm 4連装ロケットポッド、他

- ⇒1 水中での取り回しや流体を整えるため測シールドは排され、スパイク付きショルダーアーマーとなった。
- ⇒2 水中での姿勢制御のため、両腕先端と胸部後方に補助推進ユニットを装備した。
- ⇒3 水中で使用するため、ハイドロジェットエンジンに換装していた。
- ⇒4 水中での作戦行動を考慮して、各関節部分には耐圧装置が施されていた。





連邦軍にも愛された 水中戦用実験モビルスーツ

地球侵襲作戦の行方により大きく影響する制海権を奪うため、海上戦力がほぼ皆無だったジオン公国軍は水中戦用モビルスーツの開発に着手した。それがザクF型ベースのMS・06Mザク・マリナータイプである。いくらか状況に応じた追加装備や改修による汎用性の高さをうけにしたザクFといえ、水中戦用への改修はいささか荒唐無稽に思える。

だが、もともと宇宙で使用していたザクはコピットまわりの気密性が高い。ランドセルをハードロジエットエンジンに改造し、デッドウェイトになる四肢に姿勢制御用スラスターを設けるなどの改修によって、水中でも高いポテ

ンシャルを発揮できるという期待があった。こうして、あらたに水陸両用モビルスーツというカテゴリーが誕生し、ザク・マリナータイプにはMSN・01という型式番号が与えられた。

実際の改修作業は難航し、手間の多さから製造は7機で打ち切りとなった。しかし、この時のデータはザクをベースとしたMSM・04アッガイや、メーカーは連入と、他の水陸両用モビルスーツの開発にも貢献した。

戦力としては微々たる06M型だが、戦後、連邦軍はこの機体を高く評価し、接收した機体に改良を加えて制式化した。ゴッグやズゴッグなどの水陸両用モビルスーツも同時に接收されたはずだが、大規模な敵がいないう状況で港湾の周辺海域警護などの用途ならば、ザクベースの機体の方が融通もきいたはずだ。後継機となるRMS・192Mザク・マリナーにも同じ傾向が見られる。着脱式ハードロジエット・エンジンや、脚部のサブ推進ユニットを外した際に現れる関節には耐圧防水シーリングが見られず、ザクそのものの、ジェネレーターの刷新やサブロッドの標準装備などによって、機動性と攻撃力は上昇しているが、機体構造だけならば、一種の流行と見ることもできる。潜水艦から出撃する必要があるとき、浅海面での使用に限定すれば、こうした簡素化も当然の流れなのだろう。

バリエーションモデル

ザク・マリナータイプを接收した地球連邦軍は、同機を元にザク・マリナーを開発し、沿岸警備に用いていた。戦後、連邦軍では、さほど海軍力が必要ではなかったが、水中戦に特化したような機体改修は行われず、原機の耐圧防水シーリングを簡略化している。モビルスーツの全量型への変更などは、戦闘能力の向上を図ったのだろう。

RMS-192M ザク・マリナー

- 全高：17.6m
- 本体重量：48.8t
- ジェネレーター出力：1,440KW
- ハードロジエット駆動力：6,600kg
- 装甲材質：チタン合金（一部ガンダリウム合金）
- 武装：サブロッド、ガンマグネット、ハイドロコイル、他

MS-06Mの実戦運用



一年戦争に勝利した連邦軍は水陸両用モビルスーツに関する情報を多数得たが、採用したのはMS-06Mザク・マリナータイプだった。海ではパトロール程度の任務しかなかったのだ。運用はグリプス戦役まで続いている。地球に降下したエゥーゴのモビルスーツ部隊ともニュー・オンコンで交戦している。この時の機体はマリナー・ハイザックだが、コクピットをハイザックと共通にしたこと以外は、ザク・マリナータイプから大きな変化はない。ガンダム Mk. IIとの戦いでは、スペック上は極めて不利な相手にも関わらず、巧みな連携作戦で善戦した。彼々の機体の低性能をカバーするために働いてきた戦術なのだろう。



ザク高機動型の主なパイロット

黒い三連星

ジオン突撃機動軍第7師団所属で、ルウム戦役にて連邦軍のレビル将軍を捕らえたことで知られる3人のエースパイロット。ジェット・ストリーム・アタックという連携戦術を得意とし、地球に降りるまでの間、突撃したR1A型で連邦軍艦隊を翻弄した。ホワイトベース追撃戦のため、オデッサ作戦に参加していずれも戦死。



ガイア

シン・マゾナガ

ドスル・サビ中尉の護衛を務めるほどのエースパイロット。「白狼」として知られる彼の機体は、はじめて一般に公開されたR1A型である。最終階級は中尉。



エリック・マンスフィールド

モビルスーツ整備数156機、艦船整備数3隻（ジオン公国軍歴代4位）のスコアを挙げたといわれるトップ・エースの1人。グレー塗装のR1A型に搭乗。最終階級は中佐。



マサヤ・ナカガワ

ア・バオア・クー要塞のEフィールド防空大隊に所属。茶と黄に塗装したR1A型で知られる。ア・バオア・クー戦時まで生存していたといわれるが、その消息は不明である。



武器・装備

高機動性の獲得を目指していたR1型は、F型のランドセルを根本的に設計し直している。冷却ユニットがあった上部をプロペラントに置き換えて、スラスターを下部に集中することで、機体の背面全体を大型の複合スラスターに変えている。武装面における携行火器などについては、特に新しい変化はない。また、エース配機種のスパイク形状や細部のモールド、アンテナなどで細かな差違が見られるものの、これもデザイン上のものだろう。

ZAKU HIGH MOBILITY TYPE

■ MS-06R-1A

高機動型ザク(R1型)

Spec

● 全高: 17.5m ● 本体重量: 56.8t ● ジェネレーター出力: 1012KW

● スラスター総推力: 49600kg ● 装甲材質: 超硬ステール合金

● 武装: ヒート・ホーク/ザク・マシンガン ザク・バズーカ、他

- 1 下部にスラスター、上部にプロペラントを集中した新設計のランドセルを搭載。
- 2 大腸内部にプロペラントを増設した結果、関節の可動範囲が減少した。
- 3 増設用ブースターを左右の脚部ユニットに3基ずつ搭載し、速度向上を図る。
- 4 当初はF型をベースにしていたが、高速対応設計を量産うちに別物となった。

21m
20m
19m
18m
17m
16m
15m
14m
13m
12m
11m
10m
9m
8m
7m
6m
5m
4m
3m
2m
1m



由緒正しい高機動型ザク

MS-06R-1 ザク高機動型

ジオン公国軍の主力モビルスーツというだけあって、ザクとそのバリエーション機には様々な説が流布している。しかし、例外的にR型はプロトタイプ機も含めて、開発時期や生産機数の詳細が判明しているものが多い。それだけに軍の期待や苦労も大きかったのだろう。



高機動型ザクの育ての親

MS-06RP 高機動型ザク プロトタイプ

エリオット・レムは、ジオニック社出身のテスト・パイロットで、開発に携わる内にパイロットを務めるようになった。MS-05 ザクIから一貫してザク系モビルスーツのテストをはじめ、MS-06RP ザク高機動型プロトタイプや後継のR2タイプの開発に従事した実戦経験はないが、モビルスーツ開発に大きく貢献している。



MS-06Rの実戦運用

エースパイロットに優先的に配備された高機動型ザクは、まさに一騎当千というにふさわしい。連邦軍にモビルスーツが登場するまで、ジオン軍では5隻以上の艦船を撃沈したパイロットをエースに認定している。そんなエースたちが手にした高機動型ザクは、連邦軍の忌むべき敵だったに違いない。戦争後半になると、高機動型ザクはMS-09R リック・ドムと一緒に部隊を編成するようになった。パイロットの技量も相まって、恐るべきモビルスーツ部隊だと言える。エースの多くは後にMS-14 グルググを愛用しているが、彼らが高機動型ザクで対モビルスーツ戦闘をした初期は意外短い。だが、本機に完熟していた彼らはグルググを使いこなすのに問題はなかった。

R型の開発に際してベースにしたのはF型だが、ポイントは高機動性の追求にあった。まず開発チームが着手したのはフンドセルの増強である。これには単なるスラスターの出力アップにと

対をなしていると言える。R型の開発に際してベースにしたのはF型だが、ポイントは高機動性の追求にあった。まず開発チームが着手したのはフンドセルの増強である。これには単なるスラスターの出力アップにと

高速性能を追求した 宇宙戦用ザク

高機動型ザクと呼ばれるR型の開発は、一年戦争が勃発してからわずか1ヶ月ほどで始まっている。これは、ザクのセールスポイントだった汎用性が、宇宙空間での性能向上の足かせになることが判明し、改めて宇宙戦に特化した機体の必要との声が上がったためである。地球仕様のJ型が求められたのと対をなしていると言える。

どうも、機体背面すべてを推進システムに変えるほどの大型フンドセルが生み出された。

R1A型である。これは高機動型ザク初期型とも呼ばれ、R型の主流機としてエース・パイロットに優先的に配備された。

こうして一応の完成形であるR1型がまとまった。しかし高機動化は推進剤の膨大な消費を招き、プロペラントの増量にもかわからず、稼働時間が短かかった。そこで推進剤をカートリッジ化して充填作業の短縮を図ったのが

増進用フンドセルを装備したのである。F型の姿勢制御スラスターに変えて、増進用フンドセルを装備したのである。F型の姿勢制御スラスターに変えて、増進用フンドセルを装備したのである。F型の姿勢制御スラスターに変えて、増進用フンドセルを装備したのである。

ところが高機動型ザク初期型は、スラスター部の生産効率が悪すぎて、ジオン軍が生産に本腰を入れないにもかかわらずR1、R1Aは合計で78機しか生産できなかった。結局、MS-09R リック・ドムが登場するまで、宇宙に展開するザクはほとんどがF型のままだった。R型は多少の不具合を補ってあまりある高性能機であり、エース・パイロットにより、その名を大いにあげた。もし十分な数が供給されていたら、戦争後半の様相はだいぶ違っただろう。

ところが高機動型ザク初期型は、スラスター部の生産効率が悪すぎて、ジオン軍が生産に本腰を入れないにもかかわらずR1、R1Aは合計で78機しか生産できなかった。結局、MS-09R リック・ドムが登場するまで、宇宙に展開するザクはほとんどがF型のままだった。R型は多少の不具合を補ってあまりある高性能機であり、エース・パイロットにより、その名を大いにあげた。もし十分な数が供給されていたら、戦争後半の様相はだいぶ違っただろう。





ザク高機動型 (R-2) の主なパイロット

ジョニー・ライデン

MS 型番号 185 機、艦船型番号 6 機 (ジオン公国軍型代第 3 位) の記録を持つトップ・エース。ジオン突撃機動軍キマイラ隊に所属。RIA 型配備の人選からは漏れたものの、R2 型を受領する栄誉に恵まれた。深紅に塗られたその機体は、彼の真名である「真紅の稲妻」とともに、R2 型の象徴としてあまりにも有名な。



ギャビー・ハザード

MS 型番号 138 機、艦船型番号 2 機 (ジオン公国軍型代第 6 位) のスモークを敷える、突撃機動軍のエース・パイロット。機体を黒と茶のパーソナルカラーで塗っている。記録などの散逸から詳細は不明だが、最終階級は中佐である。



ロバート・ギリアム

MS 型番号 115 機、艦船型番号 6 機の記録を保持。黒と黄色の奇抜なパーソナルカラーで塗装した機体で知られている。ソロモン駐留中に本拠を侵襲し、グラナダへの戦力転送に向かうものの、それ以後の記録は不明。最終階級は大佐。



武器・装備

完成した R2 ザク高機動型は卓越した機動性を獲得し、「ザクの皮を剥ったゲルグ」との高評価を受けた。武装面においても、安定して供給が受けられる MS-06 系統の火器を装備しており、それ相応の働きをしたことは想像に難くない。また、当初からビーム兵器搭載なども予定はされていた (事実、R2P や R3 型では試験もされていたという)。しかし、トータルで見ると、決して生産コストに見合う機体とは言えず、資源と労力の浪費に過ぎない機体だった。

ZAKU HIGH MOBILITY R-2 TYPE

■ MS-06R-2

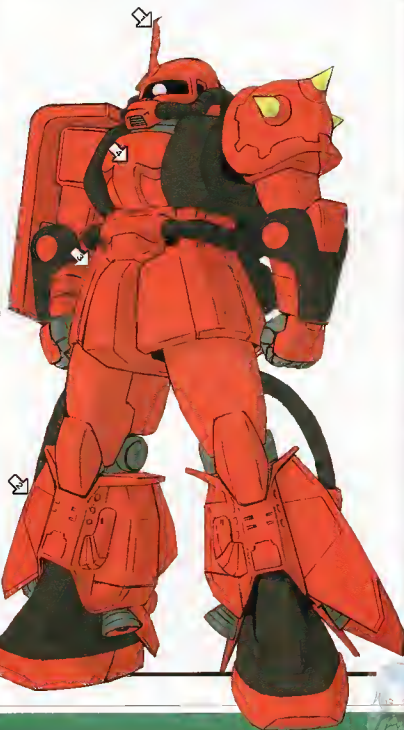
高機動型ザク(R2型)

Spec

● 全高: 18.0m ● 本体重量: 58.2t ● ジェネレーター出力: 1,340kW
● スラスター総推力: 60,000kg ● 装甲材質: 超硬スチール合金
● 武装: ヒート・ホーク ザク・マシンガン ザク・バズーカ

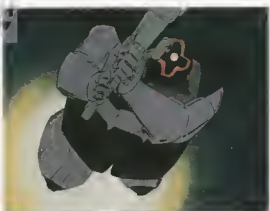
- ⇒ 1 指揮官識別用のアンテナブレードではなく、飾りという取もある。
- ⇒ 2 スラスターのノズルを保護するようにフェアリングが追加された。噴流の制動効果もあっただろう。
- ⇒ 3 機体材質は高品質化された。量産機には使われない高価な資材も用いられた。
- ⇒ 4 シートが移動してコックピットに収納される従来の移動搭乗式から、直接対峙式となった。

21m
20m
19m
18m
17m
16m
15m
14m
13m
12m
11m
10m
9m
8m
7m
6m
5m
4m
3m
2m
1m



4機しか作られなかった スーパーカーのようなザク

一年戦争の後半になると、ジオニックス社はさらなる高機動型ザクの開発に着手する。今回はザク系では初となるビーム兵器の搭載に挑戦。開発中のゲルググ用試作ジェネレーターを使うことで、ビームの使用を可能にするはずだった。しかし、実作業に入ると機動性の向上とビーム実用化の両立が難しいことが分かり、1機だけの試作(MS-06R・2P高機動型ザク・ビーム兵器搭載型)にとどまった。したがってMS-06R・2としてロールアウトしたのは2号機以降ということになる(ビーム搭載型は後にR2型に改修さ



↑ R2型のライバルであるリック・ドム

れた。

R1A型と比較した場合、R2型が大きく違うのは、大腿とランドセルにタンクを増設し推進剤搭載量が18パーセントも上がったことである。本体重量は1.4トンほど微増しているが、これは推進剤増量分と考えていいだろう。詳しいデータはないが、不安定な出力に手を焼いたR1A型に比べれば、戦争後半の機体であるR2型のスラスターの方が燃費効率でも優っていたのだと思う。

外見では、R1A型が脚部スラスターのノズルが露出していたのに対し、R2型ではフェアリングで覆われるようになったのが特徴だ。形状から見て防弾だけでなく噴流制御も兼ねていたと思われる。

結局、R2高機動型は次期主力モビルスーツの選考においてMS-09リック・ドムに敗れ、生産は4機で打ち切りとなった。高性能機ではあったが、コストパフォーマンスの悪さが嫌悪されたといわれている。だが、同じ高機動を売りとするなら、高性能なザクよりも、はじめから用途に特化していったという可能性もあるだろう。完成した4機のうち1機はゲルググの先行試作機となり、残り3機はエース・パイロット専用機としてジョニー・ライデンらに与えられた。

R型の高機動実験派生機

高機動性能を目指したR型には、前項で見たとおりR1AとR2の2種を中心に、RPからR3までの6つのサブタイプが存在する。この中でユニークなのが、開発当時は「ザクⅢ」と呼ばれていたR3S型の高機動型ザク、別名ゲルググ先行試作型だ。その名の通り、ゲルググのテストに用いられた機体で、パーツ一部ゲルググから流用している。ジェネレーター出力が向上しているので、ビーム・ライフルも操行できた。しかし、R3Sはデータ取りまで役を解かれ、ゲルググの機体設計自体は白紙から行なわれたらしい。他にもR型のパーツを流用したMS-06RD-4ザク高機動型がいるが、これはドムの宇宙転用実験機なので、本来のR系からは外れた存在とも言える。



MS-06R-3S
高機動型ザク

vs. リック・ドム

R2高機動型ザクは、いくつかの性能で競合機MS-09R リック・ドムを上回っていたといわれているが、生産性の高さが決め手となり競争試作に敗れた。しかし、4機の安機のうち3機が名だたるエースたちの手に渡った事が、この機体の名を語るといふ皮肉な結果となった。



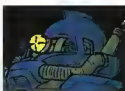
↑ 結果としてザク高機動型は、リック・ドムとのコンペに敗れている。財力的にも厳しかったジオン公団の台所事情も反映されているのかもしれない。



武器・装備

頭部カメラ

MS-06と比較しても特徴的な頭部カメラユニット。大口径のカメラを主体に各種観測センサーが備わっている。



肩部カメラ

両肩にはシールドの類は取り付けられておらず、カメラ類が搭載されている。



カメラ・ガン

正式名称 CE-16T。一見するとハンドガンのようなが、偵察用のセンサーが搭載されており攻撃力はない。



偵察能力は高いので、滅多に不意を打たれることはない。しかし、敵に接近を許してしまった時は武装の欠如が響き、まったく無力な機体だっただろう。

MS-06E 連邦軍カラー



→戦後は連邦軍に俘虜され、近代化改修を受け、同じような偵察任務にあたった機体もある。その際には RMS-106 ハイザックと同型のシールドを装備している。



ZAKU RECONNAISSANCE TYPE

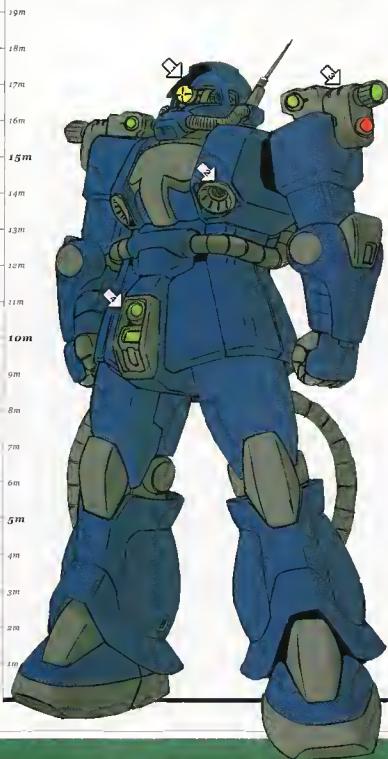
■ MS-06E

ザク強行偵察型(E型)

Spec

● 頭高: 17.5m ● 本体重量: 60.4t
● 装甲材質: 超硬ステール合金 ● 武装: カメラ・ガン

- ➡ 1 モノアイズリットガラスカバーを外し、外部に一部が露出する大口徑望遠カメラを搭載した。
- ➡ 2 左右の肩部に緊急離脱用として大型バックバーニアを搭載した。
- ➡ 3 ショルダーアーマーを外して、替わりに左右方向への監視用カメラを搭載した。
- ➡ 4 腰部関節ブロックを前方に伸ばして作ったスペースにもカメラを増設した。



過酷な偵察を可能にした トップクラスの機動性

宇宙まで戦場が広がり、ミノフスキー粒子が従来のテクノロジーを激変させてしまった宇宙世紀の戦争では、直接の偵察の重要性はそれ以前よりもさらに高くなった。この時代、偵察の手段は光学カメラによるものとなったが、当時の兵器体系の中でも防衛力と機動力に優れたザクは、偵察機としてもつづけており、開戦当初からカメラを装備したC型が投入されていた。当然、観測対象である敵にかなり肉薄する必要があり、少なからず損害が出た。この運用実績をもとに、C型をベースに偵察用として開発されたのがMS-06Eザク強行偵察型である。

強行偵察型とあるが、一定の交戦を前提とした機体ではなく、あくまで情報を持ち帰ってくるのが重視されたので、武器は一切持たず、その分を推進力の増加に当てられていた。捜索能力を上げて常に先に敵を発見し、自身に脅威が迫ったと判断した時点で高速離脱を図るという考

えだ。E型は頭頂部まで可動範囲を拡大したモノアイシステムに大口徑望遠カメラを搭載した他、両肩カメラ、腰部カメラを装備し、カメラ・ガンまで持っている。機体固定カメラの可動範囲は不明だが、全システムによって360度全面に近い範囲を監視および記録可能で、モノアイカメラが重点を精査したと考えられる。

やがて光学カメラだけの観測には限界があることが判明し、戦中中期にはリーダーや超音波、ミノフスキー粒子の測定能力を追加したMS-06E-3ザクフリッパーが登場した。頭部カメラがより高性能な三眼式になったこと、複合探知システムを組み込んだ改造型ランドセルを装備したのが変更点である。

E型は地球にも送られているが、地球大気圏内では高速離脱用のバックバニアも活かしにくい。偵察任務は宇宙よりも困難だったろう。

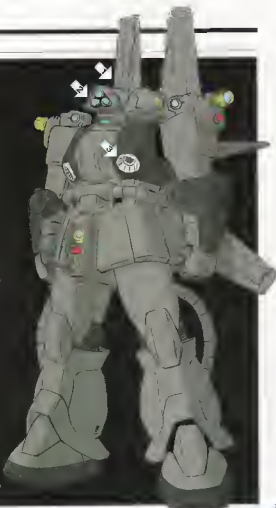
戦争後期にはE型共通の増速用フースターやプロペラント・ユニットが次々に用意されるようになる。これは連邦軍にもジムの配備が進み、戦力が充実してきたことへの対応も兼ねていていると思われる。E型が置かれた環境がより厳しくなったということだろうが、その効果には一定の評価はあったようで、戦後、残存したE型は連邦軍に接収され、そのまま運用された。

バリエーションモデル

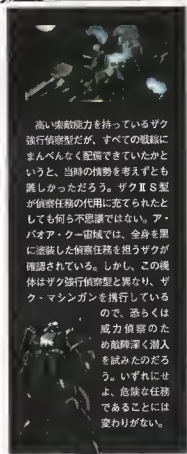
MS-06E-3 ザクフリッパー

強行偵察型の性能向上機で、光学カメラを三眼化し、高度な複合探知システムを組み込んだ改造型ランドセルを装備している。その特異な外観、センサー稼働時のユーモラスな動きから「フリッパー」と呼ばれ、そのままE3型の愛称となった。従来の光学情報の他に、レーザーや超音波を利用した高度な情報収集能力を持っていた。一部は地上でも運用されたとされるが、戦局悪化のおり、ザクフリッパーの能力でも損害は避けられなかった。

- ※1/性能向上型であるE3型のランドセル。6枚の翼状のパーツは、探知システム用のブーム・センサーである。
- ※2/E3型最大の特徴ともいえる3眼式カメラ。索敵能力の向上を図った。
- ※3/胸部バニアや腰部のカメラユニットなど、E型と同型の装備も多い。



ザク強行偵察型とは別機体?



高い索敵能力を持っているザク強行偵察型だが、すべての戦線にまんべんなく配備できていたかというと、当時の情勢を考えずとも異なっただろう。ザクII S型が偵察任務の代用に充てられたとしても何ら不思議ではない。ア・バオア・クー宙域では、全身を黒に塗装した偵察任務を担うザクが確認されている。しかし、この機体はザク強行偵察型と異なり、ザク・マシンガンを持している。このため、恐らくは威力偵察のため敵陣深く潜入を試みたのだらう。いずれにせよ、危険な任務であることには変わりがない。





Z A K U T A N K

■ MS-06V

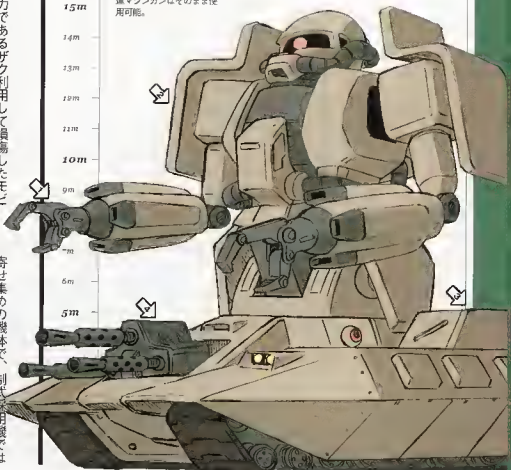
ザクタンク

Spec

● 全高: 14.7m ● 本体重量: 53.8t ● 武装: 3連マシンガン

- ※1. 腕部マニピュレーター、狭み込んで物をつかめる構造になっている。クレーンアームやビーム砲に換装された機体もあった。
- ※2. 上半身はザクのものそのまま使用されている。ザクIIだけではなく、ザクIの上半身を使用した機体も多い。
- ※3. 車体下部は、ジオン軍の戦車マゼラ・アタックの基部、マゼラ・ベースがほぼそのまま使用されている。
- ※4. マゼラ・ベースの3連マシンガンはそのまま使用可能。

18m
17m
16m
15m
14m
13m
12m
11m
10m
9m
8m
7m
6m
5m



偏した機体を流用して
誕生した作業用機

地球降下作戦を成功させて広範圏を占拠するなど、戦況を有利に進めたジオン軍だったが、モビルスーツ・ザクも少なからず損害を出していた。また、占領地域のインフラ再開や、防衛拠点構築などのために、マンパワーとともに、大型の土木作業用の機体も大量に必要とされていた。一部の地域では、

主力であるザク利用して損傷したモビルスーツの回収作業や、土木作業に使用していたが、補給などがままならない用途に使うわけにもいかず、大型の作業機は必要だった。そんな中、最前線において応急的に戦闘で損傷したザクの土半身と、砲塔部のマゼラ・トップを失ったマゼラ・ベースを組み合わせ、汎用の作業用機体が建造される。MS-06Vザクタンクである。

寄せ集めの機体で、制式採用機ではなかったが、地上における無限軌道車の安定性、モビルスーツの汎用性が合わさることで、作業用機体としては十分な性能を有し、意外に重宝されることとなった。

一方で、腕部などを武器に換装し、トーチカ代わりに拠点防衛用として配備された機体もあったという。一年戦争後も重機代わりに長らく稼働した機体もあった。

ジオン公国無限軌道兵器の母 ザクタンクとヒルドルブ



同じようにキャタピラの車体を持ち、モビルスーツの上半身をもつ機体にモビルタンク、ヒルドルブがある。だがその目的、戦闘力、そして実際の運用実績も大きく異なっている。ザクタンクは、地上降下後のジオン軍が、土木建設の重機的使用の必要性の中で誕生した。一方のヒルドルブは、軍が想定した地上戦において、自主砲と戦車の役割を兼ねる戦闘兵器として期待された。しかしザクIIが地上戦においても有用であることを示し、ヒルドルブの活躍の場は無いに等しい状況となってしまった。そしてヒルドルブよりも、生産に資源も時間にもかからないマゼラ・アタックが量産され、それがザクタンクの誕生に繋がったこの発想の影には、アイデアとしてのヒルドルブという機体の存在があったと考える事も出来るだろう。

ザクタンクのバリエーション



- ↑こちらは後に塗装されたMS-06V-8ザクタンク。別名グリーンマカクと呼ばれる機体で密林の偵察に用いられためアームが異なる。
- ↑一年戦争後期に、東南アジア戦線に配備されていたザクタンク。ブルドーザープレートが前面に装着。両脇はクレーンアームに換装されている。



WORKER ZAKU

■ MS-06W

作業用ザク

Spec

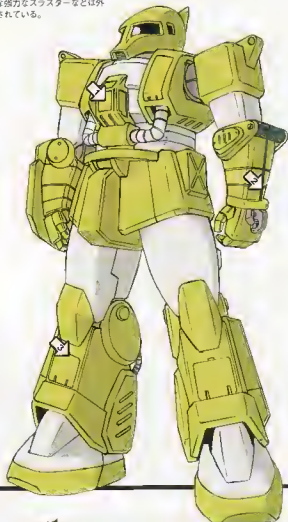
● 全高 17.7m ● 本体重量 51.8t

⇒ 1 MS-05 ザクIの機体を利用。MS-06 ザクIIを利用した機体もあった。戦闘を考えているため、装甲などは外されている。またコクピットの操縦装置などを、作業用機に準じたレイアウトにした機体もあった。

⇒ 2 胸部は基本的にザクのままであるが、フィンなどを装備することもできた。

⇒ 3 腕部は、戦闘に不必要な強力なスラスターなどは外されている。

20m
19m
18m
17m
16m
15m
14m
13m
12m
11m
10m
9m
8m
7m
6m
5m
4m
3m
2m
1m



汎用機としての特徴を生かした作業用バージョン

モビルスーツの開発には革新的技術だけでなく、それまでの宇宙開発などで培われた、機械工学やロボット工学の技術もかんに活かされている。そうした集大成により、汎用機として高い完成度を持つに至ったのだ。

そうした背景を持つザクだけに、戦闘だけでなく、宇宙空間での様々な作

業に対応する性能は有していた。

はじめは純粋に戦闘兵器として使用されていたザクであるが、地球降下作戦が実行され、地上に降りたジオン公国軍は、想定外に占領範囲を拡大。それにより基地などを建設する建設重機の不足という状況が発生する。

戦闘用のザクを土木建設任務で使う場面もあったが、基本的に戦闘用機体の仕様は戦力低下を意味しており、問題となっていた。そこで旧型となった

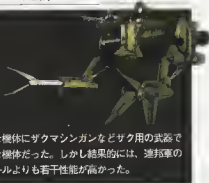
ザクIや、損傷したザクIIを改修して、

作業用の機体にしてしまおうという案が持ち上がった。そうして誕生したのが作業用ザク、通称ザクワーカー（仮の機体番号MS-06W）である。

装甲や戦闘用の装備を外され、作業用の腕などに換装された機体がアジアやアフリカ戦線で使用されたという。またソーラーレイ建造時には、マニピュレーター付きランドセルを装備したザクも登場し、運用されている。

パーツ流用で開発されたモビルボット・オグゴの悲劇

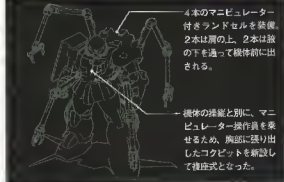
一年戦争の終盤、迫り来る連邦軍に対してジオン軍が投入したのが作業用ボットを改造したモビルボットである。オグゴは余剰となった地上用ザク（J型）のジェネレーターなどのパーツを使い、ドラム缶のような機体にザクマシンガンなどザク用の武器で武装したという、急造廉価な機体だった。しかし結果的には、連邦軍の同じモビルボットであるボールよりも若干性能が高かった。



MS-06MP マニピュレーションシステム搭載型ザク

4本のマニピュレーター付きランドセルを装備。2本は肩の上、2本は股の下を造って機体前に出される。

機体の後部と別に、マニピュレーター換作業を果せるため、胸前に張り出したコクピットを新設して複座式となった。





ZAKU PSYCOMMU TEST TYPE

■ MS-06Z

サイコミュ
試験型ザク

Spec

●頭頂高 17.7m ●本体重量 60.4t ●武装 有線式5連装メガ粒子砲×2

モビルスーツへの
サイコミュ搭載に挑んだ試作機

ミノフスキー粒子散布下においても、遠隔操作による攻撃を可能にするサイコミュ兵器の実用化に成功したジオン公国軍が、そのシステムをモビルスーツに搭載しようとして開発した機体。元々はMS-16の仮称で研究が進められていたが、その前段階としてザク(F型)の機体を利用した実験機が作られ

→1 頭部はベースとなったザクの頭部を流している。その一方、ボディと半身はMSN-02 ジオングのものを小型化したような形状。

→2 有線サイコミュによってコントロールされる5連装メガ粒子砲を両腕に搭載している。

→3 胴部にもスラスターを装備し、高機動戦闘への対応が図られた。



た。それがMS-06Zであり、計3機が製作されている。

本機の特徴であるサイコミュは、以前のシステムよりもかなりの小型化に成功してはいるが、それでも両腕に搭載した有線式のメガ粒子砲はかなりの大きさとなり、一際目立つものとなっている。

高機動時の有線サイコミュ・システムの運用テストのため、大推力のスラスタを追加するなどの改修も行われている。しかし、MS-16で想定され

ていた高機動テストを行うには性能が及ばず、3機内の2号機をサイコミュ高機動試験用ザクとして、さらなる改造が行われた。残された1号機と3号機についての資料は少ないが、3号機が一年戦争の再末期に実戦投入されたという証言が残されている。ただ本機は対艦艇の攻撃力は強力ながら、対モビルスーツ戦には対応しておらず、ア・バオア・クーの混戦の中で、どんな戦果を挙げたかは詳細不明である。

有線サイコミュ兵器 搭載への道

ニュータイプ能力にいち早く注目していたジオン公国が、フナガン機関に研究開発させたのが、サイ・コミュニケーション、略称サイコミュである。当初、そのシステムは巨大で、MAN-03 ブラウ・プロや、ニュータイプ専用機のMAN-08 エルメスなど、どれも機体サイズは大型だった。その後、MS-06Zでモビルスーツサイズへの搭載を可能としたが問題があり、結果、MSN-02 ジオングは巨大な機体になった。





ZAKU PSYCOMMU TEST TYPE

■ MSN-01

サイコミュ
高機動試験型ザク

Spec

● 全高: 17.2m ● 本体重量: 65.4t ● 武装: 有線式5連装メガ粒子砲×2

モビルアーマー並の機動力をもつ
サイコミュ搭載実験機

サイコミュ搭載機MS-16を実現するために、様々な実証実験が行われていた。だが、その要求は過酷で、機動力などはモビルアーマーに匹敵するものが求められていた。それらを実現するに、その前身にあたるMS-06Zでは荷が勝たずぎていた。その不足を補うため2号機を改修し、高機動性を無理

矢理実現しようとしたのが本機である。高速オペレーション試験機という別名の通り、改造の重点はまさに速力と機動力に置かれ、面脚には大推力を発生する熱核ロケット・エンジンを2基搭載する。そしてこの改造時に、新たに型式番号MSN-01が与えられている。しかしザクサイズの機体にはこのエンジンを搭載して実用とするのは難があり、特に推進剤の搭載量は限られ、性能をフルに発揮できる実質の稼動時間は、

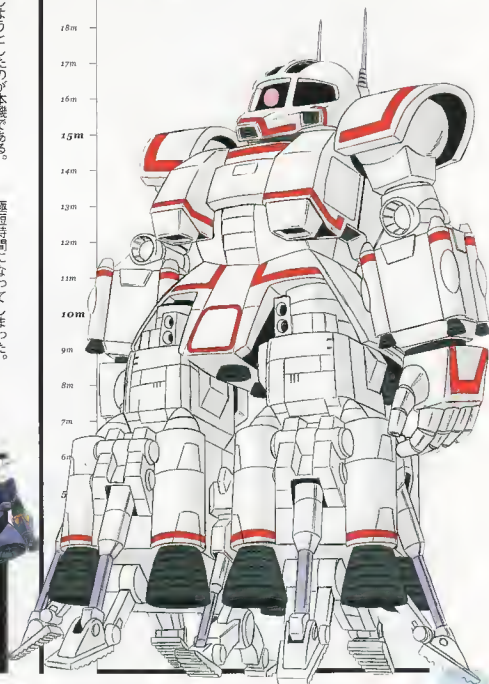
極短時間になってしまった。しかしテスト機としては十分に、本機の高速移動時、そして高機動時に、有線サイコミュの運用結果は、MSN-02ゾング開発への貴重なデータを残した。役目を終えた本機だが、戦局が悪化した一年戦争末期に、戦力となる物はないまでも使おうという切羽詰まった状況からか、連邦軍に引き渡されたソロモン方面の襲撃任務に配備されたこととなる。

MSN-02 ジョング

MS-06ZやMSN-01のテスト結果を取り入れ開発されたのがMSN-02ジョングである。当機はMS-16として開発が進められていたニュータイプ専用機であり、ジオン軍の最後の切り札だった。本来は脚部に取り付けられる予定だったが、MSN-01で確認されていたように、高機動力と戦闘力に脚部は不用として、ジョングも脚のない状態でア・バオア・クー艦に投入され、十分に高い戦闘力を発揮した。



- ➡ 1 頭部を含む上半身はMS-06Zと形状的には大きな変化はみられない。
- ➡ 2 両腕の有線サイコミュ式5連装メガ粒子砲も、基本的に旧型である。
- ➡ 3 高機動時のサイコミュの運用試験のため、関節部分を熱核ロケットエンジンで駆動している
- ➡ 3 脚部は履帯脚（ランディングギア）として割り切っている。そのため、歩行や走るなどの動作は不可能





ZAKU MINELAYER

■ MS-06F

ザク・マインレイヤー

Spec

● 全高 17.5m ● 本体重量 56.2t ● 武装: ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、ヒート・ホーク/カートリッジ式機雷散布用ランドセル、他

機雷散布任務のために
カスタマイズされた機体

一年戦争の序盤、ジオン公国軍の主力兵器として大いに勝利に貢献をしたザクⅡであるが、その卓越した機動性を利用して、モビルスーツである必要のないようなミッションにまで、積極的にモビルスーツを使用する傾向にあった。そのひとつが宇宙用の機雷散布を任務とした、通称ザク・マインレイ

ヤーである。

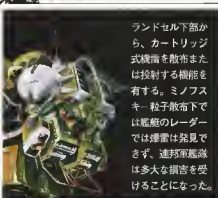
この機体は、通常のザクにカートリッジ式機雷を散布する専用の大型ランドセルを搭載したもの。それ以外にも、通信機能が強化されていたり、追加の推進剤タンクを装備して、一般的なザクⅡF型の5倍もの作戦行動が可能なほどの機能を加えられている。

カスタマイズ・バリエーションとしては変わり種であるが、その戦果は多かった。実際に機雷の餌食となった

連邦軍艦艇の数も少なくないが、連邦軍艦隊の行動範囲を制限させ、補給線、連絡線の分断に成功したことは、何よりの戦果と言っていだろう。

こうした実績を挙げたザク・マインレイヤーであったが、連邦軍のRGM-79ジムの投入など機雷への対応策を完備させるにつれて、その戦果は縮小。運動性能を犠牲にした機体では、逆にジムにとって格好の獲物になってしまったという。

機雷散布用ランドセル



ランドセル下部から、カートリッジ式機雷を散布または投射する機能を有する。ミノフスキー粒子散布下では艦艇のレーダーでは機雷は見えず、連邦軍艦隊は多大な損害を受けることになった。

※1 機体はザクⅡF型であるが、搭載可能な機雷を増量して、一般機よりも長時間の行動が可能となっている。

※2 背部に機雷散布ポッド付ランドセルを装備。

※3 スラスターなどの性能もF型のままであるため、ランドセルと機雷の重さの分、運動性能などは低下している。

21m

20m

19m

18m

17m

16m

15m

14m

13m

12m

11m

10m

9m

8m

7m

6m

5m

4m

3m

2m

1m

0m

隠されたザク系モビルスーツ

MS誕生と進化の歴史の中で登場したザクの血統たち

●MS・01、MS・04

MS・05ザクI開発以前に誕生した機体についての資料が少ないが、人型であったというの資料は共通している。MS・01クラブマンによって開かれたモビルスーツの道は、MS・04プロトタイプ・ザクを経てMS・05ザクIによって、実用兵器と呼べる段階に到達。そしてMS・06ザクIIによって、より汎用性の高い画期的兵器が完成することとなった。(ザクの開発については14ページ参照)

●RRf・06ザニー

地球連邦軍が、V作戦で本格的にモビルスーツを開発する以前に作り上げたのがRRf・06ザニーだ。基礎研究でジオン軍に大きく遅れを取っていた連邦軍としては、稼働できる機体を生み出せたこと自体が奇跡とも言われた。実はこの機体は、極秘裏に手に入れたザクの技術が使われている。西、中身はザクそのままだと噂される機体だった。ともかくこのザニーによって、連邦軍のモビルスーツ開発は1つの段階を越え、後のガンダムやジムの研究

開発につながっていった。また、パイロットの訓練も可能となり、驚異の短期間で巻き返したV作戦の地下が作られることとなった。

●MS・06Tザク・トレーナー

新兵ザクの開発と生産と共に、ジオン軍としてはモビルスーツパイロットの養成を急がなくてはならなかった。小型宇宙艇での航海や宇宙空間での様々な作業に慣れていた宇宙移民といえど、さすがに戸惑いがあつたに違いない。そうした初体験のパイロットたちの訓練用に開発されたのが、教官との複座式に改造されたザク・トレーナーだ。パイロット訓練のための教導隊に配備され、厳しい訓練によりジオン軍正規パイロットの技量は、急速に高まっていた。資料が残されているMS・06タイプの前、MS・05タイプもあったはずだが、その存在は確認されていない。

●一年戦争以降の改造機など

一年戦争後半、連邦軍のガンダムやジムなどに対して、ザクIIの劣勢は明らかとなった。ドムやゲルググなど新型の後継機の開発とともに、局地戦用に改造されたザクのバリエーション機

■MS-06T ザク・トレーナー

Spec

頭頂高: 17.5m 武装: 120mmライフル/280mmバズーカ/ヒート・ホーク 初出: ゲーム『戦場の絆』に登場。

■RRf06 ザニー

Spec

頭頂高: 18.0m 本体重量: 48.3t 出力: 980kW 推力: 45,000kg 装甲材質: 超高性能鋼+チタン合金 武装: 60mmバルカン×2、120mmキャノン砲 初出: PCゲーム『ガンダムタクティクス』に登場。

■MS-06F ザク大気圏突入試験型

Spec

基本スペック不明 初出: 『MSV90』に登場。

■QMS-06RF RFザク

Spec

頭頂高: 18.0m 本体重量: 26.4t 全備重量: 45.8t 出力: 2750kW 推力: 62550kg 装甲材質: ガンダリウム合金セラミック複合材 武装: ビーム・ライフル/ビーム・アックス、ビーム・スプレーガン、ビーム・バズーカ、海ヘビ(掃海用ワイヤーアンカー) 初出: ゲーム『F90』などで登場。

体も多数登場してきた(その主たるJ型、D型、K型、R型など)については22ページ以降を参照。それらとは別に、新技術の開発のために実験的改造が行われたザクもあった。

ガンダムが大気圏突入突破を行えることを知ったジオン系技術者が、ザクによる大気圏突入突破を可能にしようとして開発したのが大気圏突入試験型ザクだ。一年戦争時代には実現不可能だった、ウェイブライダーに近い技術が取り入れられている。

そして宇宙世紀1300年、アナハイム・エレクトロニクス社が発表したザク誕生50周年を記念したコンCEPT・モデルの機体、ザク50などというものもある。このザク50になると、ボディはザクの形を残しているが、腕部や脚部などは巨大なスラスターのようであり、いかにも高機動力の機体という感じではあるが、人型の汎用機からは大きく離れてしまった感じがした。



D R A - C

■ MS-21C

ドラッツェ

Spec

●頭高: 29.8m ●本体重量: 23.9t ●全備重量: 49.0t ●出力: 569kW ●推力: 117500kg ●装甲材質: 超硬スチール合金 ●武装: 40mmバルカン砲 ガトリング・ガン ビーム・サーベル、他

- ⇒1 運動性能を補うため、両肩部に球状のスラスタ・ボッドを装備。
- ⇒2 右腕部には40mmバルカン砲を装備。また左腕部にはジェネレーターを内蔵したシールド（ビーム・サーベル付き）を備える。
- ⇒3 脚部はなく、戦闘用機ガトルのスラスタが付けられている。



デラース・フリートが 開発した簡易MS

一年戦争の敗北を認めず、捲土重來の時をうかがうデラース・フリートが、独自に開発した機体。胴体にはザクⅡF2型のパーツを利用し、脚部に戦闘用機ガトルのエンジンやスラスタを取り付けて完成させた。腕部に固定されたバルカン砲と、シールドと一体になったビーム・サーベルと武装面は

貧弱で戦闘力も低い。その反面、運動性能はスラスタ・推力が高く、直線方向の機動力に優る。しかしながら、3次元空間機動力には著しく劣るため、戦法や運用方法が限定されかねない。また、当然のことながら対モビルスーツ戦闘能力も低い。

数合わせの感じの機体であるが、潜伏状況で兵力も資材も乏しいデラース・フリートにとっては、貴重な機動力兵器であり、偵察任務などで活用された。星の屑作戦とそれに伴うデラース紛争の戦いの中で、そのほとんどが失われたと思われていたが、一部の機体はグリプス戦役、果てはラプラス戦争後まで使用が記録され、意外と息の長い活躍をしている。

デラース・フリートのMS部隊

デラース・フリートの中核を成しているモビルスーツは、ザクⅡF2型だった。ア・バオア・クー戦の時点で、超エース以外のベテラン・パイロットたちはまだ機種転換の途上で、多くの兵士が乗り慣れたザクを使用していた。また、戦後の潜伏中も組織規模が縮小したことから新型機の入手は困難で、結局、一番多く製造されたザクに頼るしかない台所事情の厳しさも伺える。それでも新型のガンダムやジム・カスタムなどに対して、彼らは果敢に挑んでいったのだ。



ACTION ZAKU

■ MS-11

アクト・ザク

Spec

● 総高 13.2m ● 全重量 59.1t ● 出力 1440kW ● 推力 64800kg ● 装甲材質：超硬スチール合金 ● 武装：ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、専用ブルバップ・ガン、専用ヒート・ホーク、他

- ※1 外見はベースとなったザクの形状と面影が残っている。
- ※2 強化されたジェネレーターにより、ビーム兵装の運用が可能となった。
- ※3 各関節部にマグネット・コーティングが施され、その運動性能、機動力は格段に上がっている。

24m

20m

19m

18m

17m

16m

15m

14m

13m

12m

11m

10m

9m

8m

7m

6m

5m

4m

3m

2m

1m

0m



ジオン公国軍のベズン基地で開発された高性能機

一年戦争末期、ジオン公国軍は小惑星のベズン基地に技術者を集め、戦局を打開するべく兵器開発を極秘裏に進めていた。それがベズン計画である。その中でもザクⅡをベースにしたが、圧倒的高性能を与えた機体として開発されたのが本機である。

性能で見劣りするようになったザク

Ⅱに対して、ジェネレーターの強化を行いビーム・ライフルやビーム・サーベルなどのビーム兵器を使うようにし、また各関節部にマグネット・コーティングを施したフィールドモーター駆動とすることで、従来のザクⅡとは桁違いの性能を獲得することに成功している。

ベズン計画の機体は、その秘密性の高さから、新たにMS-11の型式番号が付けられた。しかしジオン本国にて

開発されたMS-14ゲルググの量産が決定。その結果、アクト・ザクは試作段階で終戦を迎えることとなった。

戦後で採取した連邦軍によって本機の高い性能が認められ、研究機関などに引き渡され、一部の部隊で運用されている。それと同時に近代化改修も進められて、全天候型モニターやリニア・シートなどが導入されている。グリプス戦役で実戦へ投入されたが、結果は不明である。



小惑星ベズンで計画されたモビルスーツ

新モビルスーツ開発計画・ベズン計画では、アクト・ザクの他にもユニークな機体が多い。ドム系の発展型であるMS-10 ベズン・ドワッジ、ギャンの後継機であるMS-17 ガルバルディ、防空用のMS-12 ギガン。強襲突撃機MS-13 ガッシャなどである。ベズン・ドワッジとガルバルディ (α) は、量産主力機の座をアクト・ザク共々争う高性能機だったとされる。特にガルバルディは、連邦軍、アクト (ネオ・ジオン) の両陣営で派生型が開発され、実戦投入がなされている。

← 設定画はP108へ

時代が変わっても 受け継がれるザクの系譜

一年戦争が実質、連邦軍の勝利に終わり、また大戦末期から、数々の高性能モビルスーツが投入されるようになる。ザクの置かれた立場は微妙なものとなっていた。ゲルググ、ドムに加え、連邦軍のジムもライバルとなる状況の下、ザクは時代に応じた形に変化を遂げて、その名を残していった。

連邦軍、ジオン軍のモビルスーツ開発の流れが統合され、数々の新鋭機が生まれたU・C・0087年では、「生産性の高さ」を強調。ジム系のジェネレーターやマイナーチェンジを施し、AMS・106ハイザックとして、一年戦争後の戦力不足を補う存在感を示した。

一方、U・C・0088年になると、ジオンの残党からなるアークシズ（ネオ・ジオン）では、「ジオンの象徴」としてのザクという側面に着目した。亡国の復興を目指すという状況では、兵士たちの心の拠り所が不可欠である。連邦軍を圧倒するザクは、まさに一年戦争初期の強きジオンそのもの。それゆえ、同勢力が生み出したAMX-011ザクⅢは技術的な関連性よりも、意匠としてのMS-06を意識した（無論、ジオン技術を用いたという点ではザクの血統を継承している）。

U・C・0093年、シャアが興した新生ネオ・ジオンでは、AMS・119ギラ・ドーガが主力モビル

スーツとして投入された。これは名称こそザクの名を受け継いでいないが、「汎用性の高いスタンダードな高性能機」というコンセプトを持つ機体。これはザクが初期に想定していたコンセプトそのものであり、ギラ・ドーガは新世代のザクといえる存在である。かつて少数勢力であったジオン軍が、強大な連邦軍に立ち向かう際に打ち出されたコンセプトゆえに、新生ネオ・ジオンの求めるモビルスーツ像と一致したのである。

この考え方は後継組織である「神付き」にも受け継がれ、同組織が使用するAMS・129ギラ・ズールもギラ・ドーガの純粹な後継機として開発されている。

一年戦争後の10数年、ザクは様々な勢力で姿やコンセプトを変えて生き残ってきた。だが、上記に紹介した3つの異なるコンセプトは、実はすべてザクがもつ側面であったといえるかもしれない。



ザクは異なる姿で、ザクのモビルスーツとしての血統は時代に合わせる形で継承されていった。

一年戦争後のザク系

時代に合わせた姿で生き残っていくザクの系譜

一年戦争が終結後、ザクは多数の高性能機との競争を強いられる。様々な時代の要求にこたえ、ザクの系譜が継承されていく背景にあったのは、懐の深さだった。

1 生産性の高さ =ハイザック

一年戦争後、連邦軍威力は大きく虚勢した。ジオン側の生産拠点をそのまま利用し、あつたえザクを連邦軍の機体として取り入れるには、戦後の状況が大きな影響を及ぼしたのかもしれない。迅速に威力を回復するためには、優れたザクの生産性が求められたのだろう。とはいえ、ザクそのままで一年戦争時ですでに性能が不足していた。特に来るべきビーム兵器時代の対応も求められなくてはならぬ。そのため、ジェネレーター出力の向上をはじめ、スラスターの強化、各種センサーの追加などによって、MS-06より大幅に性能向上した機体へと進化。ティターンズ、連邦問わず主力機として導入されることになる。

2 ジオンの象徴としての 存在=ザクⅢ

連邦の機体としてザク=ハイザックが扱われる。これはジオン技術者にとって耐えがたい屈辱であったろう。アクシズに逃れたジオン系技術者は自分たちの手で、ハイザックではないザクⅢの正統な後継を作るべく、ザクⅢを開発するに至った。それは技術的な関連性というよりも、純粋にジオンの強き象徴=ザクという点を重視され、純粋に高性能モビルスーツを作り上げるという方向性に行きついたと考えられる。実際、電匠面ではザクと共通性は見られるものの、位置づけ的にはエース機である。ただしサイコミュデバイスや革新的な装備ではなく、成熟された技術のみで高性能化を推し進めた点には、ザクの血脈を感じさせる。

3 高性能スタンダード機 =キラ・ドーガ

汎用性の高い大型機動歩兵。これはモビルスーツの原点といえるコンセプトであり、初代モビルスーツであるザクのコンセプトにも、あてはまる。だがグリプス戦役、第一次ネオ・ジオン戦争を経てモビルスーツは大火力・大出力の恐竜的進化を果たし、登場初期のモビルスーツの理想からはかけ離れていた。いわばキラ・ドーガは、モビルスーツの原点回帰を求めて開発された機体といえるだろう。こうした背景には、戦争の形勢化があげられる。以前よりも大規模な戦力が求められない時代に突入り、高コストなワンオフ機や可変機ではなく、同時にスタンダードなモビルスーツの性能を求める時代に突入したといえる。



- ・機体構造はザクより流用
- ・センサー、スラスターなど基本性能の強化
- ・ジェネレーターは連邦系タキム社のものに換装

- ・ジオンの象徴ともいえる高性能化
- ・新機能は求めず、成熟した機能で強化

- ・高出力、軽量というベーススペックの向上
- ・優れた汎用性
- ・優れた生産性





H I - Z A C K

■ RMS-106

ハイザック

Spec

●頭頂高: 18.0m ●本体重量: 38.7t ●全備重量: 59.6t ●ジェネレーター出力: 1,428kW
●スラスター総推力: 64,800kg ●センサー有効半径: 8,900m ●装甲材質: チタン合金セラミック複合材 ●武装: ザク・マシンガン改 ビーム・ライフル・ビーム・サーベル・ヒート・ホーク・ミサイルポッド メガ・ランチャー 他

ハイザックの主なパイロット

ジュリド・メサ

ティターンズのパイロット。階級は中尉。ガンダム Mk-II 追跡などで搭乗した。



カクリコン・カウラー

ジュリドの同僚で親友でもあるティターンズのパイロット。階級は中尉。



キツチマン

カクリコンと共にアンマン市に降着中のアーガマを襲撃した。階級は軍曹。



カラ

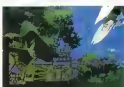
サイド2街域で隠れハイザック(ハイザック・カスタム)に搭乗。



武器・装備

ザク・マシンガン改

連邦軍の規格に合わせて改修し、強の威力も向上させた実体弾兵器。



ビーム・ライフル

モバック方式を採用したビーム兵器で、RMS-108 マラサイと同型のもの。



ビーム・サーベル

基本装備の1つ。ヒート・ホークの使用も可能である。



メガ・ランチャー

強力なビーム兵器だが、エネルギー充填用だけのために僚機の協力が要。



ハイザックは右胸部のシールドと左肩部のスパイク・アーマー以外、固定武装は装備していない。その代わりオプションの携帯武装などが充実し、量産機としての汎用性を高めている。このあたりもザクIIの優れていた点を受け継いでいると言えるかもしれない。

スペック比較

	ハイザック	マラサイ	ジムI
全 長	18.0m	17.5m	18.1m
重 量	58.6t	59.4t	58.7t
ジェネレーター	1425kW	1750kW	1516kW
スラスター	64800kg	74600kg	62000kg



- ※1 MS-06R を基に最新技術を組み込んだと言われている機体。その外見もザクIIと類似する。
- ※2 コクピットに全天周モニターとリニア・シートを初搭載。
- ※3 ランドセル左右の可動式スラスターにより、運動性能を備えている。
- ※4 初期にはビーム兵器の併用は出来なかったが、後に解消された。

ジオン公園の技術を取り入れた 連邦軍用重産モビルスーツ

一年戦争後、地球圏を一応掌握した地球連邦だが、ジオン軍残党の存在や、連邦軍内部での対立も顕現するなど、各所に戦火の火種が立っていた。しかし、大規模戦争後の社会は、復興のための社会投資が本道であり、モビルスーツに関しては一部の新しいコンセプトを投入した新型機の開発はされていたが、大規模な投資は難しい状況であった。そこで、地球連邦軍は、従来機を大幅に改修し、性能向上させるプロジェクトを推進する。そんな中で開発されたのが本機、ハイザックである。

元々の開発は、ジオン公園のモビルスーツメーカーの雄、ジオニック社を吸収合併したアナハイム・エレクトロニクス社（以下A.E.社）により始められていた。旧型であるザクⅡを選んだ理由は、生産ラインを転用し易かったからとも言われるが、ザクの優れた点を活かしつつ、最新技術を取り入れていくというコンセプトの下、かなりの段階まで開発は進んでいたという。

G.P.シリーズの開発などで技術力で先行していたA.E.社は、自社製の高出力のジェネレーターの搭載を目論んでいた。しかしA.E.社が月面に資本の主体を置くスペースノイドよりの企業でもあり、また地球系企業と癒着し、そ

の利権を守ろうとした連邦軍首脳から待たせられた。本機のジェネレーターはA.E.社のものではなく、タキム社のものが採用されることとなつてしまふ。ジェネレーターの出力が予定より低くなつてしまったことや、他社の技術とのマッチングの問題もあったが、基本設計の優秀さもあり、完成したハイザックは良好な性能を発揮することとなつた。特に最新の機体制御、スラスト・技術が取り入れられ、高い運動性能や機動力を持つに至っている。また、武装面ではビーム兵器を運用可能となつたことが大きい。

しかし、ハイザックは当初、ビーム・ライフルとビーム・サーベルの同時使用が出来なかった。低出力のジェネレーターを積んだために出力不足だったと言われているが、実はハイザックのジェネレーター出力は、低いというわけではない。このあたりは、出力の問題と言うよりも、その使用段階での効率やデバイスの問題があったと考えられる。他社の技術が入り込んだための弊害が、ここに出てしまったということかもしれない。武器運用面でわずかの問題はあったが、基本性能の高さや扱いやすい操縦性能などでハイザックはパイロットにも好評であった。こうしてハイザックは、テスト運用を経てティターンズほか、グリプス戦役後のネオ・ジオンでも使われた。

バリエーションモデル

主力機であるハイザックには、カスタマイズされた機体も数多く存在する。その辺りの汎用機としての素地の優秀さもザクⅡ譲りだ。一方、旧式化した機体などは民生用に払い下げられることもあった。



ホビー
ハイザック

一切の武装が排除された民生用の機体。

RMS-119
アイザック

レドームが特徴的な偵察用の機体。

RMS-106CS
ハイザック・カスタム

複合用ビーム・ランチャーを使用する。

ハイザックの実戦運用

ハイザックの中でも特異なカラーリングで注目されたのが、ティターンズのジオン軍残党討伐部隊に配備された機体だ。この機体は、かつてのザクⅡの標準色である緑系で、まるでジオン軍の機体という雰囲気であった。これはジオン軍残党への心理的効果を考慮したものだった。同時にガンダム Mk-Ⅱの実用化も検討していたことから、物心両面で面策していたといえる。一方、連邦軍で運用される機体は青系のカラーであった。

ハイザック
連邦軍カラー





ザクⅢの主なパイロット

ラカン・ダカラン

ネオ・ジオンのパイロット。強化人間やニュータイプにも劣らない探知能力を有する俊敏の勇士。後には自身の部下を率いてスペース・ウルフ隊としてグレミーの反乱に参加。その際の乗機はドーベン・ウルフだった。



マシュー・セロ

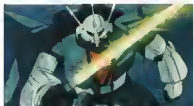
ネオ・ジオンのパイロット。当初はアーガマ追撃の任を受けていたが、度重なる失敗がもとで強化人間へと改造された。その際、車輪機としてザクⅢ改に搭乗。スペース・ウルフ隊と死闘を繰り広げた。



武器・装備

ビーム・サーベル

フロントアーマーのビーム・キャノンの基部は取り外してビーム・サーベルになる



ビーム・キャノン

左右のスカート部分に搭載されたビーム兵器。キャノン砲以外にビーム・サーベルとしても使用可能。



機体の高性能化と共に高い汎用性を目指したザクⅢは、特殊な兵装の運用は考慮されていない。武装もシンプルなものであるが、その1つ1つの性能レベルは高次元だ。しかしこの突出したところのなさが、本機が少数の量産にとどまった理由でもあった。この当時は、平均レベルで性能の高い機体よりも、複数の敵を単機で圧倒するような、強烈な攻撃力を持った特別な機体が求められていたのだ。

スペック比較

	ザクⅡ	ドーベンウルフ	ゲイムズク
全 高	21.0m	22.0m	22.0m
重 量	68.3t	74.5t	78.7t
ジェネレーター	2150kW	5250kW	8320kW
スラスター	172600kg	87300kg	92400kg

⇒1. ザクⅡの正統な後継機を名乗るため、そのデザインにはザクⅡを想念とさせるものを取り入れた。

⇒2. 形状だけでなく、高い汎用性という面でもザクⅡの材質を受け継いでいる。

⇒3. サイコミュなど特殊な武装は持たないが、兵装はそれなりに強力。

⇒4. 大推力のスラスターを装備するなどして、強鉄甲で大型ながら運動性能は良好だった。

Z A K U III

■ AMX-011

ザクⅢ

Spec

- 頭頂高: 21.0m ●本体重量: 44.2t ●全備重量: 68.3t ●ジェネレーター出力: 2,150kW
- スラスター総推力: 172,600kg ●センサー有効半径: 9,700m
- 装甲材質: カンダリウム・コンボリット
- 武装: ビーム・サーベル兼用ビーム・キャノン×2、機体メガ粒子砲、銃剣付きビーム・ライフル 他

21m
20m
19m
18m
17m
16m
15m
14m
13m
12m
11m
10m
9m
8m
7m
6m
5m
4m
3m
2m
1m



ジオン公国系技術者の意地が生み出したザクⅡの正統後継機

連邦軍の主力機としてRMS・106ハイザックが採用されたことで、ジオン公国軍のザクの系統は連邦軍の技術に融け、そちらに受け継がれるかに思われた。しかしその流れに否を唱える者たちが、ジオン軍残党の中にも、ジオン公国系の技術者たちの中にも多数存在していた。

彼らはアランズへの逃亡に成功すると、自らの手でザクⅡの正統な後継機を開発すべく動き出したという。そして完成させたのがザクⅢである。グリプス戦役を通して著しく進歩した技術成果を取り込みつつも、ザクⅡとゲルググで培ったジオン独自の技術をフラッシュアップさせ、その集大成として本機はまとめ上げられている。

技術面だけでなく運用に關しても、ザクⅢが持っていた優れた汎用性というメリットを捉え直し、武装、防御、運動性、機動力、汎用性など基本性能が高いレベルでまとめられている。これまでの全ての主力機を凌駕する申し分のない性能が与えられている。

しかしこの第1次ネオ・ジオン戦争においては、性能バランスの取れた機体を多数そろえ、数で敵を圧倒するといった戦いは少なく、1機がより高い攻撃力を持ち、それにより複数の敵を倒

す能力が求められていた。ザクⅢも、オプションで攻撃力などは備えるが、ドーベン・ウルフなどの重武装機と比較すると、機動力を含めて物足りず、次期主力機として採用されることはなかった。

しかし混乱した戦局の中では、持てる機体のすべてが戦場に投入されるような状態となり、ザクⅢも数は少ないながら配備され、アーガマのガンダム・チームと戦闘を行うなどしている。

また、ザクⅡ同様、設計的な余裕はかなりあったと見え、強化人間となつたマシヌマー・セロ専用の機体として、さらに高い機動力を与え、長射程で高出力の専用ビーム・ライフルを装備、パイオセンサーを搭載するなどしたザクⅢ改もつくられた。戦争終盤、アクシズ（ネオ・ジオン）の内乱で驚異的戦闘力を示したが、同士討ちの戦場であったことが悔やまれる。しかしそれでも、ある意味、正統なザクの名と血統の最後を飾るに相応しい活躍を一応は見せた。

しかし結局、巨大な可変機やニュータイプ専用機が戦いの趨勢を決めるようなこの時代において、汎用性がコンセプトの主力機というのは幻想だったということなだろう。そうして汎用性を捨てて、極限の戦闘力を発揮したザクⅢ改の最後は、皮肉にもその証明になったといえる。

バリエーションモデル

主力機としての汎用性は見送られたザクⅢだったが、多様な戦況に対応することができるという特性から、オプションの機装や改造などにより、早期警戒、強行偵察用や高機動戦闘用などいくつかのバリエーションが存在した。中でもザクⅢ改は強化人間が搭乗することで、ニュータイプ専用機として性能を発揮した。

AMX-011S ザクⅢ改

強化人間となったマシヌマー・セロ専用、改造された指揮官用機。



ザクⅢの実戦運用

ドーベン・ウルフに次期主力機の座争いは敗れたザクⅢだったが、量産の上に部隊編成も行われ、実質的にネオ・ジオン軍の戦力として活躍している。特にラカン・ダカラン機は、ダブリンへのコロニー落とし作戦時に出撃したりと、その存在感を示している。またザクⅢを改造して強化人間となったマシヌマー・セロ用の機体は、グレミー・トトの反乱時にはグレミーが搭乗する旗艦クイン・マンサを撃退し、多数のドーベン・ウルフとの戦闘でも互角に渡り合うなど、さまざまな戦況を見せつけている。



◆ダブリンでガンダム・チームと交戦するラカン・ダカラン隊のザクⅢ。



◆ドーベン・ウルフを圧倒する力を発揮したザクⅢ改。



ギラ・ドーガの主なパイロット

レズン・シュナイダー

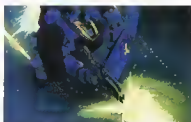
ネオ・ジオンのエース・パイロット。モビルスーツ隊の隊長で屈指は少尉。青く塗装された機体に乗る。ただし、基本的にはビーム・マシンガン以外の装備などは一般機と同じ仕様である。



武器・装備

ビーム・マシンガン

ギラ・ドーガの標準装備。ビームを断続的に連射する。一般機と指揮官機で形状が異なる。



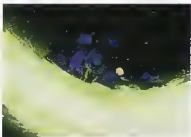
グレネードランチャー

シールド上部先端に装備されたグレネードランチャー。



ビーム・ソード・アックス

新機などで使用するギラ・ドーガの標準装備。



第二次ネオ・ジオン戦争では、すでにビーム兵器はモビルスーツの標準装備となっていた。ギラ・ドーガもまた射撃と新機用武器として、ビーム・マシンガンとビーム・ソード・アックスを携行している。射する連邦軍に配備されたRGM-89 ジェガンも武装面や性能面などは、属する陣営の差こそあれ、ほぼ互角といえる。改めてこの時代では、機体自体の性能よりも、パイロットの技量、資質、もしくは技術などの運用面が問われていたことが見て取れるだろう。

スペック比較

	ギラ・ドーガ	ジェガン	ジムⅡ
全高	20.0m	19.0m	18.0m
質量	50.0t	47.3t	56.2t
ジェネレーター	2160kW	1870kW	1560kW
スラスター	54000kg	61400kg	61200kg

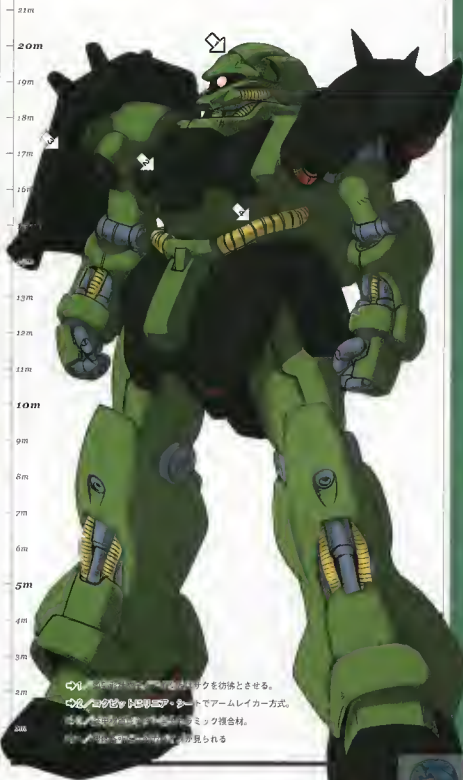
GEARA DOGA

■ AMS-119

ギラ・ドーガ

Spec

●頭頂高：20.0m ●本体質量：50.0t ●全備重量：68.3t ●ジェネレーター出力：2,160kW
●スラスター総推力：54,000kg ●センサー有効半径：16,400m ●装甲材質：チタン合金セラミック複合材 ●武装：ビーム・ソード・アックス ビーム・マシンガン/グレネードランチャー・シュトルム・ファウスト×4、他



●ビーム・マシンガンは、射撃の際にサックを切替とさせる。

●ビーム・ソード・アックスは、ソードでアームレイカー方式。

●ビーム・マシンガンは、射撃の際にサックを切替とさせる。

●シュトルム・ファウストは、射撃の際にサックを切替とさせる。



ザク系の思想を受け継いだ ネオ・ジオンの主力機

第二次ネオ・ジオン戦争、いわゆる
シャアの反乱においてネオ・ジオン軍
の主力モビルスーツとなったのがギ
ラ・ドーガだ。その開発はアナハイム、
エレクトロニクス社（以下A.E.社）に
よって第一次ネオ・ジオン戦争時には、
ほぼ完成されていたと伝えられる。

機体の基幹構造には、同じくA.E.社
が開発したR.M.S. 108マサライの
ムーバブル・フレームをベースとした
ものが使用され、技術側の観点ではジ
オン直系に見えて、一部連邦系モビル
スーツの系統と言つことも出来る。し
かしギラ・ドーガには、ザク系の高い
汎用性と拡張性という優れた点を、そ
の設計思想の中に見いだすことが出来
よう。アクシズ・ネオ・ジオン側と密
かに協力関係を築いていたA.E.社も、



この機体はネ
オ・ジオン側
に提供するの
を前提に開発
したのがあり、
新時代のザク
というイメー
ジを強く意識
していたのか
もしれない。
構造面では

連邦軍系、運用面、機能面ではザク系
と、両者の良い所取りをしつつ、それ
が高度で、ランスでまとめた良い新機
体だった。また、飛び抜けた最新技術
は投入されていないが、同期期のジェ
ガン同様、大幅な軽量化によって実質
的な性能も飛躍的に向上している。ま
たオーソドックスな構造ゆえ信頼性も
高く、配備後も高い稼働率を維持した
ことは、物量で劣るネオ・ジオン側に
とって重要だった。

武装の面では、発射可能回数でビー
ム・ライフルより優れるビーム・マシ
ンガンや、多目的に使用できるビーム
・ソード、アックスなど、多様な装備が
用意され、シユトルム、ファウストや
ランゲ、ブルーノ砲を装備すれば、火
力の面でも底上げが可能だった。

頭部にブレード・アンテナを装備し
た指揮官用機体は、通信機能などが強
化されているのに加え、パーソナル、
カラーが許されたエースの搭乗機体で、
パイロットの特性に合わせてのチュー
ンナップもされていた可能性もある。
そんなところもザクⅡと共通する点と
いうこともできるだろう。

ギラ・ドーガは高い基本性能をもつ
た上に、機体の拡張性も高かったよう
で、その基本フレームを基にヤクト、
ドーガが開発され、さらに後にはギラ、
ズールを生み出すなど、ネオ・ジオン
の行動に大いに貢献した。

バリエーションモデル

ネオ・ジオンの主力機として重宝されたギラ・
ドーガは、高い汎用性と拡張性を備えていた。
通信機能を強化した指揮官用、長距離ラン

グ・ブルーノを装備した重装型などバリエー
ションも多い。後のヤクトドーガにつながる、
サイコミュを搭載した試験機などもあった。

AMS-119 ギラ・ドーガ重裝型

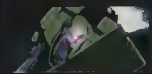
ランゲ・ブルーノ砲
を装備した「袖付き」
仕様の機体。

AMS-119 ギラ・ドーガ （レズン機）

レズンの機体。
青系のカラーリ
ングとブレード
アンテナが特徴。

ギラ・ドーガの実戦運用

第一次ネオ・ジオン戦争時に開
発されたギラ・ドーガは、シャ
ア・アズナブルを総帥とした新生
ネオ・ジオンの主力モビルスーツ
として開発され、第二次ネオ・ジ
オン戦争勃発時には部隊規模の数
が配備されていた（生産数は100
機で、うち32機が実戦へ投入さ
れたという）。5thルナ落下作戦
の際は、妨害しようとする連邦軍
部隊と戦闘を繰り返し広げるなど作戦
遂行の大きな力となった。またア
クシズ落下作戦でも、ロンド、ペ
ル隊と激しい戦闘を繰り返し広げ
るなど第二次ネオ・ジオン戦争を通
じて活躍した。その後、ネオ・ジ
オン残党の「袖付き」で使用され
るなど、長きにわたり連邦軍モビル
スーツと対峙することとなる。



◆ネオ・ジオンの主力機として、小惑星
5thルナ落下作戦などを全ての作戦で活躍
した。



ギラ・ズールの主なパイロット

アンジェロ・ザウバー
フロント線部隊の隊長。
専用のギラ・ズールに乗る。
機体色は紫でまとめ
られている。



ギルボア・サント

ガラシエル隊の一名。
温厚な性格で三兄の父だ
が、ラプラス攻防戦の際
に戦死した。



武器・装備

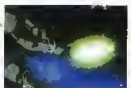
ビーム・マシンガン

専用のビーム・マシンガンを使う。グレネードラ
ンチャーも装備可能。



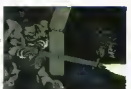
ビーム・ホーク

ビームの刃を付
つたホーク。
ビーム・ホーク
のビーム兵装版
といえる武装。



ランゲ・ブルーノ砲・改

アンジェロ機な
ども使用した高
威力のビーム砲。



ビーム・ショット・ライフル

通常のビームと
拡散ビームの撃
ち分けが可能な
ビーム兵器。



ギラ・ドーガの後継機であり、その武装や装
備などの基本構成は非常にオーソドックスで
大きな変化はない。高威力を誇るランゲ・ブ
ルーノ砲などもギラ・ドーガ重装型の改良版
だ。拡張性も高く、各種オプションなど豊富
である。ただし、機体数そのものが少ないた
め、運用される際には、前時代的に過度な武
装を施されることが多いようである。

スペック比較

	ギラ・ズール	ランゲ・ブルーノ	ジェガン
全高	20.0m	22.3m	19.3m
重量	55.2t	74.02t	47.3t
ジェネレーター	2470kW	16540kW	1870kW
スラスター	62100kg	32000kg(3基)	61400kg

G E A R A Z U L U

■ AMS-129

ギラ・ズール

Spec

●頭頂高: 20.0m ●本体重量: 21.8t ●全備重量: 55.2t ●ジェネレーター出力: 2,470kw
●スラスター総推力: 62,100kg ●センサー有効半径: 18,200m ●装甲材質: チタン合金セラ
ミック複合材 ●武装: ビーム・マシンガン ビームサーク/ハンドグレネード/シュトルム・フ
ァウスト×4 ビーム・ガトリングガン、他



- ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿



「袖付き」が主力機として採用したギラ・ドーガの後継機

地球寒冷化作戦に失敗し、総帥であるシャア・アズナブルも失ったネオ・ジオン軍残党の「袖付き」が、主力機として採用したのがギラ・ズールだ。この機体は、以前からギラ・ドーガの後継機としてアナハイム・エレクトロニクス社（以下A.E社）が開発していたものだったが、制式配備は第二次ネオ・ジオン戦争後になってしまった。機体構造などはギラ・ドーガをベースとしたものであり、その完成度の高さや汎用性などの優れた点は受け継がれている。

基本性能の面では、ジェネレーターの出力やスラスターの推力が、共に15%ほどアップしており、機体重量の増加を加味しても、加速力や基本パワー、武器関係などへのエネルギー供給でも性能向上を果たしていた。コクピット周りなど操縦装置関係や、機体制御のソフトなどはギラ・ドーガと同じものが採用され、武装面もギラ・ドーガのものをそのまま使用することが出来るなど、ネオ・ジオン軍パイロットにとっては慣れ親しんだものであった。これは「袖付き」に、まったく新規のシステムを導入する余裕がなかったためであるが、短時間の訓練で機体交換することができたというメリットも生

でいる。

このようにギラ・ドーガの正常進化型であるギラ・ズールだが、ギラに比べその外見は大きく変化し、中身には100%より旧ジオン公国軍のザクⅡに近い印象となっている。これはシャアを失ったネオ・ジオン軍が、人身をまとめるのに、かつてのジオン軍の象徴的存在だった、ザクⅡのイメージを利用しようとしたという事情もあったことだった。

真っ赤な機体色のシナンジュを駆り、シャアの再来のように振る舞うフル・フロンタルを首領に、ザクⅡを騎乗とさせるギラ・ズール部隊で固められた「袖付き」は、連邦軍に対して実質の戦力では未だ劣勢ではあったが、その存在感は無視できないほど高まっていく。ラプラスの箱を巡る事件で、連邦軍が必要以上に介入したのは、ひょっとするとギラ・ズールザクⅡジオンの完全復活というイメージの連想が働いたからかも知れない。それほど一年戦争終盤でザクⅡを主力としたジオン軍に蹂躪された記憶は根強いものだったと考えられることもできるだろう。そういう意味で、技術的な部分では必ずしもザクⅡ系とはいえないが、ザクⅡがもたらしたモビルスーツのありようを受け継いだ機体として、ギラ・ズールはまぎれもなくザクⅡの後継と言えるだろう。

バリエーションモデル

戦術部隊は、両肩がスパイクシールドで、エンブレムなどの意匠も一般機と異なる。アンジェロ・ザウパー専用機はカラーリングを紫で統一され、指揮官用の羽根飾りが付く。ただし、どちらも型式は一般機と同じである。

AMS-129
ギラ・ズール
アンジェロ・
ザウパー専用機



AMS-129
ギラ・ズール
戦術部隊



ギラ・ズールの実戦運用

第二次ネオ・ジオン戦争後、散り散りになったネオ・ジオン残党を再度まとめ上げたフル・フロンタルのもとに組織されたのが、「袖付き」の通称で呼ばれる組織である。『袖付き』では、ギラ・ドーガに代わりギラ・ズールが、主力モビルスーツとして、ゲリラ的作戦などで連邦軍と対峙していた。宇宙世紀0096年のラプラスの箱を巡る戦いでも、シナンジュやクシャトリヤと共に、連邦軍部隊やユニコーンガンダムと戦闘を繰り返している。

★ネオ・ジオン残党軍の「袖付き」の主力機として配備された。



◆シナンジュとの戦闘も考慮してカスタマイズされたアンジェロ機。



「出張版」ヤマザキ軍曹のプラモバカー代

MS-06ザク考察

メガサイズモデルで「リアルなザク」を
徹底的に検証する！で、リアルって何？

メガサイズモデル MS-06F 量産型ザク

スケール：1/48

発売日：2011年3月12日

価格：8,100円（税込）

発売元：バンダイ

©1979-2011 Bandai. All Rights Reserved. MS-06F is a trademark of Bandai.



このページは、本書の母体でもある「グ
レーメカニックDX」でもなじみのプロ
デューサー「ヤマザキ軍曹」による注釈から
考察するザクをお届け！ お題は永遠のテ
マである「リアルなザク」。今春発売の
新しい「メガサイズモデル」を使い、宇
宙世紀の世界へズームイン！（←古っ！）



MEGA SIZE

【頭部&左肩部アーマー】

荒い製造らしき表現で製作。これはリアルかどうかではなく、近年の米軍ヘルメットがザラついた表面であることからのオマージュ。スパイクアーマーは、線以外の部分が荒い構造で製造され、突起は溶接されていると設定。



【胸部コクピット周辺】

地上戦におけるパイロットの昇降は明らかに面倒。そのため、現地で追加したという設定で足場を追加。ボディ側面には滑接跡を追加。これは装甲を合わせるためではなく、補強のために行われたという想定。



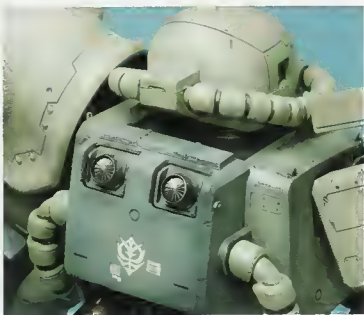
【右肩部シールド】

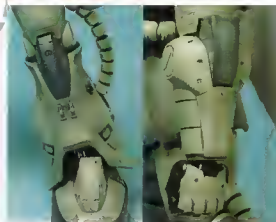
特徴ある右肩のL字型のシールドはそのままに、表面の凹隅に滑接で後繋げされたフックを設定。



【ランドセル上面】

宇宙用では姿勢制御用バーニアが収まる部分は、地上用においては強制冷却システムに変更。





【腕部上面装甲&脚部装甲】

下腕の上面装甲も荒い鋸造で製造されていると想定。これはリアル思考ではなく、脚部とのバランスを考えて行った。脚部は高強度の金属による鋸造で製作されていると想定。組み合わせのモールドがあった場所には溶接表現を追加。



【裾&かかと】

脚部裾の装甲部に飲料水・食料等のパイロットや兵士の生活品を搭載。人が手の届く場所は、ここが限界であろう。踵部には、メンテナンスハッチと思われるモールド、上面に作業用の工具箱を追加。



【つま先甲上箇】

敵兵が投げつける吸盤爆弾を受けやすい部分であるため、その対抗策としてツィメリットコーティングが施されたという設定。

【脚部対人兵器】

『MSイグルー2 重力戦線』などで使用されていた対人兵器『Sマイン』を装備。実際の対人兵器の機能としてはこの程度の高さが使用限界と思われる。

【ザク3面】



ガンダムの「リアル」を追いかけるための「ザク」

今でこそロボットアニメで同じ形状の敵メカが出てくることなんて当たり前だが、TV版『機動戦士ガンダム』の本放送時に「ザク」が登場した時は衝撃的だった。SFチックな世界観をバックに、スバルタンな緑のヤツがいっぱい出てくる様はドキドキもんだったし、主人公のライバル機は「赤」(ピンクか?)で、ツノが付いているだけの「量産あつてのカスタム機」なんて設定もグツと来たね。

もちろんその魅力はスタイルだけではない。派手な武器を使わない地味目の戦闘シーンや、あくまで兵器として扱われ、人物を絡めた演出等、主人公機である「ガンダム」以上にガンダムの世界観を作り出していたと言っても過言ではないわな。

そんなものをTVで見せ付けられた3当時、中学生のヤマザキ重吉は、「ガンダム・プラモ化」によりこれまで作っていた戦車・飛行機から一気に方向転換。画面から受け止めたイメージを再現しようと「1/144・ザク」をシコタマ買い込んで、ミリタリーカラ

ーに塗ったくったものである。そう! 夢中でガンダム世界の「リアル」を追いかけたのである。

そしてガンダム、というよりザクとの出会いから30年の歳月が過ぎた。まさかまだリアルなザクを追いかけているとは! まあ、自分なりの答えが出ていないからしょうがないか(笑)。

「でっかいザク」だから表現できたディテール

今回、本誌製作を機会に、長年結論の出ていない「リアルなザク」の解答を、プラモを使って導きだしてみよう

かと。その教材として選んだのが「メガサイズモデル量産型ザク」だ。

このキット、見た目は「でっかいザク」っていいでしょう! 的な典型的キャラクターモデルっぽい商品でありながら、1/48という大スケールキット。1/35スケールで展開する「U・C・ハードグラフ」シリーズ誕生で、モビルスーツの部分的ではあるが、立体化されミリタリーモデルには近づいた。で、まさか全体像を入手できる日が来ようとは! 良い時代だねえ。

メガサイズモデルは、単純な作りゆえ、組み立てる過程を楽しむ人には手ノット物足りないであろうが、徹底して加工するモデラーには好都合。

今までならオーバースケールになつてしまふ工作や表現も、1/48ということで、既存の戦車・航空機モデルのパーツ、フィギュアなどが流用可能! すなわち、我々の世界とガンダムの世界をつなげて「見ること」ができるのだ。

特に、フィギュアを配した時、そのサイズから「宇宙世紀の戦闘兵器・モビルスーツ」を感じることができ。卓上で「お台場、鶴岡の1/1ガンダム立像」と同じ感覚をザクで味わうことができるのだ! 見える、見えるよ、クラン!

キミも1/1ザク立像体験を卓上でぜひ!



↑1/48の戦車機型のフィギュアを流用。これがあるかないかで「リアルな表現」の意味が大きく異なる。



ザクの迷彩

ザクのカラー
バリエーションを考える



宇宙偵察用の
直線的な幾何学パターン迷彩

砂漠用の
オールドツクスな迷彩

「機動戦士ガンダム」の映像上では、ザクをはじめとしたモビルスーツの塗装は、いわゆる「設定色」のほぼ1種類である。しかし、アニメーションの世界で、実際に何が行われていたかということを考えてみると、モビルスーツは宇宙、地上など様々な場所で行動するからして、おそらく様々な状況に於いて多種多様な塗装や、迷彩があったと考えることは少しも不思議ではない。むしろ、「宇宙世紀の世界で遊ぶ」ということを考えると、そういったことを想像するののも1つの楽しみ方といえるだろう。

MS-06F 一年戦争中期 宇宙軍・偵察隊機カラー

設定設定

ジオン軍において当初、偵察任務を担っていたのは宇宙軍では陸軍偵察型のMS-05や06Cタイプであったが、後にF型をベースとした専用の専用偵察型であるE型が開発されると、こちらへ転換されていった。しかし、E型の生産数は少なく、それを補う目的の為に陸軍偵察型を改造していた。陸軍偵察型には各種砲や、初期の頃にはE型ほどではないにせよ光学カメラを主体とした観望を備えていたが、視界が劣化した中期以降では、E型と同様に開発された手持ちのガンカメラのみを装備させたF型が観望の主流となり、E型を継承する目的の継戦が必要と判断された。数の少ない専用機の穴埋めのためであったが、モビルスーツの高い汎用性を証明する事例ともいえる。また、宇宙軍においてその任務の性格上、迷彩を施す機体は偵察隊機には多かった。

機体解説

偵察隊所属のF型であるが、偵察隊によく見受けられた迷彩が施されている。偵察隊はおおむね空戦に乗り出し部やデブリに隠れて動かない事が多く、そのため迷彩は直線的な幾何学パターンが多かった。この機体では、頭部をグレーと顔部をブルーの2色を使用して大きく描かれている。やはりグリーンと白の基本塗装の上に新し専用迷彩と異なり、陸軍迷彩の色合いが強い。右肩部分に機体ナンバーが記されているが、偵察隊所属機は大幅に記されている。[23A]の大型の「23」が第2中隊3番機を、小さい「A」がA大隊所属を表している。スパイク部分に入ったラインにはジオン軍機によく見られた小隊カラーを指す事が多いが、この機体に関してはゴールドラインは所属の偵察中隊固有のカラーとの事であった。

MS-06J 一年戦争中期 地上軍・中東戦域 指揮官機カラー

設定設定

地上戦においては戦争中期以降になると防衛的役割が増え、おのずとモビルスーツにも迷彩塗装が進んでいた。派手なバーサナルカラーは特に地上戦において影を退め、ほぼ全軍で使用されていた小隊カラーも減っていった。また、ザクIIにおいて採用されていた通常のグリーンなカラーは多くの地域に採用可能で、小隊長機であっても特許カラーを除くずに通常のカラーのままで運用する機体が多くなっていった。しかしながら、ジオン勢力圏でも中東やアフリカの砂漠地帯ではやはりグリーン系の塗装では目立ち、多くの機体がデザート系の塗装に取り替えられ、迷彩を施す機体も多くあった。決まったパターンは存在せず、現地で整備部隊による無規則な迷彩の取組とんであった。

機体解説

この機体は中東戦域に配属していた部隊の小隊長機で、全身をデザートイエローに塗り替え、その上にタン系とブラウン系の2色で派手なパターンを描いているオールドツクスな迷彩である。この時期になると、それまでのJ型の動力部に換装されていた白色の宇宙用と同じ明るめなブルーグレー系のカラーから地上用専用のより暗いグレー系に変わらなれた。これは迷彩効果を軽減した結果であると思われる。派手な指揮官機カラーは一応見られる。派手なスパイク部分に小隊カラーと混ざるラインと、機体ナンバーがスパイクのアーチと顔面横、右つまみとヘッドで入れられ、一面面を覆って視認性を確保しているのでもとを思わせる。機体ナンバー「23A」は、第2中隊A小隊1番機を表している事から小隊長機と推測される。



MS-06J

一年戦争後期 地上軍・ヨーロッパ戦域機カラー

想定設定

戦争末期、連邦軍の攻撃により各地に分散。取り残された部隊は補給もままならずその数を減らしていき、少数のモビルスーツを持つ小部隊がゲリラ的に抵抗を続ける。末期になるに値い通信器材にも悪欠くようになり、送彩定機も減って多くは通常のカラーのままであった。一部の部隊には余力があり、そういった部隊では送彩塗装も引き続き行われ、特に北米や南アフリカ、北アフリカ、ヨーロッパの南部と中部にそういった部隊が残っていた。

ヨーロッパ方面では冬季が訪れた為に11月頃より機体があり、それに伴い冬季と色が変化した。当時の部隊では寒冷地装備等があるわけではなく防寒は遺棄に陥ったが、終戦まで近況し続けた。

塗装解説

中部ヨーロッパ戦域に所属していた機体で、上半部を薄いグリーンに、下半部をグレーに塗装しヨーロッパの地盤みを表現したベースカラー。以前よりこの戦域で活動していたと思われる。機体、このカラーの上にホワイトをオーバースプレーして冬季に対応した送彩としていた。機体塗料を用いていると思われる。バネルラインやエッジ部などに地色が現れ、使われているのがある。この前部には白塗つたに覆れた小隊カラー。モスバイク塗装とシールド上部にラインで入れられているのが多いが、一部によると機体の間に機体を見えぬように塗るという。必要時に機体カラーを修正する必要があるとされているが、機体やこたわらがある小隊カラーとして入れているものも少ない。機体ナンバーの「308」は第3中隊の8号機で、第3小隊2号機に当たる。



応急処置的に
冬期送彩を施す！



オデッサ地方を想定した、
手の込んだ3色送彩

MS-06J

一年戦争後期 地上軍・オデッサ戦域 指揮官機カラー

想定設定

戦争末期になると地上戦においても連邦軍の圧力が高まり、ますます防衛的戦術の様相が濃くなった。オデッサ戦に敗北を喫した後、同地に残存したモビルスーツ部隊は少数的ながらもあつて、証金機体で送彩を施したと言われる。ジオン軍における送彩部隊は機体色を考案方によって少数派であつたが、逆に数多いパターンで市販的に施されたものが多い事もある。比較的塗り変えは容易だったという。送彩を施すか否かの機体は両軍共に多量に用いられていた事もあり、中には機体的に採用する部隊もあった。また、連邦軍モビルスーツのジムが手の込んだ送彩を施されて出現し目にするに及び、同様に効果が高い送彩を施す機体もジオン側にも少数ながら表れていた。

塗装解説

この機体はオデッサ戦域に派遣された戦術的にも優秀した機体であるという。のちに黒海沿岸に侵襲した際にこの送彩を施された。同様に金かを塗り直して機体色を薄いグリーンに、それ以外の部分にタンと下地塗装され、肩甲骨はタンと黒いグレーの2色。それ以外の部分には薄いグリーンとグレーの2色を塗り、不規則にタンで描いた迷彩に手の込んだ送彩となっている。いかんせん初期の機体のようで、関節や動力部が宇宙用のブルーグレー系のカラーで目立ってしまっている。ここは実機が多いために送彩の塗料では測がれてしまつて送彩もかけられない。また、指揮官機であることから小隊カラーのライトブルーで、角飾りとスライク基部を塗っているものも送彩効果が落ちる事も無いものも少ない。

MS-06J

一年戦争後期

地上軍・ジャブロー戦域機 カラー

設定設定

地球解放の元となった連邦軍機体であるジャブロー機を模したため、初期段階から迷彩を施していたが確実せず、ついに大軍を持つことでジャブロー機を模した迷彩を施した。その前段階として水陸両用モビルスーツや陸上用モビルスーツでの周辺地域への浸透作戦を行い戦場からの撤収などを進めていった。当然、ジャブロー機周辺は連邦軍ジャングルに包まれ、その地形に合った迷彩を施す事となり、各種のジャングル迷彩が施され投入された。しかし、ここでは戦術部隊共通の迷彩パターン採用とはならず、各部隊、場合によっては機体のみに迷彩が施されていた。戦術的に劣勢が明らかになりつつあり、連邦軍で浸透する連戦な作戦部隊の立ち上がりとなったこのジャブロー機は、戦術転換を招いたこの作戦でも中途半端な兵力しか投入できず敗北を喫した。

塗装解説

ジャブロー戦術部隊の前段階にある周辺地域への浸透作戦に投入された機体。通称機体と異なり濃淡2色のグリーン塗装で、胴体部以外の部分に濃いグリーンとブラウン、濃いグリーの3色をやや尖ったパターンで迷彩を施している。濃密に施されたジャングルをグリーン、その木梢を濃いグリー、ブラウンは地面を表している。パターン自体は濃密に入れているが、単純なパターンで濃密迷彩の感はない。また、イエローで小隊カラーを基にしたラインと機体ナンバーを入れているのも目立つであろう。この機体も初期生産のJ型で、可動部は動力力や宇宙用カラーで迷彩効果を著しく減衰させている。場合によってはこの部分塗装の目立つ初期生産型を優先して迷彩機体としているのかもしれない。機体ナンバーの「013」は、C中隊第1小隊3番機と推測される。



ジャブロー付近のジャングルに対応した迷彩



キャリフォルニア・ベース守備隊向けの平原地帯用迷彩

MS-06J

一年戦争中期

北米大陸・守備隊機 カラー

設定設定

地球解放作戦の拠点であった北米のキャリフォルニア・ベースにおいては、工場設備を用いて地上用モビルスーツの開発、生産が行われ、各戦線に送り出したモビルスーツの整備や修繕もこなしていた。その一環として各地に派した迷彩も研究され、試験的なカラーリングを施された機体を送り出していった。特に戦術が強化していく中期以降は、それ以前において施した迷彩が少なく、また戦術部隊の面からも守勢イメージの強い迷彩の採用に消極的であったが、モビルスーツの機材を揃える為に積極的に行われた。また、1部軍上層部やベテランパイロットからは制式採用に反対する意見も多く、迷彩については各戦術部隊の裁量に委ねられる事となったため、現地で用いられる機体迷彩なども迷彩機体はあまり多くは存在しなかった。

塗装解説

連邦軍の地上における反戦活動が急激に激化した頃のキャリフォルニア・ベース守備隊向けに施された迷彩機。通称機体と同様のグリーンと2色の迷彩に、タンと胴体部同様の濃いグリーンの2色で異なるパターンを施してある。どちらかと考えればキャリフォルニア・ベース付近よりも北東の平原地帯に合わせた迷彩と見られる。特に肩部分のパターンではなく、腰周りをマスキングのみで施した迷彩が特徴的。腰周りを施した迷彩は、当時の連邦軍機体も少ないものでなく、機動時に強い迷彩効果がないという当たり前の理由もあって採用が限られており、現場においては迷彩の機体部隊には採用が限られた機体が多かった。機体で入れられた機体ナンバー「A17」は、A中隊第1小隊の7番機と推定される。この機体は、ジョアン軍による戦術転換の機体転換を要するするための配入で、機体ごとには方法が異なる。

ビーム兵器の運用が 出来なかったザク

ジオン公国軍が密かに開発を進めてきた人型戦闘兵器であるモビルスーツは、数種の試作機を経て初期量産型というべきMS・05ザクにおいて完成形となった。この時点での装備可能な兵器は、実体弾兵器が主体であり、すでに艦載用兵器として完成されていたメガ粒子砲に代表されるビーム兵器は、携帯型としては未だ実用化されてはいなかった。それというのもモビルスーツの動力源である熱核反応炉のジェネレーター出力が、ビーム兵器の運用可能な領域に達していなかったことが理由である。

ザクは限定的な運用に終わったMS・05に続いて、ジェネレーター出力及びスラスター出力を強化したMS・06ザクⅡへと進化し、一年戦争時の主力として活躍することとなるのだが、それでもビーム兵器の運用が基本的に不可能という、スベック上の制限は変わらず実体弾兵器の改良で戦局を乗り切ることとなった。だが、このことがビーム・ライフルを標準装備していた連邦軍側のRX・78・2ガンダムなどに対して、戦線が遅れを取る原因になってしまったことは否めない。それではザクで運用された兵器について、個別に解説していくことにしよう。

ザクの武装① ザク・マシンガン マイナーチェンジを繰り返した ザクの主力兵器

まずザクの全バリエーションにおいて主力兵器というべきポジションにあったのがザク・マシンガンである。

初期型の型式番号はZMP・47D。口径105ミリの砲弾をドラムマガジンに145発装弾し、連続発射が可能なこの携帯火器は、いわゆる歩兵が装備するアサルトライフルに相当するものだが、口径が戦車砲に匹敵することから、多目的榴弾、徹甲弾、成型炸薬弾などの多彩な弾種が用意されていたと言われる。

ただしこの初期モデルは、一年戦争開始直前の時点で、その威力不足が運用現場から指摘されていたこともあり、実戦を前に相当数が機関部と砲身を換装することで120ミリへと口径が拡大されている。

ここで使われた部品と砲弾は開発中だった新型の120ミリザク・マシンガンであるZMP・50Dのものを流用したものである。すなわち初期の120ミリザク・マシンガンにはZMP・47D改修バージョンと最初から120ミリスベックで製造された2種類があったということである。なお砲弾の大型化に伴って装弾数は145

MS-05/06 ザクの武装概論



史上初モビルスーツ ザクの武装

史上初のモビルスーツ・ザク。その武装は、初期のモビルスーツの使用目的が明確に現れたものであると言えるだろう。それはこういった質のものであり、どう使われたのであろうか。ここでは、ザクの武装を分析し、その狙いと効果を探ってみることにする。

文・矢吹明記



ザクの主力携行火器

ザク・マシンガン



ザク・マシンガン
(陸戦型ザク用)



MMP-80マシンガン



↑一番上のザク・マシンガンが最も一般的な形状のもの。中段は東南アジア戦線などに投入された陸戦型ザクのもの。細部は異なるが、基本構造は同系統と思われる。下段はザク改などで使用されたMMP-80マシンガン。口径は90mm。

発から100発へと少なくなっていた。その後、ザク・マシンガンはさらに新型のM・120A1（開発時の名称はZMC38Ⅲ）へと発展し一年戦争時の主力となる。マガジン設計を一新することで装弾数が332発へと大幅に増加していた他、破壊力や耐久性なども大きく向上したと言われている。これら一連のザク・マシンガンにおいて重要なこと、それはいずれも設計時においては無重力の宇宙空間での使用を前提としていたということである。そのためいずれの仕様においても基本的に大気との摩擦抵抗に伴う砲弾初速の減衰は想定していなかったため、一年戦争開始後に地球やコロニー内の

対モビルスーツ戦を 意識した90ミリマシンガン

重力圏内での運用においては砲弾初速の減衰に伴う威力の低下が指摘されることとなった。早い時期に新型が次々と送り込まれたのもそれが理由である。
対モビルスーツ戦を
意識した90ミリマシンガン
M・120A1はその後さらに新型のMMP-78とMMP-80へと発展した。これらは対モビルスーツ戦闘用に特化させたモデルであり、前者は120ミリ口径のまま、全体を小型軽量化すると共に、砲弾の貫徹力をアップさせている。また後者はさらに機動力をアップさせるために砲弾を新設計し、口径を90ミリへと大幅に縮小している。

これら、新型マシンガンはいずれもその外観が実際に存在している短機関銃や突撃銃に近くなっているのも特徴であり、初期型のいずれもがかなり無骨だったのに対して、相応に洗練されたデザインとなっていた。

一連のザク・マシンガンは順次投入されていたビーム兵器の前に旧式化すると思いきや、最終的には一年戦争を通じてまさに中距離以下戦闘における主戦兵器というべき立場を守り続けた。それはとりもなおさずミノフスキー粒子環境下での基本性能の確かさと、信頼性の高さゆえのことである。

ザクの武装② ザク・バズーカ 大型艦や構造物攻撃用 大口径火器

一方、モビルスーツ以外的大型艦や、要塞などの構造物攻撃用として配備された携帯兵器だったのが280ミリバズーカである。一般に「ザク・バズーカ」と呼ばれたこの兵器は口径280ミリの大型無反動砲であり、開発時には遠距離から核弾頭を発射することを前提としていたと言われている。しかし、実際には通常弾頭を使用した上で、モビルスーツによる宇宙空間での対艦戦闘に多用されたこととなった。

ちなみに無反動砲の場合、その威力は砲弾初速の大小と運動エネルギーの大小ではなく弾頭自体が持つ熱化学工



↑ザク・バズーカの破壊力が高いが、ザク・マシンガンなどと比べると取り回しなど扱い難い点も多く、性能をいかに高く発揮するには操縦にも必要になってくる。

ネルギーに依存していたこともあり、砲の初速自体は大きくはなかった。無反動砲としたのも宇宙空間での使用を前提としていたことが理由であり、無反動砲以外の構造では、発射時の反作用を機体のスラスターでは吸収できなかったことを考慮したことだった。ザク・バズーカは一貫してその弾頭口径は280ミリだったものの、弾頭そのものは常に改良が加えられており、ア・バオ・クーの戦闘においてはルナ・チタウム合金製のガキヤノンの足を一発で吹き飛ばすといった破壊力の高さを見せている。また発射機も数種のバリエーションが確認されており、単発型を基本としながらも『第08MS小隊』では5発入りボックスマガジンを装着した、自動装填タイプが登場している。単発型の場合には予備弾倉を装備し、その都度リロードを行





●機身の後部部にカートリッジを備えたタイプのザク・バズーカ。弾数の少ないザク・バズーカの経弾筒向上を目指して改良が加えられたモデルだ。

●ヒート・ホークは榴弾に斬りつける際、刃の部分が赤熱化して接した装甲を溶断する。そのため撃発は発光していない。右写真は、アフリカ戦線で活動していた青の部隊のディザート・ザクで、ヒート・トマホークを携行している。



つていたものと思われるが、具体的にどのような装備メカだったのかは不明である。

ザク・バズーカはその威力ゆえに、艦載戦に多用された一方、連邦軍側もビルストのルナ・チタニウム合金製装甲の頑固さが知られるようになると、対モビルスーツ戦闘にも積極的に投入されることとなった。ただしその装備数はザク・マシンガンよりは遙かに少なく、一部のエースパイロットのための装備と見ることもできた。これはシ

ヤア・アズナブル少佐が、連邦軍の対RX・78・2ガンダム戦において使用し、比較的近距离からその盾を破壊したことからもよくわかる。

ザクの武装③ ヒート・ホーク 近接戦に特化したユニークな兵器

さてこれら実体弾兵器に対して、より近接戦闘に特化した兵器として、連邦軍側が実用化していた「ヒート・サベル」に相当していたのが「ヒート・ホーク」である。その外観はある意味非常にクラシカルな斧状の武器であり、戦闘においてはその刃に相当する部分で敵の装甲を引き裂く、もしくは溶断するといった形で使われた。

原理としては刃の部分でジェネレーターから薄いた誘導電流によって超高温に過熱するというもの。一種のプラズマ集合体でもあったヒーム・サベルの刀身とは異なり、実体としての刃に相当する部分が存在したことから、それ自体に物理的な破壊力があったことは特筆すべきである。すなわち、ザクの腕力が過熱状態の刃に、何らかの破壊力をプラスする効果があった、ということである。

ヒート・ホークの兵器としての型式番号については、一部に初期型ザク用がヒート・ホーク・タイプ3だったのに対して、ジェネレーターのパワー

アップがなされていたザクⅡ用は、タイプ5だったといった記述があるものの、正確に体系づけられているわけではないため、その詳細は不明である。また形状もいくつかのタイプが確認されており、メーカーごとの違いがあったものと推測できる。通常の片刃タイプではなく、両刃にしたバリエーションも存在しており、それら別に「ヒート・トマホーク」と呼ばれている。

ヒート・ホークは原理も構造もシンブルかつプリミティブな兵器だった一方、その信頼性は高く、ザクⅡ以降に続々と戦線に送り込まれた性能向上型においても広く使用された。

また、その原理は、ザクⅡの後継機種として投入されたMS・07Bグフにおける、ヒート剣、MS・09ドムにおけるヒート・サベルといった、近接戦闘兵器の技術的母体となった。

すなわちメガ粒子砲を理論的ベースとする一連のヒーム兵器とはまた異なっていた有効性があったというところである。加えて別の見方では何よりも西洋甲冑の様な趣がある外観のザクⅡにとって、いかにもというルックスのヒート・ホークは、実によく似合う兵器だった。

ザクの武装④ クラッカーなど 作戦に応じて使い分ける短距離型火器たち

その他、機体に固定する武装を持た

なかつたザクでは実に多様な兵器が運用されていた。まずは「クラッカー」だが、これはいわゆる手榴弾である。詳細な構造は不明ながら、ザクが手にする丁度良い大きさの本体からは6つの撃点と思われる突起物が出ており、そのどれかが目標に触れた時点で着発するというメカニズムと思われる。

すなわち構造的には現実世界でも多用されていた対艦攻撃用の機雷に近いものと推測できる。弾頭は爆風と弾片で周囲を破壊するいわゆる榴弾であり、強固な装甲が施された対象物に対しては無力ではあつたものの、軽装甲車両や建造物には相応の効果があつた。

一方、このクラッカーに類似した兵器だったのが「Sマイン」である。クラッカーが多目的投擲榴弾だったのに対して、Sマインは陸戦における対人攻撃に特化した兵器で、機体各部にあらかじめセットした発射機から必要に応じて投射するという構造だった。

弾頭は炸薬と鉄球を組み合わせたものであり、現実世界で言うところの対地雷に類似していた。構造とネーミング、共にベースとなつたのは、第二次世界大戦中にドイツ陸軍が使用した対地雷であり、当時では対艦火器を持つて戦車に肉薄してくる歩兵を蹴散らすために、戦車内から発射できる装置もあつた。ザクとの組み合わせは、これが直接の発想となつていると思わ

れる。これらSマインは「第08MS小隊」において、実戦での使用が描かれていた。

ザクに開発された 機軸に開発された 機軸に開発された

さらに280ミリバズーカを上回る大型火器として「MS-IGLOO」に登場したのがシュトルム・ファウスドである。ガンダムシリーズはオリジナルから派生したOVA、特に後期のものになればなるほど、第二次世界大戦中にドイツ陸軍が使用したものの影響を受けていると言っても過言ではない。シュトルム・ファウスドの場合、ベースとなっているのは、使い捨ての歩兵携帯対戦車ロケットだったパンツァーファウスドに他ならず、モビルスーツのサイズに合わせて大型化していったのもあって、その弾頭の威力は一発で連邦軍のマゼラン級重戦艦を破壊できるほど強力だった。

なお、ベースとなったパンツァーファウスドは、弾頭の威力はともかく、射程が極めて短かかったことが大きな欠点だったのだが、シュトルム・ファウスドは弾頭にロケットブースターを装着することで、その射程を自由に延長させることができた。無誘導につき照準に当たった際は目標に直接対峙する必要があった一方で、熟練したパイロット

トの手にかかればザク・バズーカを上回る効果も期待できた。

さらに汎用性の高さが売りだったザクI/ザクIIには、後付けの兵器が次々と導入されることとなった。脚部3連装ミサイルポッドもその一例であり、ジオン公国軍が地球侵攻を開始した直後という比較的早い時期に投入されていたことから見て、重火力環境下での近接防御及び攻撃システムとして開発されていたことが伺い知れる。後にOVAで登場することになる前述のSマインは、このミサイルポッドの発想をさらに推し進めたものだったと判断して間違いない。

ミサイルポッド自体は、装填済みの3発のミサイルを発射してしまっただけに、弾体の再装填が容易に可能だったかどうかは不明で、おそらくはバックごと交換するシステムだったと思われる。この3連装ミサイルポッドは、ザクの後継モビルスーツだったクワフなどでも近接戦闘用として装着された例が垣間見えた。

ザクの武装⑧ マゼラ・トップ砲 改造された火器類たち

ここまで記述した通り、一連のザクシリーズ用に投入された兵器類は、近接戦闘からアウトレンジ前提のスタンダードオプ兵器まで実に多岐にわたった。

ただしザク・マシンガンとザク・バズーカとの間を埋める中距離連続発射実体弾兵器の不備が、早い時期から指摘されていたこともあり、一年戦争勃発後に既存の兵器を改造することで具体化されたのが「マゼラ・トップ砲」ことZIM・M・T・K175C無反動砲である。

この兵器はジオン公国軍が装備していた主力戦車であるマゼラ・アタックの175ミリ主砲を流用し、小改造した上でモビルスーツが手持ちで操作できる汎用砲としたもの。砲身の口径はマシンガンとバズーカの中間。ただしバズーカの様な低初速のロケット砲ではなく、最初から重火力圏内での運用を前提としていた高初速の戦車砲とあって、地球上では相当に有効な兵器だったことは間違いない。戦車砲ゆえに弾種も多目的榴弾、対戦車榴弾、対戦車高速度弾などが用意されていたことは容易に推測できる。状況によっては連射側の陸上兵器をアウトレンジすることも可能だったと思われる。苦肉の策の改造型とはいえ、ザクシリーズにとつては非常に使いやすい兵器だったのだ。

またザクIの派生型としてゲームなどに登場したのがMS-05I、その名もザクI・スナイパータイプで、あるいはIIも含めて通常型のザクでは装備不可能だったチーム砲の運用が可能と

●ザク・マシンガンとザク・バズーカの間を埋めるマゼラ・トップ砲。多くの場合で用いられているが、登場した当初は1つ1つ白黒で描かれていた。そのため一部には誤解を生じたため、カトリックを信じたものもある。



していたのが特徴だった。ここではジエネレーターの出欠不足を補うため、ランドセルに追加ジエネレーターを装備し、長射程のビーム・ライフルの運用が可能となっていた。もちろんスナイパーの名称の通り最前線で敵モビルスーツと交戦するというよりは、後方から敵の指揮艦等をアウトレンジから狙撃することが任務だった。ザクI・スナイパータイプは、ある意味、旧式化してしまったザクIの再利用型と見ることもできた。

以上、ザクシリーズ用に開発された兵器の数々は、いずれも汎用性が高く、後継機種であったクワフやドム、ゲルググにまで引き継がれた装備が少なくない。その意味でもジオン公国の兵器開発体系は、その初期からしっかりと整理されていたということができる。



ザク系機体の 実力とは!?

ザク系機体とライバル機たちの
性能を比較テスト

ザク系に連なる機体とは、
常にジオン系モビルスーツの
標準的な存在と言っていだらう。
ここでは、これに対する
主に連邦軍系などの
ライバル機と比較を
行ってみよう。

質より量を優先!?
試作競争の意外な結末

一年戦争においてジオン軍が投入したモビルスーツMS、05ザクI。ジオン軍による制式化決定に至る道のりです。そのザクIと主力モビルスーツの座を争ったのが、EMS・04ツダである。ザクIとツダの競争試作は、ジオン社とツイマツ社という、ジオン

を代表する重工業企業の激突でもあった。いうまでもなく、制式化されたのはザクIだが、これは政治をゆがめて採用された機体だという批判が、軍の一部に残っていた。裏を返せば、ツダの方が高性能なモビルスーツだったという主張である。実際のところはどのようなのだろうか?

両機のスベックを比較してみると、全備重量は4トンほどザクIが重く、ジェネレーター、スラスタは両方と

もツダが上回っている。特にツダのスラスタ出力はザクIの21200kgに対して58700kgと2倍以上もあり、これはMS・06ザクIIはおろか、ジムをも凌ぐ数値である。

武装 特に兵器の面では両機ともほぼ同じ装備であるから、戦い方も基本的には同じだと考えてよい。加えて、ツダはシールド・ビックと呼ばれる制突兵器を持っている。高速で敵に肉薄し、その勢いのままにシールド・ビックを突き立ててトドメを刺す。高出力のスラスタに裏付けられたツダの戦い方を象徴する装備といえよう。

こうして見ると、ツダの優位は疑いないように思われる。だが高性能がツダ採用の足かせになったという見方はできないだろうか? 連邦軍との戦争においてモビルスーツは、ジオン軍の切り札であり、かなりの数をそろえる必要がある。しかし、ツダは高性能であるがゆえに生産性や、コストの面で数が揃えられないという問題があったのではない。

また、コロニー制圧や、地上での使用を考えると、ツダはオールラウンド性に欠けるといえる。戦術面に特化して、戦術面における考え方が弱かったともいえるだろう。ツダは政治に負けた。それは一面では真実だが、ザクIに政治を納得させる材料が揃っていたことも見落とせない。



MS-05 ザクI

17.5m	全高	17.3m
50.3t	本体重量	
66.0t	全機重量	61t
300km	ジェネレーター出力	1150kw
21200kg	スラスタ総出力	58700kg
標準人ダール全重	標準武装	
ザクI・マシンガン ザクI・バズーカ ヒート・ホーク	武装	ザクI・マシンガン ザクI・バズーカ ヒート・ホーク シールド・ビック ライフル

EMS-04/EMS-10 ツダ

17.3m	全高	17.3m
50.3t	本体重量	
66.0t	全機重量	61t
300km	ジェネレーター出力	1150kw
21200kg	スラスタ総出力	58700kg
標準人ダール全重	標準武装	
ザクI・マシンガン ザクI・バズーカ ヒート・ホーク	武装	ザクI・マシンガン ザクI・バズーカ ヒート・ホーク シールド・ビック ライフル



生き残りを賭けた ボールとの戦い

連邦軍最初の量産モビルスーツであるRGM-79ジムは、機体の基本スペックでザクⅡを大きく上回っている。これは、ジムが「ザクに勝てること」を意識して開発された機体だから当然のことである。

機体性能の優位に加えて、ビーム・スプレーガンやビーム・サーベルといった高性能武器を装備したジムに、ザクⅡが一騎打ちで挑むのはベテランパイロットでも分が悪いだろう。

だが、ザクⅡとジムの対決ということならば、少し視点を変えてもいいかもしれない。一年戦争後半、ジムの本格投入が始まったソロモン戦の頃には、ジオン軍の主力はMS-09Rリック・

ドムへの切り替えがかなり進んでいた。リック・ドム+ザク、ジム+ボールというハイ・ローミックス編成同士の集団戦が起こるようになっていた。ザクはこうした様相の戦いで、ボール対策に活路を見いだしていたのではない。

RB-79ボールは、民生品作業用ボットを軍用に転用したモビル・ボットでジムの支援機に位置づけられる。このボールが搭載している180ミリキャノンが威力で、ドムにとっても脅威であり、さらにジャイアント・バズを主体とするドムには戦いにくい相手であるといえる。ボールを相手に弾薬の消費は避けたい。そこでザクがマシンガンで弾薬を張ってボールを牽制し、ドムがジムとの戦いに集中できる環境

を作るのだ。

A M B A C機能のあるザクとの単純比較はできないが、全備重量時のスラスト・重量比でザクの1・6倍を超えるボールは、機動力でザクを凌いでいる。したがってザクにとってもボールは決して侮れないが、装甲がないに等しいとされるボールには、1発でも命中させれば致命傷が期待できる。実際の戦場では、機体の数の差が開きすぎたので、結局はジオン軍が押しつぶされてしまったが、局所的にはかなり有効に機能した役割分担だっただろう。連邦軍が2連装ファイブティーンキャリバーを搭載したボールK型を投入したのも、こうしたジオン軍の戦術に対抗するためだったのかもしれない。

MS-06F ザクⅡ	RGM-79 シム	RB-79 ボール
17.5m	18.0m	12.5m
50.2t	50.2t	17.2t
73.3t	58.8t	25.0t
978kw	1250kw	400kw
43330kg	55500kg	24000kg
装甲スチール合金	装甲材質	チタン系合金
ザク・マシンガン ザク・バニー・サ ビート・サークル	武器	連射バズカ Cannon スプレーガン・ビーム・サー ベル・ハイパー・バズーガ シールド

ザクⅡ ボブリー VS.



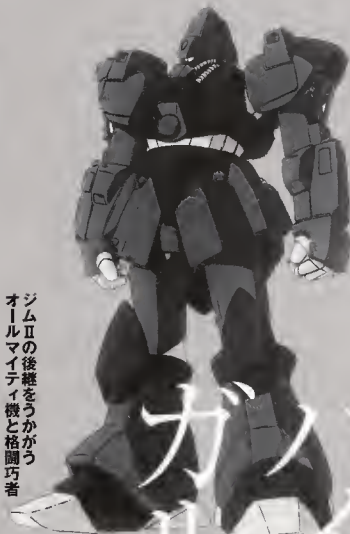
RMS-106 ハイザック RMS-117 ガルバルディβ

18.0m	全高	19.0m
36.7t	本体重量	36.3t
63.6t	全備重量	56.9t
14289kW	ジオスター出力	15677w
64800kg	スラスター総出力	63200kg
チタン合金・セラミック複合材	装甲材質	チタン合金
ビーム・ライフル ビーム・サーベル ビート・ホーク ミサイルポッド	武器	ビーム・ライフル ビーム・サーベル シールド (ミサイル)

ジムⅡの後継をうかがう オールマイティ機と格闘巧者

RMS・106 ハイザックとRMS・117 ガルバルディβは、ともに宇宙世紀0080年代中盤以降に地球連邦軍によって量産されたモビルスーツである。全備重量、ジオネレータ、スラスターの各項目においてこれといった違いがなく、ともに全天候型モニターとリニア・シートを搭載する。正確な制式化の時期は不明だが、似たもの同士の両機がともに量産に移された背景には何があったのだろうか？

ハイザックは、ジオンと連邦の重需企業が合併や買収を重ねて巨大化したアナハイム・エレクトロニクス社が戦



ガルバルディβ VS. ハイザック

後最初に開発した量産機で、新素材のチタン合金・セラミック複合材で作られたザクベースの機体に、ジム系モビルスーツで培われた連邦軍のウェポン・システムが組み込まれている。連邦系企業のカキム社製ジオネレータを採用した副産物として、ビーム・ライフルとビーム・サーベルの併用が、できなくなるという欠点はあったが、全武装がオフション化され、パイロットの好みで装備を組み合わせられるなど、欠点を補ってあまりある汎用性が期待されていた。

一方のガルバルディβは、YMS・15ギャンにビーム兵器搭載能力を与えた大戦末期のジオン軍モビルスーツ、MS・17ガルバルディαの高性能に注

目した連邦軍が、同機の装甲軽量化を推し進めて開発した機体だ。このような開発経緯を見てみると、両機の差違が見えてくる。ハイザックは両軍機の長所を取り入れてオールマイティ性能を目指しながら、連邦軍に一日の長があったビーム兵器を主体とする戦い方を、ガルバルディβは、格闘巧者であるギャン系モビルスーツの末裔として、射撃戦よりも格闘戦に重きを置いただろうということだ。ジムⅡ後継機を求めつつも、時代の変化に確信を持てないでいた連邦軍は、オールマイティ機としてのハイザックの他に、保険として格闘戦に優れたガルバルディβも残しておいた、ということなのではないだろうか。

爆発的進化を生き延びた 真の汎用モビルスーツ

モビルスーツは、グリプス戦役や第一次ネオ・ジオン戦争中に第2〜第4世代モビルスーツという枠組みの中で爆発的進化を遂げたが、その後、新機種種の開発には急ブレーキがかかっている。ここにあげた2機は、第一次ネオ・ジオン戦争後に開発され、各々の陣営の主力機となっていたモビルスーツである。

両機のスベックは極めて似通っているが、特筆すべきは、本体重量の劇的な減少だ。ギラ・ドーガはザクⅢの44・2トンからほぼ半減の23・0トン。ジェガンも、ジムⅢに比べて17・3トンのみ軽い21・3トンとなっている。こ

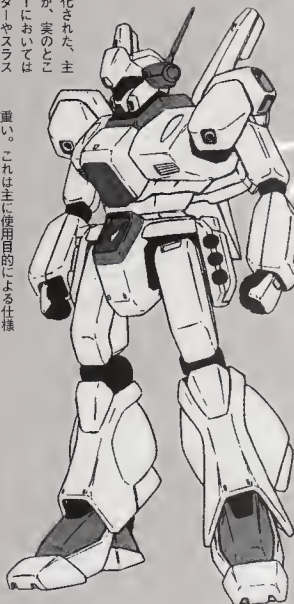
れは爆発的進化期に実用化された、主に装甲や機体構造の技術が、実のところ量産機というカテゴリにおいては無用であり、ジェネレーターやスラスターの高出力を維持し、機体自体の構造を見直し、大幅に軽量化する事で、実質的な基礎性能を大幅に底上げすることが、もっとも適切という結論だ。

さらに任務に応じた追加装備で対応し、ザク以来の量産モビルスーツの「汎用性」は、ここでもようやく完成を見たと言える。

もっとも、製造はどちらもアナハイム・エレクトロニクス社製であることを忘れてはならない。つまり、技術レベルはほぼ同一ということだ。両者の間には10〜20%の性能差があり、ギラ・ドーガは出力、推力に優るが、重量は

重い。これは主に使用目的による仕様の差であると言っている。おそらく、ギラ・ドーガの方が想定される任務の幅が狭く、それに特化した機体であるという事なのだろう。

あえて、両陣営の戦略的な環境まで加味するならば、数が少ないネオ・ジオン側は、攻撃の主選機を握るかわりにパイロットへの要求が多く、対するロンド・ベルは、即応部隊としての役割はつきりしているが、常に受け身を強いられるということだろう。戦場で両機が相まみえる姿は、状況によって有利、不利が分かれる緊迫感に満ちた戦いになったはずだ。



AMS-119 ギラ・ドーガ		RGM-89 ジェガン	
20.0m	頭高	19.0m	
23.0t	本体重量	21.3t	
30.3t	全機重量	47.3t	
2160kW	ジェネレーター出力	1870kW	
64000kg	スラスター駆出力	61400kg	
チタン合金・セラミックス複合材	装甲材質	チタン合金・セラミックス複合材	
ビーム・マシンガン ビームソー・アックス グレネードランチャー シュワム・ファウスト	武装	ビーム・ライフル サーベル バルカン砲 ハンドグレネード ミサイル・ランチャー	





後方支援を一変させた ザクという革命児

従来の戦争のあり方を一変させたモビルスーツ、MS・06ザクIおよび後継機種MS・06ザクIIの登場は、一年戦争とその後の戦争のあり方を決定づけた。高速かつ高火力の機動兵器が繰り出す変幻自在の戦術を前に、従来の艦隊編成を中心とした連邦軍は後手後手に回り、緒戦で完全にイニシアチブを手放して大敗したからだ。「ザクに勝てるモビルスーツ開発を急ぎ」に、V作戦が実を結ぶまでの長い期間、ザクを押し立てて攻めてくるジオン軍を相手に、連邦軍は苦しい戦いを強いられていたのである。



ザクと 整備・補給



モビルスーツを兵器として捉えた場合、

忘れられがちなのはその運用がどう行われていたかだ。

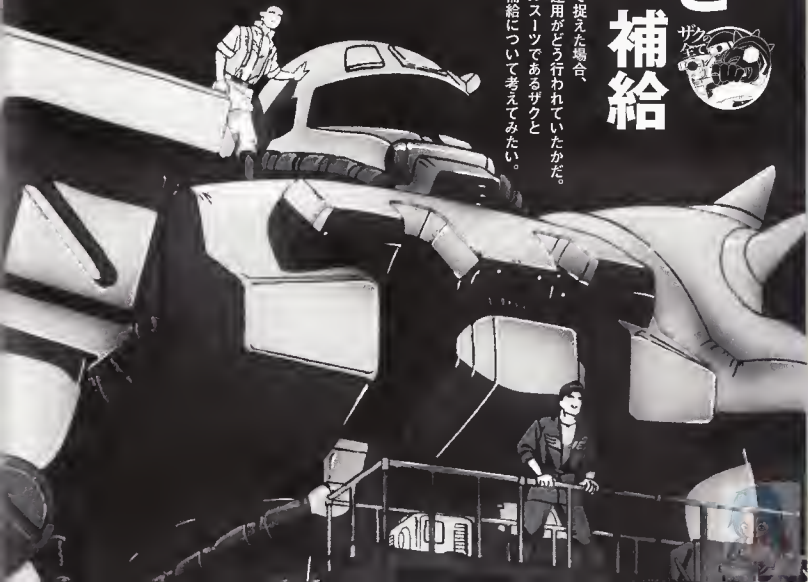
ここでは、人類初のモビルスーツであるザクと

一年戦争という舞台での補給について考えてみたい。

だが、ジオン軍にとってザクの存在は守護神であると同時に、非常に厄介な存在でもあった。従来の兵器体系から大きく外れ、新たに立ち上げられたモビルスーツの運用は、実戦を通じて初めて経験する事も多く、予想外な出来事が起こる可能性も高いため、補給を中心とする後方支援に多大な負担を強いにしないからだ。ザクのインバクトの裏にはそれを取り巻く後方支援の重荷があるはずである。本稿では、ザクの運用を軸としつつ、後方支援にテーマを絞って考えてみたい。

戦争における 後方支援と物流管理

そもそも軍隊が実力を發揮するため



には、前線兵力だけでなく、前線の兵士たちを支援する組織が欠かれない。いくら兵士の数が揃い、戦意が高くても、あるいは最新装備が充実していても、弾薬や食料を運ぶ補給部隊がいなければ戦力にはならない。医療、補給、新兵教育などをはじめとする後方支援組織は幅広いが、主に前線への物資供給と、その流通を管轄する組織の仕事全般を、軍用語ではロジスティクスと呼ぶ。今日、企業などの調達・物流流通の総合管理にも同じ言葉が用いられているので、耳慣れているだろう。日本の軍用語としては、兵站という呼び方をする。

宇宙世紀の戦争、新たに登場したザクという兵器も、このロジスティクスの原則と無縁ではない。ザクが戦力であり続けるには、ひたすら後方の本国や生産拠点から武器、弾薬、推進剤はもちろん、整備用のネジ一本まであらゆる物資を運ばなければならない。もちろん、パイロットをベストコンディションに保つ食料や、医薬品もこれに含まれる。ロジスティクスが正常に機能してはじめて軍事作戦は成功する。軍隊においてロジスティクスが重視されるのは、これが機能しなければ、作戦指揮が成り立たなくなるからだ。

以上のことから考えると、開戦翌日からブリテン作戦、ルウム戦役の頃まで、ジオン軍の作戦がほぼ計画

通りに進んでいた期間のロジスティクスは、スモースに機能していたに違いない。中核戦力のザクは期待通りの働きをして、コロニー落としを成功させ、ルウム戦役では勝敗を決定づける戦いを見せた。

どちらもう性格は違えど、ザクをはじめて大量に動員した作戦であることに違いはない。こうした新兵器を大量にかつ同時に運用するには、事前の精密な補給計画と、その実行が不可欠である。もちろん、現場レベルでの過誤や混乱は起こっていただろう。しかし、受け身に立たされた連邦軍の方が混乱の度合いは大きく、対応は後手にまわがら、連邦軍の3倍もの戦力を有しながら、連邦軍がルウム戦役で敗北したのは、数値に表れるロジスティクス能力の差も大きく影響していただろう。

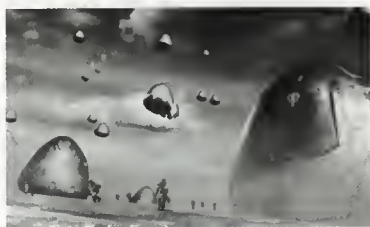
宇宙空間におけるザクの整備と修理

ザクのような、複雑で大型のシステムの稼働状態を維持し続けるには、前線での整備が欠かせない。極端な話、動かしただけで、何らかの故障の因子が発生する可能性があるからだ。このように兵器を前線で整備、修理することもロジスティクスの一部である。

平時のメンテナンスなら、かなりのところオートメーション化が進んでいるに違いなく、導電チェックと駆動部

の点検程度で充分だろう。また、例えれば、ザクのシールドアーマーを外して、関節部を点検するという物理的な作業でも、宇宙の無重力空間であればかなり容易で、扱いやすいクレーンと、専用の固定具があれば、極少数人数でも整備は可能だろう。

ところが、戦闘が発生すれば状況は一変する。モビルスーツに限ったことではなく、兵器はテクノロジの塊であるため、戦闘がもとで生じた損害を現場で修理するのは難しいだろう。こ



れに対しては、2つの解決策がある。1つは、腕や脚などのパーツをあらかじめ用意しておき、故障した部位とそっくり交換してしまふことだ。ただしこの方法には欠点もある。パーツの保管にかなりのスペースを取ってしまうことと、使える部分を多く残したままの交換で無駄が増えてしまう。そこでもう1つの方法、主要パーツをさらに細かいユニットに分けて、故障した部位のユニットだけを交換する整備パターンが有力となる。これは後述する地球球攻撃に際しても、バックステージを軽小型化できる利点がある。

ただし、合理的な交換パーツのユニット化だが、部品管理が複雑かつ大がかりになるという欠点もある。戦争序盤のうちは、ザクといつてもC型とF型くらいしかないもので、共有パーツも多く、管理は楽だったにちがいない。しかし、戦争後半にモビルスーツの機種が増加し、装備の数も増えてくると、そのユニット管理が複雑になり、事故もかなり頻発したものと思われる。パーツの規格統一を図った、統合整備計画が持ち出されるのは、至極自然の流れだったと言える。

ミノフスキー粒子下の補給物資の流れ

このような問題はありつつも、宇宙空間におけるロジスティクスは比較





的小規模の組織で維持できていたと考えられる。これは現場も一緒でユニットにせよパーツにせよ、交換作業は少数で行なわれていただろう。

ところで、ザクの部品調達、どのような組織のもとで行なわれたのだろうか。これはミノフスキー粒子環境下ということも考慮する必要がある。「機動戦士ガンダム」映像中、シャア・アズナブルが上官であるドズル・ザビに直接補給を頼むシーンがあったが、ミノフスキー粒子化での長距離通信は、必ずしも円滑に行くとは限らない。むしろ通常の補給は、とりまとても艦艇ごとに行なわれただろう。

有力なのは一定の日時に定められた宙域で補給艦と合同し、それまでにとりま定められた要求書を補給艦に提出して、受領するという手順だ。いささかルーズなやりとりだが、手続きの正確さよりも時間が惜しい軍事作戦中、これが一番効率が高い。この時に補給艦が欠品していた場合は、次の合同に申し送られただろう。このようにして数隻の艦艇に物資を届けた後、補給艦は本国に帰投して、補給内容を報告。また物資を満載して前線におもむくのである。

これが一定規模の作戦になる場合は、あらかじめ安全な宙域に物資を満載した補給艦が集結して、集まってきた作戦艦艇を補給するだろうし、さらに大

きな作戦の場合、作戦艦艇は根拠地に集結して、整然と発進する。ここになる。

これが地上になると、少し事情が変わる。ジオン軍の地球侵攻は降下作戦によって始まったが、安全を確保できず占領地に補給集積所を設け、そこに宇宙からコンテナを投下して、物資を届けるのである。集積所の物資は、車両や航空機を使って前線に届けられた。地上の輸送力は宇宙に比べるとずっと小さいという問題もあるが、基本的な仕組みは宇宙とは変わらない。

ジオン軍が直面する 重力の脅威

宇宙世紀0079年3月1日、ジオン軍が降下侵攻した地球においては、ロジスティクス状況が激変する。地球の重力によって生み出される諸問題が、兵站部門に重くのしかかったであろうからだ。

説明をシンプルにするため、地上侵攻部隊の先鋒を担ったザクに話を集中させてみる。例えば、脚部に被弾して行動不能になったザクがいた場合、まずこの機体を回収しなければならぬ。合計60トン近いザクと、その装備を回収するには、かなり強力なクレーンを積んだ大型トレーラーが必要だ。さらに、車両が入れない土地から回収するには、別のザクがあたるしかない。こうした作業のために、MS・06W作

業用ザクやMS・06Vザクタンクも導入されたが、今度は回収機の修理と整備という大仕事が必要になる。ところが宇宙なら、スラスターさえ動けば自力で帰還できるし、味方モビルスーツやランチを使って容易に回収できる。このことだけでも、地上でのモビルスーツ運用がいかに厄介かわかるだろう。

おそらく、ジオン公国軍は、地球でのロジスティクス問題を理解してたてであろう（兵站を考慮しない軍に大規模侵攻作戦など実施できない）。それでもジオン軍は地球侵攻を決意した。兵站の増強が間に合ったのか？ それはないだろう。地球侵攻を避けるためのコロニー落とし作戦だったはずだ。長期戦をにらむ兵站まで周到に準備していたとは考えにくい。

おそらく、ロジスティクス問題の解決は、一気呵成の電撃戦に求められたのだろう。ごく短期間で地球上の主要な資源、生産拠点を占領し、先に連邦軍のロジスティクスを崩壊させ、あらば取り返すのだ。これに沿うならば、地球降下作戦を開始した直後のジオン軍兵站部門は修理、回収という手順をほとんど顧みず、装備および武器弾薬の供給にのみ力を注いだと考えられる。パイロットの数より多くのザクを用意し、壊れたら修理を待たず新しい機体を使って再出撃するようやり方だ。おそらく、ミノフスキー粒子下



の兵器であるザクは、コストのかかる精密誘導兵器用の火器管制システムは搭載していなかったであろうから、見た目よりも安価な兵器であった可能性もまた、あるだろう。

もちろん、すべての戦場でこのような状況の使い捨てができたはずはないだろう。しかし、戦線の数カ所でのこのような運用ができれば、突破されるのを恐れた敵は、全体的に退くこ

となる。結果として、ジオン軍の進撃速度は保たれるのである。

遺棄された機体は、戦闘が一段落した後修理、回収すればよい。地上戦が始まった直後のジオン軍の急進撃には、このようなロジスティクス面での発想の転換が必要だったはずだ。

後退局面で仇となったモビルスーツ使い捨て戦略

だが、緒戦の快速進撃でも連邦軍が降伏せず、ジオン軍が攻勢限界を迎えるのと、とたんにジオン軍の地球侵攻主目的は崩壊したはずだ。戦闘が膠着状態

に移ったことで、遺棄したモビルスーツの修理、回収が困難になり、損害が供給量を上回りはじめる場面も多かったらう。極端な話、ネジが1個、コンピュータ端末が1台あればすぐに直せる故障でも、その時間が与えられず、完全に失われてしまうのである。

パイロットの事情はさらに深刻だろう。動かなくなった機体を捨てたままではよかつたものの、敵勢力圏に取り残され、殺害されたり、捕虜になる危険性が高かつたからだ。パイロットの育成には時間がかかる。そうでなくとも、地球侵攻から戦い続けているパイロット

トは、戦前から長い時間をかけて育成してきた、かけがえのない正規兵ばかりだ。兵器生産より先に人材が枯渇するのは、短期決戦に失敗した軍隊にたびたび見られる現象だが、歴史の教訓はジオン軍にも見事に当てはまる。

事態の悪化は、前線のみにとどまらなかった。同じ頃には、軌道上空においても、高々度戦闘機セイバー・フィッシュなどによる連邦軍の哨戒が活発になり、宇宙からの補給が断たれるといった状況が頻発した。

キャリフォルニア・ベースなど現地兵器工廠はフル稼働していただろうが、

今度はせっかくの装備を前線に届ける輸送手段の確保が難しくなっただろう。そうでなくとも手持ちの輸送力は、前線からの撤退支援でフル稼働しているにちがいないからだ。かるうじて維持していた物流ラインの混乱も想像に難くない。ようやく物資を届けようとした、すでに敵占領下になつてしまつたなら、笑えない錯覚もあらうと見ていただろう。

ついでに、連邦軍も敵の事情を鑑み、直撃したザクで編成したリブラ部隊を投入して、ジオン軍の物資集積所を襲撃させた例がある。

戦争も後半になると、前線部隊の疲弊は隠しようがなくなる。他の機体からパーツを流用しているモビルスーツはまだいい方で、破損して役をなさない装甲をそのまま使っていたり、腕がないまま出撃するケースも見られるようになるからだ。前線の窮状は、ロジスティクス面の崩壊を示唆している。花形のモビルスーツ部隊でこの有様なのだから、他の部隊の窮状は推して知るべしだ。



ザクを前線に押し立てた短期決戦を、ジオン軍は二度敗行し、どちらでも作戦的には目覚ましい成功を取めながら、勝利には異がらなかつた。その影には、自らが頼みの綱として投入したモビルスーツが補給の重大な足かせとなり、自滅の道をたどつたという考え方も、またあるのではないだろうか。





ザク戦闘概論

様々な角度から分析する

その戦略的

ザクの評価

意義の盛衰

文・矢吹明記



宇宙世紀の歴史の中では、輝かしいモビルスーツ第1号であるザク。しかし、映像作品『機動戦士ガンダム』の中では、結局のところやられ役である。この二重の「スタンダード」が、ザクという存在を曖昧なものにしていると言ってい。ではザクの評価とは一体どうすべきなのだろうか。ここでは、宇宙世紀の世界と映像、双方から考えてみたい。

宇宙を行く歩兵であった モビルスーツ・ザク

ジオン公国で人型機動兵器のモビルスーツ(MS)が実用化され、最初の量産機であるMS-05ザクが実戦配備に就いた時、ジオン公国軍はまさに地球連邦への独立戦争を計画していた時期に相当していた。すなわち当初はあくまで宇宙空間での戦闘を想定していた兵器だったということだ。

兵器として配備運用する上でまず素朴な疑問として挙げられること、それはなぜ人型という形態を選んだのかということである。言うまでもなく宇宙空間での戦闘が前提であれば歩行の必要はなく、すなわち脚の存在は無意味に等しい。それでもザクが脚を備えた人型となった背景に存在したのは、おそらく広大な宇宙空間においてそのまま歩兵に置き換える計画ゆえだったと推測できる。

最初から大量生産を行うことを前提としていたのもそれが理由であり、ザクはその初期から戦闘機と歩兵が一体化したような戦闘形態が考えられていたことは疑いない。

むしろ戦闘機としての運用に特化した存在としては、いわゆるモビルアーマーが同時期に計画されていたわけだが、こちらはより機動性を高めた武装宇宙船というべき存在で、汎用性とい

う意味では歩兵的な任務をこなす上でその能力に不足があったことは否めない。すなわちモビルスーツとモビルアーマーの協調運用がなされてこそ、兵器としての存在意義があったということである。

それではここからは、ザクの様々なバリエーションの特徴を踏まえ、実際の運用上のポイントを考察していこう。

映像内ではいい所がほとんど存在しなかったが……

「存じの通り、『機動戦士ガンダム』シリーズにおいて、ザクが最初に画面に登場したのは、地球連邦側のコロニー・サイド7において「新型モビルスーツ」が建造中であるとの情報を受け、ジオン軍側が偵察に送り込んだときである。ここで注意すべきは、この時点で、すでにザクは編隊での協調運用を想定していた、ということだ。

ちなみに、ザクに代表されるジオン側モビルスーツの最小構成単位としては、後述する「黒い三連星」と呼ばれたエースパイロット集団も、その初期にはザクを使用したという設定で、3機が基本だったと思われる。ただ、任務によっては2機を最小構成単位とする場合もあっただろう。

2機か3機かについては現実世界での戦闘機運用の歴史においても、様々な評価がなされている分野であり、現



在の結論としては2機での運用の方がすべてに渡って合理的であるとされている。とはいえ例外は付き物であり、3機が特殊な連携プレイを行うことを前提としたのがいわゆる「黒い三連星」のジェット・ストリーム・アタックだったということなのだろう。



なおザクは、初期のMS・05も、改良型のMS・06もジェネレーター出力が限られていたことから、ビーム兵器の運用が基本的に不可能で、メインの武器は実体弾を使う、いわゆるザク・マシンガンだった。こうしたモビルスーツのバイオニアゆえの至らない点は、次第にザクの活躍の場を狭めていったことは否めない。これは『ガンダム』放映時も、シャアが駆るスペシャルユニークが施された専用ザクを以てしても、未だ操縦に習熟していなかったアムロが駆るガンダムに、まったく歯が立たないという残念な状態を描かれている。

機動兵器としてほとんど欠点がなかったザク!?

とはいえ、ザクが配備されていた時点では、ガンダム、ガンキャノン、ガンタンクの3機種しかなかった連邦軍側モビルスーツと対峙していた戦線だけではなく、各種宇宙艦艇、陸戦兵器、歩兵を相手にした戦いでは、相当の戦果を挙げたことは疑いない。特にザクにとって当初の戦闘領域であった宇宙空間においては、その圧倒的な優秀な機動性がモノを言ったことは確実だ。

それはザクの動きを見ていれば明らかで、スラスターと手足をフルに駆使した急激な方向転換は、連邦軍側が発射したミサイルを直前でかわすといったことも可能だったはず。こうした機動は通常の戦闘艇では不可能だったし、頭部カメラと機体の姿勢変更メカをフルに駆使して、実現できた360度全周囲に対する警戒とあいまって、その性能はほぼ万能だった。

問題は連邦軍側が開発したRX-78ガンダムというモビルスーツが、あまりにも強力だったことのみであり、そのことさえ除けば機動戦闘兵器として何の不足もなかった。

なおザクの機能において、もう一点不備を指摘するのであれば、それは大気圏突入能力を備えていなかった、という点である。もちろん、これ以上移動するということは、母艦に格納した上で移動するというのが前提だが、ザクが大気との摩擦で燃え尽きてしま



↑従来の結核と一線を画すモビルスーツという機動性は、その登場当初から驚くべきスピードを誇っていた。



↑ジオン公軍のエースとして知られる黒い三連星もザクに格闘していた。





↑戦場を返す活躍でさくづか。連邦軍との交戦が激しくなるにつれ、登場当初の快速撃とは異様に、次第に陰りが見え始める。



↑モビルスーツという対抗手段を持たない相手にとって、ザクは脅威そのものである。

に一年戦争勃発時には最低数としてもザクIの数+ザクII初期生産型の数百機が揃っていたことになる。

これだけの戦力差があったら、いくらガンダム、ガンキャノン、ガンタンクがその性能差をもってザクを破壊しようとしても、とても追いつかなかった。要するに戦線のほとんどにおいて、連邦軍側はジオン軍側に圧倒されていたということである。

派手かつ地味であつた!? 戦場でのザクの活躍

考えてもみて欲しい、たとえ強固な陣地や戦車隊といった機甲部隊に護られていたとはいえ、戦車砲並の火器を備えた機動力の高い人型兵器が集団で攻撃してきた恐怖を、TVシリーズでは、そのあたりの状況を詳細に描かれてはいなかったものの、おそらく戦場

はパニックになったはずである。

ただし連邦軍側がガンダムをクレードダウンした量産モビルスーツ、RG M-79ジムを大量生産し始めると、その時点でジオン軍の主力モビルスーツだった、ザクIIの優位性にも陰りが見え始めたことは間違いない。

印象としては極めて強力かつ兵器としての完成度が高かったザクに対して、登場当初のジムは基本的なやら役であり、すでに旧式化したことで二線級の防衛任務に格下げされていたザクIIにさえも良いように破壊されていた。

ただしモビルスーツとしての性能はジェネレーター出力、スラスター推力、装甲の強固さのいずれもジムがザクIIを上回り、映像で衝撃的に描かれていた点は別として、戦線の全域にジムが行き渡りパイロットの練度も向上した時点で、戦場での優位性は逆転していた

たと思われる。

ザクシリーズにとって幸運だったのはモビルスーツとしての基本設計が確かであり、発展性に優れていたことである。実際、TVシリーズでの言及こそなかったものの、後になって制作された新シリーズ、OVA、設定集などでは様々な性能向上型ザクが登場し、新たな任務への特化が解説されていた。

その中には水陸両用型のプロトタイプや、大型のキャノン砲を装備した火力支援型、さらには大気圏内での性能を向上させるために軽量化や、ジェネレーター冷却に対する防塵性能アップなどを図った陸戦特化型などがあつたのが興味深い。もちろんいわずと知れたシヤア専用機に加え、ガルマ専用機やドズル専用機といったスペシャルバージョンもあり、ジオン側開発陣の優秀性の現れ

であり、多様化した戦場に合わせた改修スピードは決して遅くなかったと推測できる。

こうした確かな技術力に支えられたジオン軍にとってザクを運用していた戦いの中には、TVシリーズで描かれた華々しい戦線の他に相当な地味なものもあった。

そうした戦域での戦いはあるいは小規模での強行偵察であつたし、またある場所では大部隊での突撃戦だった。その中で、『第08MS小隊』で描かれていたのは、客観的にはモビルスーツに



対してはあまりにも非力だった生身の歩兵が、その携帯していた対戦車火器で破壊するというエピソードだった。

実は、こうした現象は決して荒唐無稽なことではなく、現実世界においても、すでに歩兵が携帯している対戦車火器の能力は、状況によっては最新の主力戦車を破壊し得るだけのポテンシャルがある。

前述のエピソードでは破壊されたザクの部隊がオアサツ作戦での敗残兵の集まりというマイナス要因が附加されていた一方で、たどる精鋭部隊であつても地形や気候などモビルスーツの機動力が制限される様な状況下では、油断できなかったということである。

同じく陸戦における特殊な戦いとしては『MSイグルー2 重力戦線』で描かれていた連邦軍側の対モビルスーツ特技兵との戦いがあつた。これもまた歩兵の機動性と装備火器の能力が戦



術次第では十分モビルスーツに對峙できたことの証明であり、エビソードを重ねる上で、ガンダム世界観・現実世界での軍事常識が少しづつ織り込まれていったことがうかがえる。

戦場においてアタリマエの存在であつたザク

こうした数々のエビソードを総合するとザクシリーズの兵器としての能力及びその戦術の変遷は以下の様にまとめることができる。

まず登場直後は他にライバル機が存在しなかったこともあり、全ての戦線に圧倒的な性能を發揮し勝利を重ねた。エビソードとしては「MSG LOO 1年戦争秘録」で描かれた、緒戦でのサイド5におけるルウム戦役などがその代表である。この状況が続けば、ジオン公国軍が地球連邦軍を圧倒したのには明らかであり、連邦軍側がガンダムの開発を急いだのも頷ける。

その後、宇宙領域での戦いを経て地球の重力圏内に戦いの場が移ってからは、基本的にはザクシリーズの優位性は揺るがなかった。最初リリースの機体は、パイロットの育成に余力をなかつたジオン軍にとって、ザクはまさに、そこにアタリマエに存在する「主戦兵器」であり、それはある意味、歩兵が裝備する自動小銃であり、戦車兵が搭乗する主

力戦車にも等しい存在だった。たつた一機しか存在しない上に、その効果的な運用にあつたのはアムロ・レイという特異な能力を備えた少年が必要だった、連邦軍のガンダムとは全く異なっていたといふことである。

とはいへこうした状況を冷静に追っていたのでは、アニメーションドラマとしては成立しないわけで、全体の戦場の中では極めて例外的かつ、ある意味偶発的な戦いでもあつたガンダムVSザクという図式を通じて、ガンダムの優秀性をアピールしたに過ぎないのである。編隊を組み、強力な火器を携え、ザクの編隊が潰襲して来るのを目の当たりにした、連邦軍側の守備隊の恐怖は想像して余りある。

零戦と重なるザクの生涯

そして戦線は、連邦軍側の主力モビルスーツであるRGM-79ジムとRB-79ボールの実戦配備がある程度なされると、少し変化してくるようになった。映像ではザクに向かって行くジムとボールの非力さが印象的に描かれる一方で、TVシリーズの初期では憎たらしきまでに自信にふりだつた、ザクのパイロットの弱さが描かれ始めたのである。

これはある意味、ジオン軍側においてもパイロットの消耗をカバーするた



↑連邦軍のモビルスーツ実用化こそ、ザクの有効性の証明といえる。

めに未熟な新兵を戦線に投入し始めたことを意味していた。この時点でエースパイロットやベテランパイロットの多くは、新型のMS-07BグフやMS-09ドムに搭乗していたこともあり、ザクは「線級任務と共に消耗戦へと突入せざるを得なかつた」ということである。

こうした流れは現実世界の兵器の歴史でも似た例を見ることができた。たとえば日本海軍の零式艦上戦闘機も、登場直後は最新鋭機として一部の優秀なパイロットの手に託されて圧倒的な戦果を挙げた一方、敵側にもそれを上回る性能を持つ機体が新たな戦術と共に投入されると、次第に「線級への任務へと回され、最終的には未熟なパイロ

ットと共に、悲惨な末路を辿らざるを得なかつた。

ザクの場合、本来の想定だった宇宙空間での戦闘から大気圏内への戦闘へとその戦いの場を移した時点で、多少の仕様変更と共に新たな任務をこなす必要に迫られた。理想を言えば、この時点で陸戦に特化したモビルスーツを用意すべきだった。そう、後に登場するドムのような機体である。しかし、すでに大層生産されていたザクシリーズにとって、簡単に退役するという選択はなかつた。そのことが一年戦争末期での悲惨な消耗戦の、ある意味、主役として描かざるを得なかつたといふことである。

■頭にザクは戦闘機と歩兵が一体化し、新たな任務を想定した機動兵器である旨を記述した。しかし最後にザクという戦い、運用の歴史を振り返った時、その姿は零戦と重なる。いわゆるSFバトルアニメーションの世界である1つの兵器が、その登場から終焉まで様々なエビソードと共に、兵器としての存在意義と運用の変遷を追うことができるというは希有な例である。仮にザクがそのスペックに對して、積極的な仕様変更を加えることなく、最後までガンダムと対等に渡り合つていようとしたら、一連の「機動戦士ガンダム」という物語の内容も、随分と陳腐なものとなつたかもしれない。





ザクから見る

ジオン公国軍の戦略・戦術

モビルスーツは汎用兵器といわれる。しかし勘違いしてはいけないのが、これは「様々な作戦に使える」という意味であり、万能という意味ではないということだ。実際のところ、宇宙世紀100年代以降、モビルスーツの性能向上の結果、万能と表現しても差し支えない兵器となったが、史上初のモビルスーツであるザクが

最初に戦場に登場した宇宙世紀70年代後半においては、万能というイメージは、ある種の都市伝説的なものでしかない。地球連邦軍の一大反攻作戦であるオデッサ作戦は、連邦軍側にモビルスーツがほとんど配備されていなかったにもかかわらず、勝利を収めたことから、モビルスーツは確かに効果的な兵器であったものの、

戦場の趨勢に決定的な影響を与えたという考えは、いささかオーバーな表現であるだろう。ジオン公国軍の大戦初期の戦いにおける華々しい勝利の数々は、モビルスーツの優秀さを証明したとも言えるが、それは、この新型兵器をどう扱うかを考え抜いたジオン公国軍教導大隊による研究の成果とも言えるだろう。

では、果たしてそれはどのようなものだったのだろうか。ここでは黎明期におけるモビルスーツの、つまりザクの戦術、戦法について考えてみたい。

「宇宙編」 新時代の宇宙戦に最適化 された兵器・ザク

モビルスーツの戦術を考える場合、宇宙と、地上における戦いを同じレベルで考えるべきではない。与えられた

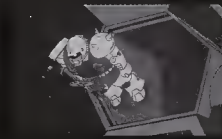
条件が違いすぎるからだ。そこで、ここではまず、宇宙におけるザクの戦いから考えてみたい。

宇宙におけるモビルスーツの戦いはそれほど難しくはない。ザクは本来宇宙戦を念頭に開発されたからだ。

モビルスーツ登場以前の宇宙の戦い、

ミサイルなどの精密誘導兵器を用いた電子戦は、いかに早く敵を発見し、より速く攻撃を仕掛けるかということが重要であり、そのための電子機器の性能が戦いの趨勢を決めた。

それは大口徑ビーム砲による高エネルギー攻撃と、ミサイル等の誘導兵器



による精度の高い攻撃の二本柱であり、そういった状況下では、おそろしく大型艦がもつとも使い易い兵器だっただろう。一方、宇宙戦闘機なども存在したが、これらは大型艦の役目の一部を小型化したものであったと言える。

宇宙空間という条件において、その機動性は重量と推力で決まる。そういった意味では大型であろうと、小型であろうと環境的条件は同一であるといえるだろう。

例えば物資の運搬を考えてみても、地上を走ば大量輸送には海軍力、すなわち船が適し、高速で移動するのは空を飛ぶ航空機が有効という具合に、その用途によって最適な機械が異なり、その特性も大きく違うものになる。それは、空と海といった場所だけでなく、サイズの大小でも条件は変わっていく。しかし宇宙空間は、物理的条件が同じである。地上では機械に発生しがちな空気の抵抗や摩擦などもほとんど存在しない。ゆえに、大きいものと小さいものの性能差は重量と推力比で決まってくるだけだ。要するに作戦、戦術の内容により使い分けられる程度の差で収まるということである。もちろん消耗率などは別の話だ。

宇宙艦艇は高エネルギー兵器であるメガ粒子砲、実弾弾性兵器である大砲（どちらも宇宙空間の方が地上よりも威力が高くなる）、精密誘導のできる

ミサイル類との二本柱であり、いうなれば多数の兵器を選擇する、攻撃の要となる移動砲台だったと言える。対して小型戦闘機は若干の速度の優位さはあるものの、むしろこれらの火力を効率的に使用するために分散させる、といった意味合いが強い予備戦力と考えられる。

こうした時代の戦闘は、基本的に艦隊戦であることは自明の理だろう。機動力と火力のバランスにおいて、宇宙艦艇よりも優れた兵器は恐らく存在しなかったからだ。

そういった意味では、新時代の戦闘であるミノフスキー粒子下の戦いでも機動力、火力を兼ね備える宇宙艦艇が戦いの主役であったのは変わらなかったと考えるといいだろう。ただし、その内容はだいぶ違うものとなった。

電子装置などを使えない状況では、カメラなどの光学器械や目視などに頼らざるを得なくなり、いかに早く敵を発見するかという条件は健在であるものの、戦闘のレンジは大幅に狭いものとなった。そういった状況ではいかに敵に気づかれない命中弾を与えるかが重要になってくる。こうした近距離戦（白兵戦）というコンセプトにより登場したのが、モビルスーツだったというわけでは、モビルスーツは具体的に宇宙艦艇や艦載機に比べ、どの程度革新的だったのだろうか。

従来とは全く違う種類の性能を持っていたザク

宇宙空間はご存じの通り、空気などの抵抗になるものがないため、動くにも止まるにも、すべての動作、行動にエネルギーを必要とする。さらに、摩擦抵抗のない宇宙空間における艦艇などの移動速度は秒速数千キロ単位の速さになり、精密機器による測距や誘導なくして誘導本体に命中させること自体至難の業である。最も確実なのは、標的の至近距離に近づいて弾丸を撃ち込み（命中率を上げるには相対速度は遅い方がよい）、高速離脱することだろう。しかも、敵に近づくには敵の防御砲火をかくぐぐる必要がある。つまりミノフスキー粒子時代に求められる兵器の条件としては、以下のことが挙げられるだろう。

- ①360度方向に、加速減速にすぐれる機動性。
- ②その機動性において航続時間への影響を最低限とする。
- ③目標によって使い分けられる兵器の換装ができる。

②は、本来①のような機動は燃料を消費しやすく、作戦行動時間の長さに影響を与えるがゆえであり、③は、単純に目標の大きさ、適した武装の関係である。敵が小さく移動速度が速い場合は、より多くの弾丸を集中しては



らまぐ必要があり、敵目標が大きい場合は、より威力のある弾丸を撃ち込むことがよいということである。

これらの条件を見ると、手品の動きの作用を使って方向を変え、手品が出来るAMBAC機能により、3次元空間全体への機動性に従来ない性能を見せる。燃料消費率に優れ、AMBAC装置を兼ねたマニピュレーターによる武器の差し替えができるモビルスーツが、ミノフスキー粒子下の戦闘において最適なもののひとつであるということがわかる。

欠点としてはAMBACとマニピュレーターによる攻撃への照準を兼ねることは、システムのほぼ不可能であるということぐらいだが、このあたりは当時問題にならなかったようだ(後の時代のモビルスーツにはそれらを考慮した機体も存在する)。

ザクの戦略的目標 連邦軍宇宙艦艇

ご存じのように、ザクは人類史上初のモビルスーツである。想定できる敵はもちろんモビルスーツであることはあり得ない。必然的に相手となる敵は、大まかには2種類となる。ひとつはマゼラン、サラミスといった大型の艦艇やコロニー。もう一つはバブリク、トリアエーズ、セイバー・フィッシュといった小型の戦闘機、戦闘機などだ。

戦略の見地から考えると、ザクの倒すべき目標は前者となる。これには2つの理由がある。1つは戦略的重要度の違いだ。敵の小型機は、母艦で大量の艦艇を失えば、自ずと無力化される。もう一つは、スラスター噴射による直線的な機動が中心の戦闘機と、AMBACを使うザクとしては3次元全体での機動性には雲底の差がなかったはずで、それは危険な敵ではなかったということだ。

黒い三連星は 対艦戦闘のプロだった!

ザクの武装は、大質量があるが初速の遅い対艦用のバズーカと、威力はバズーカに大幅に譲るが、数を撒けるマシンガンとの2本柱である。バズーカ系の攻撃はその弾道の遅さから来る命中率を向上させるために、高速でギリギリまで敵に近づくという戦法が重視されたのだ。MS-06Rザク高機動型やMS-09Rリック・ドムは、直線的な機動力を向上させて正確な攻撃効果を上げることを目指したように見える。つまり爆撃機的な発想だ。

代表的な例としては、ジオン公国軍のバリエット「黒い三連星」が使用した戦法「ジェット・ストリーム・アタック」が挙げられる。「機動戦士ガンダム」の劇中では、ホバー移動できるMS-09ドムによって、対ガンダム

ザクの戦場 → 【黎明期】

既存の概念を破り、
華々しい戦果を挙げた
ルウム戦役



ミノフスキー粒子という特殊な環境下において、従来の宇宙兵器を駆逐して見せたモビルスーツ、ザク。一年戦争晩期における活躍は、兵器の革新であったり、破竹の快速機の原動力にも見えるが、その後を考えると必ずしも一概には言えない。ただ、ルウム戦役の後撃は連邦軍に深くささり、ガンダム(ジム)開発へと意識を向けさせる契機にもなった。

戦に使用された戦法だが、本来は対艦戦闘用の戦法だろう。

縦一文字に小隊の形を結び、1機目、2機目、3機目とフェイントをかけてガンダムに襲いかかる。しかし、一直線にフォーメーションを組み、相手に向かっていく戦法では、相手が自機と正対する必要がある、敵が同じ機動性を持つている場合、簡単に攻撃が回避される恐れがある。そして、一直線のフォーメーションでは、相手が回避行動に移った時に、2機目以降の列機の対応が遅れかねない。つまり、本来ならはこの機動は、相手が自分よりも機動力が劣り、かつ大型な場合にその効力を発揮することが出来るものということがわかる。

このフォーメーションの最大の特徴は、火力を集中できることにある。敵の対空砲火に対して一列になることで被弾率を低くし敵に肉薄、攻撃ポイントでは1機ずつ一撃を加え、回避行動に入ることで、1回の攻撃の3倍の威力を投入できるのだ。

一方、戦闘機的な発想、つまりザク・マシンガン的なコンセプトは、赤い彗星シャア・アズナブルの戦い方にその範を見ることが出来るだろう。彼の戦いは、敵の上下左右前後と3次元をフルに使ったものであり、敵にその攻撃のタイミングを見切らせないことが信条となる。こうした戦闘では、弾丸の数を撒けるマシンガンが有利なのは、言うまでもないだろう。

彼がルウム戦役で、5隻の艦艇を撃沈できたのも、ザクの機動性が、連邦の兵器よりも抜きんでていたことを証明していると言える。

艦隊戦における ザクの役割とは!?

さて、ここではもう少し具体的にモ

汎用性が徒になった
出口のない
泥沼の地上侵攻作戦

元来、宇宙（コロニー）という環境に適していたモビルスーツは、地上でも一定の成果を見せた。この汎用性という器用さは、ジオン公国軍をモビルスーツ偏重主義に走らせたのだらう。ただ、それらの行為は確実に自身の首を絞めるに他ならず、オデッサでの敗退後、地上にいた多くの部隊は、撤退を余儀なくされる。

つまり、決戦である艦艇同士との会戦に際して、いかに相手の艦艇を減らすかが戦いの趨勢を決めていたということだろう。また、当時の艦艇戦は、その形状から正面を向いた戦いが主で、時として平行した状態で艦艇戦もあったようだ。この戦いにおいて、モビルスーツの役割は2つ考えられることができる。

ひとつは敵艦隊の進行方向上に向

ては、決戦である艦艇同士との会戦に際して、いかに相手の艦艇を減らすかが戦いの趨勢を決めていたということだろう。また、当時の艦艇戦は、その形状から正面を向いた戦いが主で、時として平行した状態で艦艇戦もあったようだ。この戦いにおいて、モビルスーツの役割は2つ考えられることができる。

ひとつは、敵艦隊の進行方向上に向

伏せし、暫時攻撃を仕掛けることにより敵に損害を与え、作戦行動可能艦の数を減らすこと。特に、開戦直後のジオン公国軍に取っては、敵の数が多

は、これはジオン公国初のモビルスーツ運用艦であるムサイ級軽巡洋艦の構造を考えると分かりやすい。

ムサイ級は、本体、エンジン、モビ

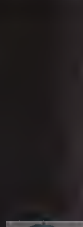
ルスーツ格納庫が独立したモジュール構造を採用しており、ダメージコン



わつてくる。

正面方向に正対する艦隊戦にせよ、横方向に平行し、すれ違い様に戦闘する艦隊戦にせよ、艦艇同士がすれ違い、離れて行くことには、変わりがない。こうした状況で艦艇戦の後に、艦艇戦としてモビルスーツで攻撃を加えることは、きわめて効果的といえるだろう。そういつた意味で艦艇戦直後にモビルスーツを射出し（つまり、後方に離れつつある艦隊を直線方向に追いかける、敵艦隊を蹂躞するためにムサイ級のレイアウトは考えられたものといえるだろう。また、後方に砲塔をおかず、ミサイルや小型火器の装備たけ

のも、同士討ちを防ぐためと考えられる分



に移動している。

一年戦争前半のモビルスーツ・ザクの戦いとは、黎明期のモビルスーツの戦いであり、多分に実験的要素もまた、多かったのだろう。実際の戦場での使用に即し、改良されていくのは、次の世代以降のモビルスーツの話である。

「地上編」

MSは地上において不便な兵器だった!?

一方、ザクの地上における戦術・戦法とはどのようなものなのだろうか。

そもそも、地上におけるモビルスーツとは、本来不便なものであるはずである。まずは前提として、地上におけるモビルスーツのメリットとデメリットを考えてみたい。メリットとしては、

①時速100キロにも及ぶ移動速度など、高い機動力を持つ。特に陸上兵器としては、ジャンプ機能により垂直方向の機動性に優れる。

②高い火力を持つ。また、兵器の種類を持ち替えて、簡単に用途の変更ができる。

③①②のことから待ち伏せに強い。

④高い機動力といっても、地上兵器

①敵に発見されやすい。
②関節部などの明らかな弱点が存在する。

③①②のことから待ち伏せに強い。
④高い機動力といっても、地上兵器

の範囲内程度のものである。

①は、5階建てビルディングに相当する全長18メートルゆえに、抜本的にこれを解消する手段はない。②は、100キロを超える歩速を利用し、常に動き被弾確率を低くするよりない。③、④は、基本的には数十キロ先から全力疾走し続けられ、解消できるかもしれないが、地形や耐久性、視認性などあらゆる面において現実的ではない。

つまりモビルスーツの地上戦における戦法とは、迅速に戦場へ出現し、時速100キロにも及ぶ移動速度を利用して敵への迎撃準備に要する時間を与えず、大火力、機動力で蹂躪することと言えるだろう。

ザクの活躍できる条件は戦車と似ている!?

神出鬼没の奇襲戦法、つまり電撃戦こそが、最も安全かつ確実なザクの運用法であろう。モビルスーツ初の地上戦である地球降下作戦の主要舞台は、北アメリカ大陸とヨーロッパ大陸である。これらの大平原こそ、モビルスーツがもっとも有利に働ける場所なのである。こうした平原が得意とする兵器というのは、戦車と同じである。しかし、戦場に入る前に、いかに見つからないかという命題においては、ザクは大いに不利であった。

それは当のジオン公国軍でも分かっていたように、モビルスーツをいかに迅速に戦地へ運ぶかというコンセプトで、ダイブヤ、ガウ攻撃空母など様々な支援兵器を開発している。

また、戦闘機であるドップも、その形状から低速での格闘戦を主眼にしていた設計であると考えられ、ザクを上空から護衛する戦闘機をコンセプトにしていたことが伺える。

しかしモビルスーツも多いモビルスー

ツは、対モビルスーツ戦が周到に準備された戦場においては、その能力を活かし切れない可能性もある。それは、大戦中期以降、ほとんどモビルスーツを持たない連邦が、ジオン公国軍と互角に戦えたという事からも証明することが出来る。モビルスーツの地上戦とは、必ずしもすべての局面で効率的ではないのだろう。

モビルスーツ・ザクの地上での弱点とは?!

モビルスーツを倒す、これに一番効果的な戦術は何だろうか。機動性がモビルスーツの方が上である以上、直接的戦闘は避けるべきである。その意味では、地形を利用した待ち伏せが最も効果的で、戦車、対モビルスーツ砲歩兵とバズーカなど組み合わせが考えられるが、発見された場合は、過酷な運命が待っていることは考慮に入れるべきだ。また、最初からエリアを絞り込み、重砲で遠距離からの砲撃的な砲撃も効果的だろう。どちらにせよ、地上兵器でモビルスーツを倒す場合、相手を誘い込むような機動戦の方が、よりなじみやすいと言えるだろう。

一方で、航空兵器とモビルスーツでは基本的に航空機のほうが有利である。100キロ以上出せる地上の機械が、800キロ以上出せる空の機械を倒すのは、かなりの困難を伴う。

ザクの戦場目録 → 【過激期】

戦後においても一線級？
U.C.0080年代～
第一次ネオ・ジオン戦争



一年戦争の終結を受けてザクの役目は終わったかに思えた。しかし、戦後も争いが絶えることはなく、そのつど、ザクは戦場で戦い続けていた。宇宙世紀80年代初頭から、第一次ネオ・ジオン戦争時あたりは、その活動は活発だったようだ。しかし、モビルスーツとしては時代遅れの機は否めず、当時の最新鋭機と比べ、いささか見劣りするものも仕方なかった。



しかし、ミノフスキー粒子下で機動性の高いモビルスーツに爆弾を命中させるのは、極めて難しいミッションだろう。命中精度を高くしようと思えば思うほど、速度を低くする必要があるからだ。そして、機体が低速になればなるほど、反撃される可能性もまた増えてくる。また、戦車の最大の敵は飛行機やヘリコプターであると言われるが、戦車よりも大地に機動性が高いモビルスーツは戦車程には簡単な相手ではないが、もっとも危険な相手なのは間違いない。

こうして考えてみると、通常兵器で

モビルスーツを倒すことは、不可能ではないということがあるが、ほとんどの戦いにおいて制空権が味方側にあることは絶対条件の1つだろう。それは、モビルスーツが地上で戦う場合と同じであり、モビルスーツ時代でも制空権を制するものは戦争を制するということは変わりのない事実といえる。

その制空権をいかに得るか、それをモビルスーツによって得るという考え方が、一年戦争以降の技術の進歩により出てくることで、モビルスーツという兵器はさらに発展していくことになるのだ。

ザクがもつとも活躍した地球降下作戦とは!?

こういった状況を鑑みると、モビルスーツが最も効果的に運用できる作戦は、大気圏外よりの降下作戦であるということが分かってくる。

地球軌道上から地上への降下はその20分程度。地上を移動した場合、これは迅速に兵力を展開するのは難しい。また防御側は、大まかな攻撃目標しか特定できず、具体的な攻撃目標が分かるのは、地上到着の数分間であり、地上の各防衛拠点は、ギリギリまでとこが狙われているか分からずに、相互に援軍を送るタイミングを逸する。これらの作戦の具体的な手順としては、まず第一降下部隊は敵の戦力の薄

いところに降下し、橋頭堡を造る。そして援軍が向かい手薄になった近隣の基地に第二次降下部隊を降下させ、その基地も確保。こうして戦力範囲を広げていき、前もって用意していた地上装備を次々と降下す。一方連邦軍は、敵の作戦意図が分かっているつも戦力の集中が出来るに各個撃破され、ジオン公国軍の占領地は短期間に膨大なものになっていく。

現代の戦況においても、敵の防御の弱い後方などに兵力を投入する空挺作戦の効果は絶大である。しかし、空挺作戦の欠点は、装備などの重量に制限を受ける事だ。そういった欠点をカバーするため、空挺部隊は精鋭として通常の兵士以上に鍛え上げられる。

しかし、モビルスーツによる空挺(正確には宙遊)作戦においては、空挺兵であるモビルスーツの威力は絶大。さらに宇宙空間から直接落とすため、飛行機で運ぶより遙かに大量の兵力を投下することが出来る。理想的な作戦を行うことができる。ここでも様々な任務に適應できるザクは作戦効率の上では理想的な存在だ。

しかし、この作戦にも欠点はある。それは、HLEVなどの降下用ビークルが着地し、モビルスーツが戦闘を開始するまでの間、無防備な瞬間があるという点だ。ジオン公国軍では、これを解消するために、艦艇の大気圏突入

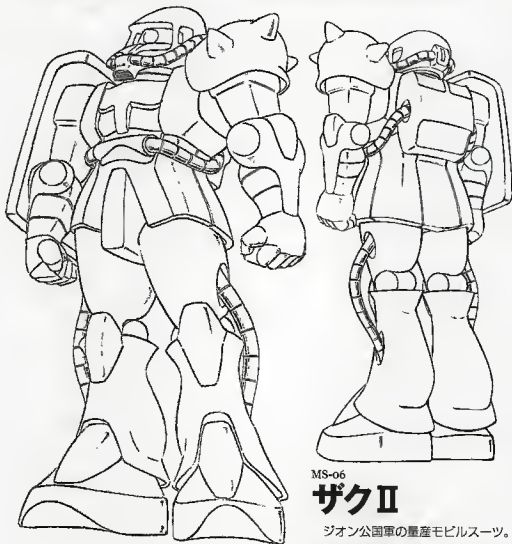
シャトル(コムサイ)に戦闘能力とモビルスーツ搭載能力を与えた。つまり、機動性のあるコムサイを先鋒にして、地上すれすれにザクを投下し、一瞬のうちに戦闘態勢を取ることを可能にしたのだ。また、ザクの代わりにドップを搭載し、空中から投下した可能性もあるだろう。先に述べたように戦闘機による制空権確保は、作戦成功の必須条件と言ってもいいからだ。

こうしてジオン公国軍の地球降下作戦は、華々しい結果を残し、モビルスーツ・ザクの地上での威力も存分に証明してみせた。しかし、地球連邦軍の戦意は意外にも旺盛であり、戦況はなし崩しの地上戦へと突入した。

これはおそらくジオン公国にとって想定外のことだっただろう。そして勝利への終着点を見いだせぬまま、いざうに消耗を繰り返していった。そういった意味では、ジオンは負けるべくして負けたのかもしれない。おそらく最も効果的な戦略は、ルナツーを攻略し、連邦軍の宇宙への足がかりを完全に奪った上で、宙宙の維持を最優先にし、連邦軍を完全に地球に封じ込めるといったものだろう(これすら出口がない戦略だ)。

確かに地球降下作戦におけるモビルスーツ・ザクの使用法は見事としか言いようがないが、それが地獄への入り口でもあったのだ。

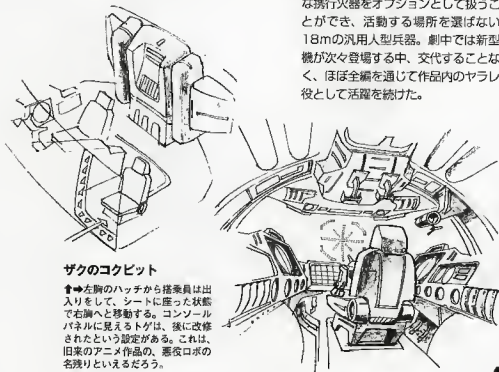




MS-06

ザクⅡ

ジオン公国軍の量産モビルスーツ。
主兵装はザク・マシンガンだが、様々な
携行火器をオプションとして扱うこ
とができ、活動する場所を選ばない
18mの汎用人型兵器。劇中では新型
機が次々登場する中、交代することな
く、ほぼ全編を通じて作品内のヤラレ
役として活躍を続けた。

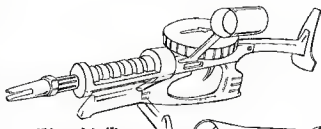


ザクのコクピット

左胸のハッチから搭乗員は出
入りをし、シートに座った状態
で右胸へと移動する。コンソール
パネルに見えるトゲは、後に改修
されたという設定がある。これは、
旧来のアニメ作品の、悪役ロボの
名残りといえるだろう。

ザク設定資料

ここでは、各映像作品や雑誌媒体などのメディアに登場したザク、およびザク系の派生機、後継機
などを取り上げる。各作品ジャンルごとに分類し登場作品タイトル順の後に年代を表記している。



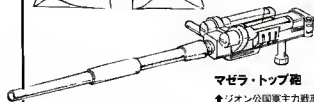
ザク・マシンガン

↑口径120mmで実弾弾を撃ち出すザクの主兵器。第1話「ガンダム大地に立つ!」で、掃蕩されるドラム缶のような空襲英が印象的。



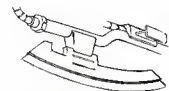
ザク・バズーカ

↑口径280mmの大型火器。名称はバズーカだが、ロケット弾の発射管で、人間が運行する無反動砲と形状が似ていることから付けられたもの。



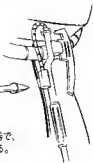
マゼラ・トップガン

↑ジオン公国軍主力戦車、マゼラ・アタックの主砲をザクに持たせたもの。第2話「激闘は憎しみ深く」より登場。



ヒート・ホーク

↑近接戦闘用の武器で、熱によって消滅する。



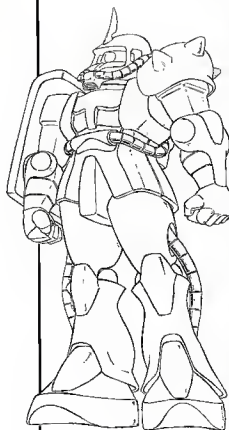
クラックワ

↑モビルスーツが扱う手投げ弾。



3連ミサイルポッド

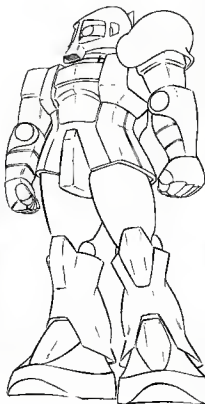
↑左右腕部に装備するオプション兵器。



MS-06S

シャア専用ザク

ジオン公国軍のエースであり、赤い彗星と呼ばれるシャア・アズナブルの専用機。部隊を率いる指揮官を示す頭頂のブレードアンテナと、自身のパーソナルカラーに塗装された機体特徴。ガンダムと幾度となく戦ったシャアの乗機の中で、唯一、損傷していない。

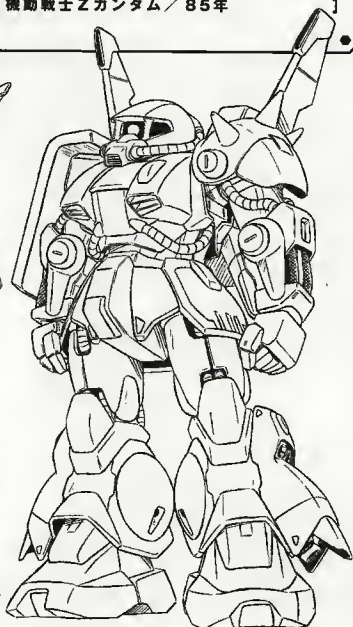
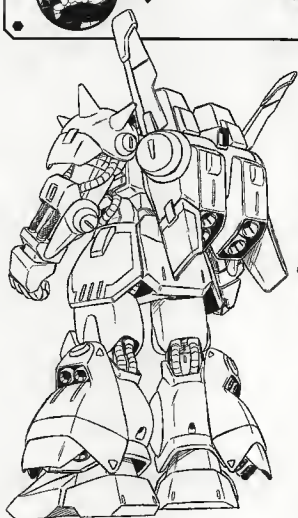


MS-05

ザクI

ザクIIよりも旧式とされ、通称旧ザク。劇中では第3話「敵の輸送艦を叩け!」に登場したババア輸送艦艦長ガデムの機体が印象深いが、劇場版「III」のA・バオア・クー戦のカットで、模型用に描き起こされた専用マシンガンを手にした旧ザクも忘れがたい。



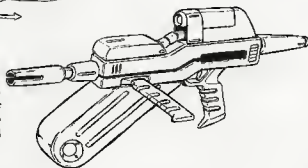


ザク・マシンガン改

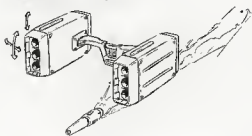


ビーム・ライフル

◆マラサイと同型のライフル。当初、ハイザックはジェネレーター出力の低さから、ビーム兵器の併用は出来ないとされていた。



3連ミサイルポッド



ビーム・サーベル

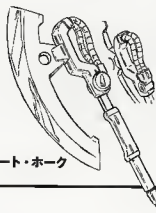


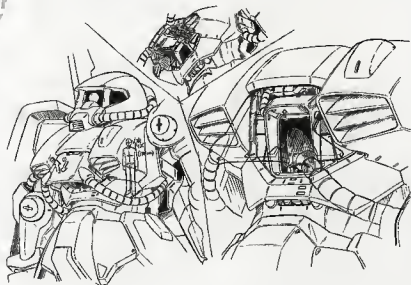
RMS-106

ハイザック

地球連邦軍が一年戦争後ザクをベースに近代化改修を行い開発した機体。見た目以外にも、様々なオプション兵装が用意されている点などザクに共通する点は多い。「Z」では、前作より7年という年月が経過していることもあり、劇中では、やや旧式の機体でザクのように作品の顔として扱われるような活躍は少なかった。また、登場するモビルスーツの数が圧倒的に増えたこともあり、それら一群の中に埋没してしまった観は否めない。

ヒート・ホーク



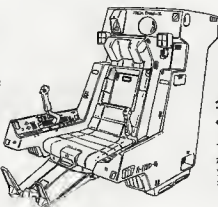
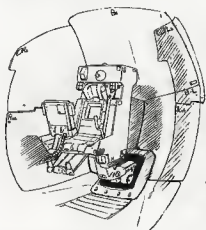


ハイザックのコクピットハッチ

◀胸部中央のカバーがせり上がって、コクピットハッチが開く。動力パイプの関係からカバーが全開しないので、乗降はし難い。設定画では、それらのシークエンスを説明するため可視化している。



足裏



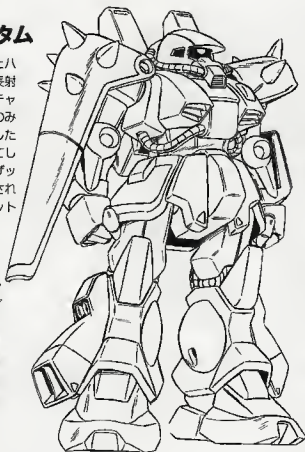
全天周モニター&リニア・シート

◀宇宙世紀90年代におけるモビルスーツのトレンドであり標準装備。周囲の状況が把握できるようにコンピュータで処理された画像が360度のスクリーンに投影される。リニア・シート座席の下にはサイババルキットの役目を果たすケースが収納されている。

RMS-106CS

ハイザック・カスタム

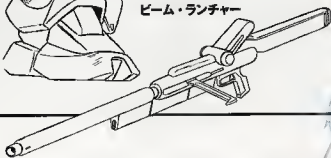
第39話「湖畔」に登場したハイザックのカスタムタイプ。長射程を誇る専用のビーム・ランチャーを装備している。この1話のみのゲストメカで都合2機登場したが、いずれの機体も撃破されてしまった。登場当初、隠れハイザックとしてアニメ誌などで紹介されていた。ちなみに搭乗パイロットはカラ、ソラマの2名である。



ビーム・サーベル&ランチャー

◀ハイザックと同型で、リア・アーマーにマウントされているビーム・サーベル。

ビーム・ランチャー

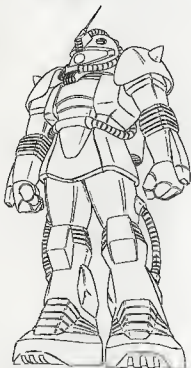




→ [

機動戦士Zガンダム / 85年

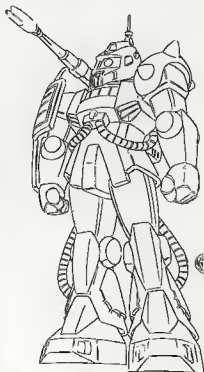
]



MS-06M

マリン・ハイザック

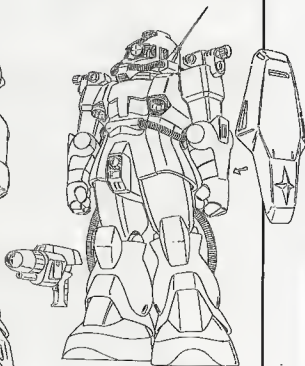
水中用のザク。MSVの名称はザク・マリンタイプ。



MS-06K

ザクキャノン

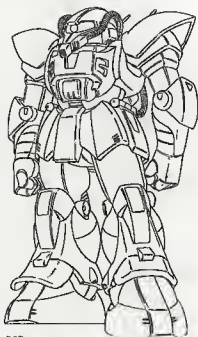
ザクの砲撃型。宇宙用に改修されている。



MS-06E

ザク強行偵察型

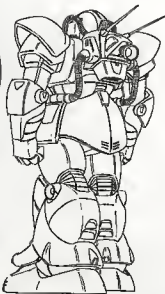
ザクの偵察タイプ。ガン・カメラを携行。



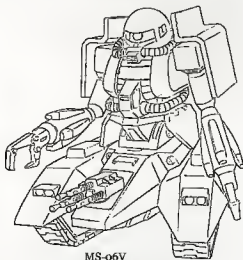
MS-11

アクト・ザク

マグネット・コーティングがされた、ベズン計画の1機。MS-Xに登場。

**Zに登場したザクのバリエーション**

『ガンダム』の放映終了後、劇場公開もされて映像作品が一段落する中、雑誌や模型などの媒体では、その後も『MSV』『MS-X』などの展開が84年ごろまで続いていた。そんな中、次回作で続編の『Z』放映が決まり、一種のサービスとして、映像に登場しなかった機体がゲストメカとしてカメラオ出演することになった。それがここで紹介しているモビルスーツである。



MS-06V

ザクタンク

現地改修型。ジャブロー基地に登場。



→ [

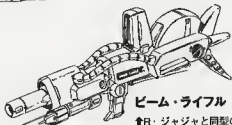
機動戦士ガンダムZZ / 86年

]

AMX-011

ザクⅢ

アクシズ（ネオ・ジオン）の開発したモビルスーツ。次期主力機として開発されたが、生産は少数にとどまった。ザクは実体弾が主兵器だったが、こちらはオールビーム兵器のハイスベック機で、名前や外観は似ているものの、別格の機体といえる。ただ、劇中での活躍はというと、ララン・ダカランなどのエースが搭乗しているわりに、活躍そのものは少ない。



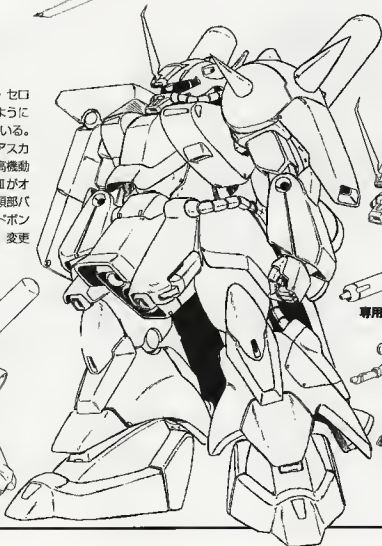
ビーム・ライフル

食肉・ジャジャと同型のビーム・ライフルも使用できる。

AMX-011S

ザクⅢ改

強化人間になったマッシュマー・セロの専用機。彼の能力に対応するように各所にカスタマイズが施されている。特に背面の各スラスターや、リアスカートのアーマーは大型化され、高機動化が図られている。また、ザクⅢがオールビーム兵器なのに対して、頭部バールカン砲の追加、左肩部のハイドポンプ投下機兼シールドの増設など、変更がされている。



頭部



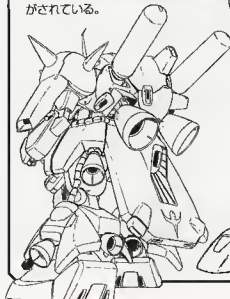
専用ビーム・ライフル



ビーム・サーベル



足裏





→ [

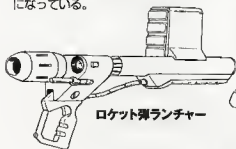
機動戦士ガンダムZZ / 86年

]

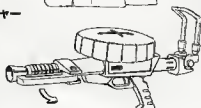
MS-06D

ディザート・ザク

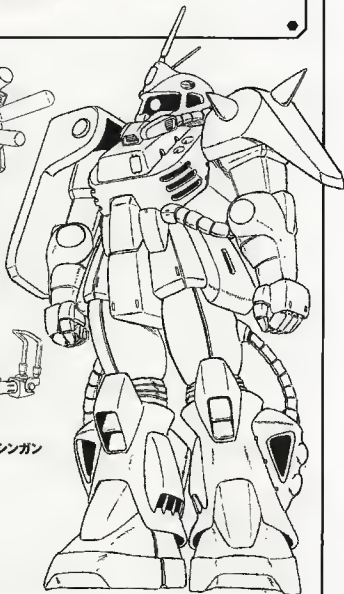
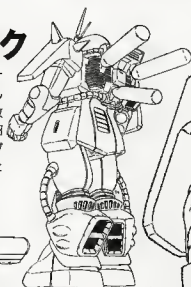
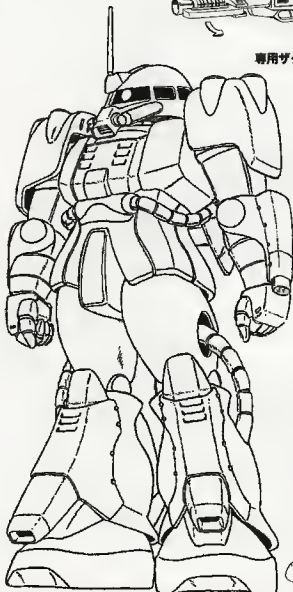
アフリカ戦線で活動を続ける旧ジオン軍の残党、コンメル隊などで使用していた機体。操縦系統などは近代化改修がされている。系統的には後半で紹介しているザク・デザートタイプ(122ページ参照)と同型ということになっている。



ロケット弾ランチャー



専用ザク・マシンガン



指揮官タイプ頭部



RMS-192M

ザク・マリナー

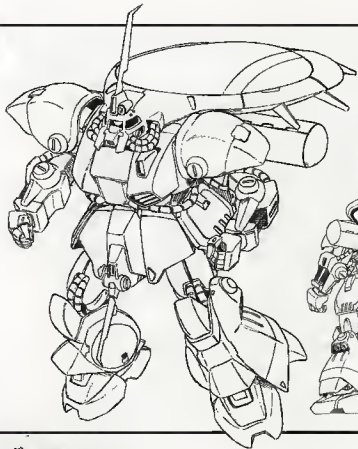
型式番号から分かるように連邦軍が開発した水中用モビルスーツである。マリナー・ハイザック(ザク・マリナータイプ)の後継機にあたる。旧ジオン軍が接収したのか、連邦軍がアクシズ(ネオ・ジオン)へ供与した機体かは定かではないが、地球に降りたジュードたちエゥーゴの面々と戦闘を行った。



RMS-119

アイザック

ザク・マリナーと同様に連邦軍が開発した機体。頭部のレドームが特徴の早期警戒型でハイザックのバリエーションの一種である。旧ジオン軍残党、青の部隊で使用されていた機体は、おそらく連邦軍の基地から奪取してきたものと思われる。



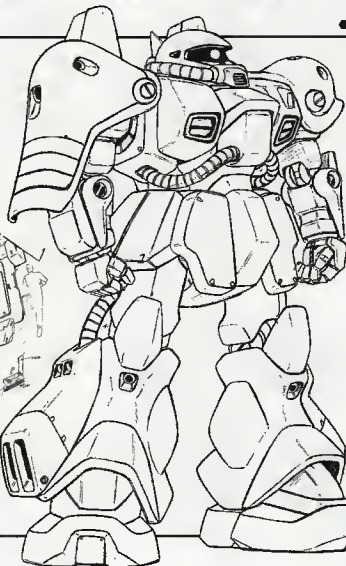
→ [

機動戦士ガンダム 逆襲のシャア / 88年

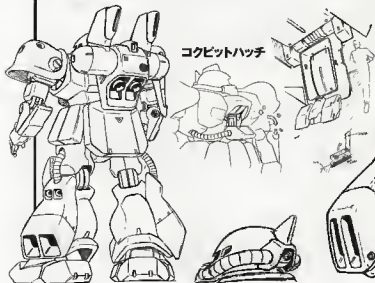
]

ホビーハイザック

サイド1のロンデニオンにおいて、新生ネオ・ジオンの総帥シャア・アズナブル護衛のため、ギユネイ・ガスが搭乗していた機体。もともと、民生機のため武装は施されておらず型式番号もない。あくまで身辺警護と移送手段として用いたと考えられる。ベースとなったのはハイザックだが、『Z』に登場した隠れハイザックにも似ている。



コクピットハッチ

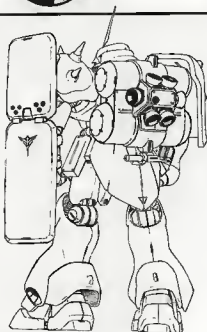




→ [

機動戦士ガンダム 逆襲のシャア / 88年

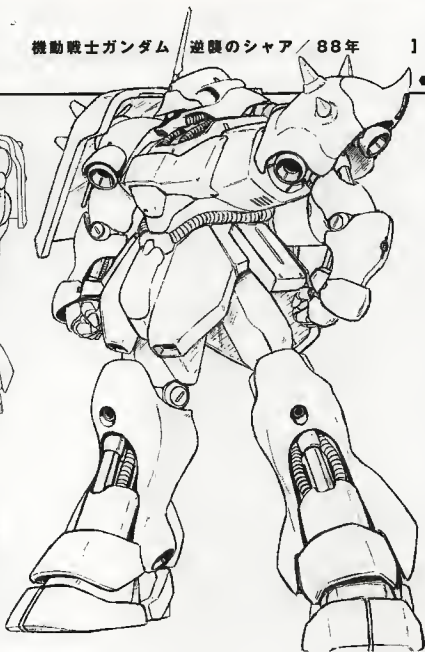
]



AMS-119

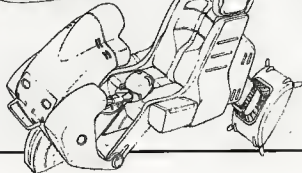
ギラ・ドーガ

新生ネオ・ジオンの主力モビルスーツ。ビーム・マシンガンを始め、シュツルム・ファウスト、グレナードなど豊富な兵装を持つ。小隊長クラスは頭頂部にブレードアンテナが付いている。意匠面でもシルエットなどはザクを彷彿とさせ、劇中の活躍においてもそれを置えないものだった。ガンダム作品の新作「ガンダムUC」にも『袖付き』仕様で登場している。

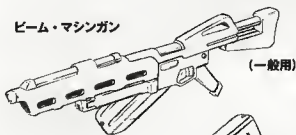


リニア・シート

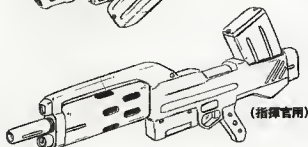
※全天周視モニターとリニア・シートはこの時代のモビルスーツの標準装備だ。



ビーム・マシンガン



(一般用)



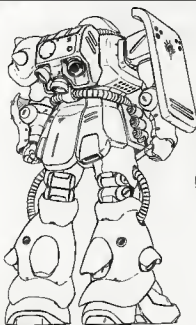
(指揮官用)

ビーム・ソード・アックス





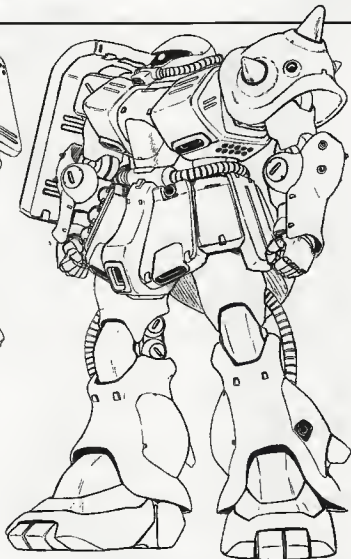
→ [機動戦士ガンダム0080ポケットの中の戦争 / 89年]



MS-06FZ

ザク改

ガンダム初のOVA作品に登場。物語終盤におけるガンダム(アレックス)との死闘が最大の見せ場といえるだろう。当初は、「ポケットの中の戦争」作品内に登場するザクは、『ガンダム』と同じザクという想定で描かれていたが、現在では派生機という扱いになっている。頭部形状がギラ・ドーガに似たBタイプも存在する。



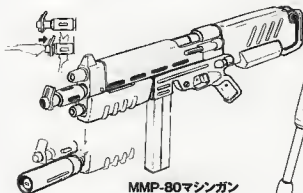
ジオン軍MS共通
マニピュレーター・ハンド



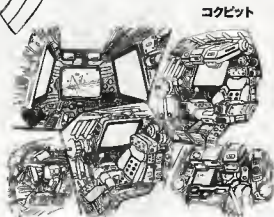
ヒート・ホーク



ザク改タイプB



MMP-80マシンガン



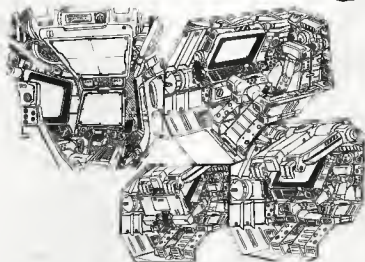
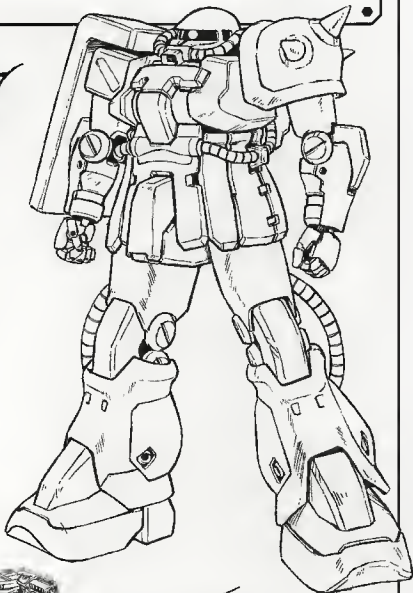
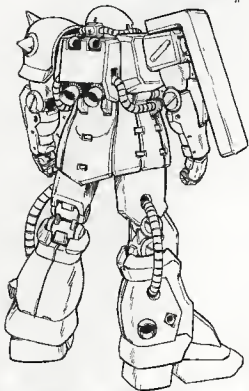
コクピット



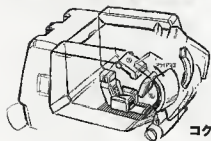


→ [機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY / 91年]

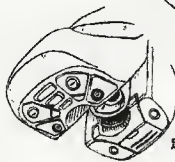
アップリケーアーマー頭部



コクピット



コクピットハッチ



足裏

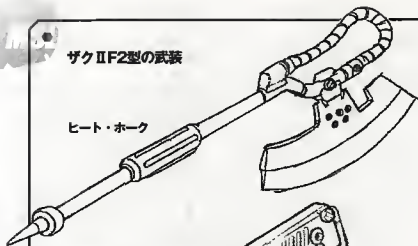
MS-06F-2

ザクⅡ F2型

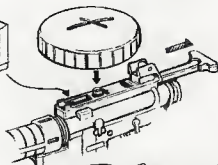
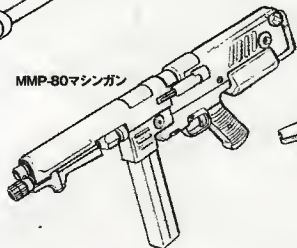
後期生産型のザクで、通称F2ザクなどと呼ばれることもある。一年戦争後の宇宙世紀0083年では、ジオン軍より接収した機体が訓練機として用いられることも珍しくなかった。コクピットハッチはコクピットサイドの右側が直接開閉して、搭乗員が乗降する。コクピットのレイアウトはザク改に似ている。「0083」主人公のコウ・ウラキが最初に乗っていた機体でもある。

ザクⅡF2型の武装

ヒート・ホーク

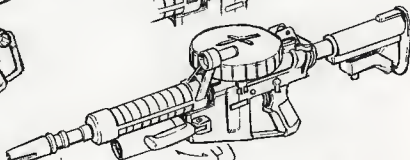


MMP-80マシンガン



ザク・マシンガン

基本的な武装はザクⅡやザク改を踏襲するものだが、ザク・マシンガンは、通常のマガジン以外に対空砲弾用マガジンやグレネードランチャーを装備しているのが特徴。



ジオン軍仕様と連邦軍仕様の違い

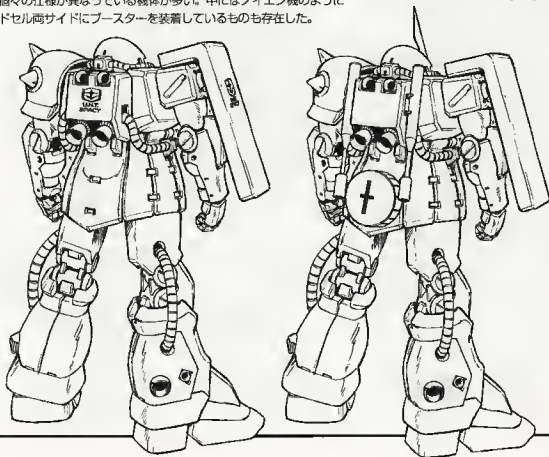
図の左側は連邦軍仕様の背面で、右はキンバライト鉱山基地の旧ジオン軍の機体（ノイエン・ピッター少将機）背面である。どちらの機体も構成は同じだが、連邦軍の機体各所（ランドセル、右肩シールド、左肩）には、敵味方識別用に連邦軍のマークが施されている。一方、ジオン軍では個々の仕様が異なっている機体が多い。中にはノイエン機のようにランドセル両サイドにブースターを装着しているものも存在した。



ザク・バズーカ

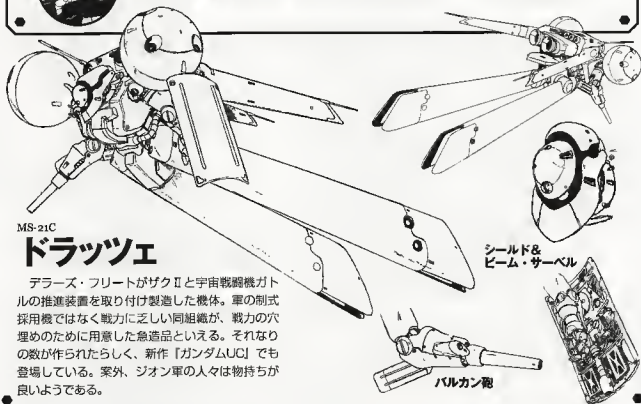


ザク・グレネード





→ [機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY / 91年]



MS-21C

ドラッツェ

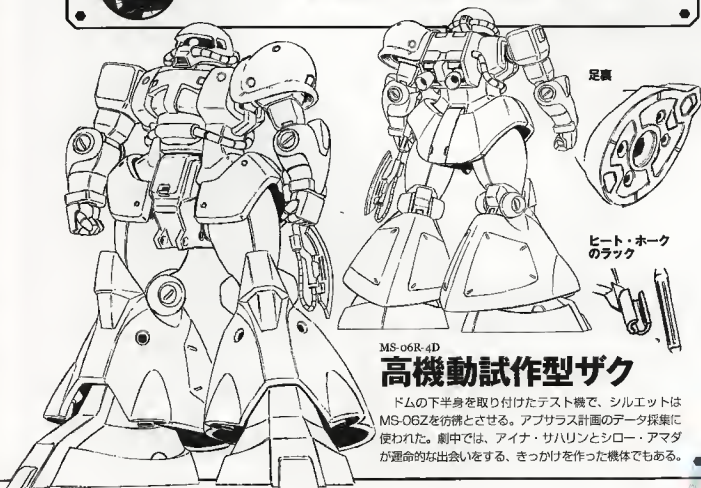
デラース・フリートがザクⅡと宇宙戦闘機ガトルの推進装置を取り付け製造した機体。軍の制式採用機ではなく戦力に乏しい同組織が、戦力の穴埋めのために用意した急造品といえる。それなりの数が作られたらしく、新作『ガンダムUC』でも登場している。案外、ジオン軍の人々は物持ちが良いようである。

シールド&
ビーム・サーベル

バルカン砲



→ [機動戦士ガンダム 第08MS小队 / 86年]



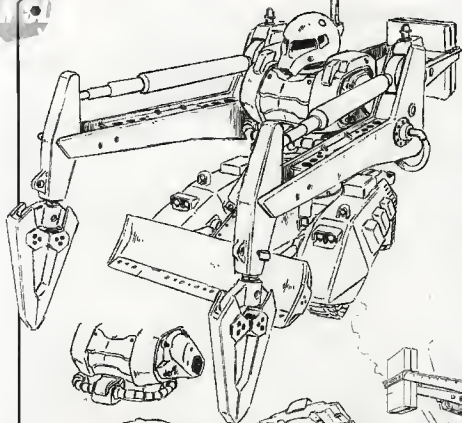
足裏

ヒート・ホーク
のラック

MS-06R-4D

高機動試作型ザク

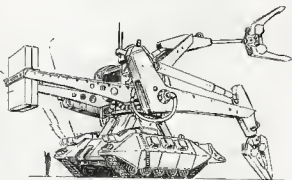
ドムを下半身を取り付けたテスト機で、シルエットはMS-06Zを彷彿とさせる。アプサラス計画のデータ採集に使われた。劇中では、アイナ・サハリンとシロー・アマダが運命的な出会いをする、きっかけを作った機体でもある。



MS-06V

ザクタンク

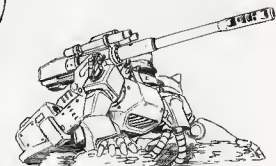
第5話「破られた待機命令」で、ジオン軍に捕らえられてしまったエレドアとミケルが脱走するために搭乗した機体。ボディにはザクIが丸々使用されているが、ザクタンクと同じ型式番号である。これらの現地改修機は制式採用機ではないため、型式番号は便宜的につけられることも珍しくない。対比用に描かれた人のシルエットから、その巨大さがわかる。



MS-05

ザクI

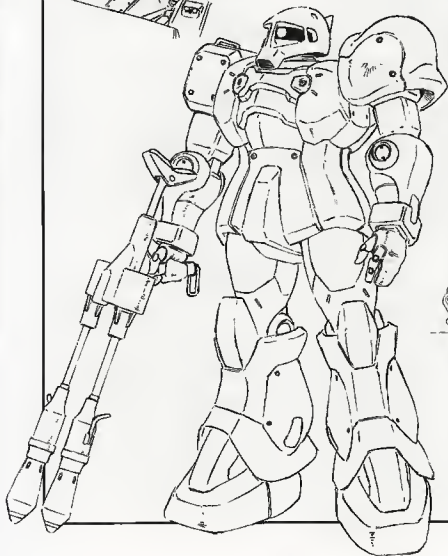
第7話「再会」に登場するガス弾を撃つ旧ザク。ガス弾銃は2連装で指ぬきグロップをしているのが特徴。後に登場する旧ザク（トップ機）とは異なり、こちらは宇宙用の機体。

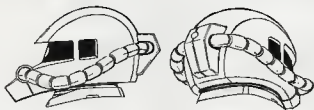


MS-06K

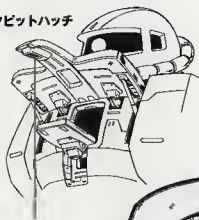
ザクキャノン

第3話「信頼までの限界時間」で、聖域に入った状態で砲撃をするザクキャノン。肩部にスモークディスチャージャー、背部には砲弾の装填装置を備えている。おそらく、下半身が壊れたなどの理由で、トーチカのように使用されたのだろう。劇中でも、ほんの僅かなカットしか登場しないレアな機体。



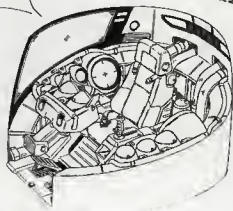


コクピットハッチ



コクピット

※ハッチの展開方法やコクピットのレイアウトもザクⅡとは異なっている。円形のパネルが多いなど独自色が強いものになっている。

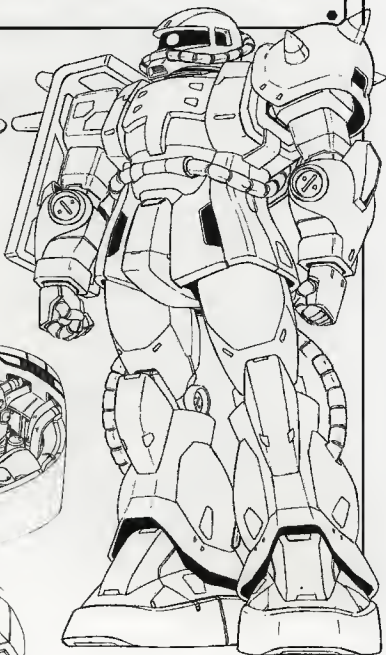
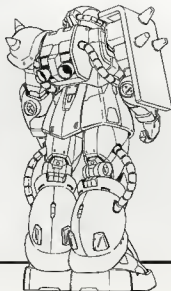
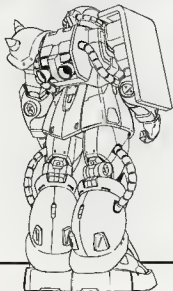


手



足裏

後面 (スパイクあり&スパイクなし)

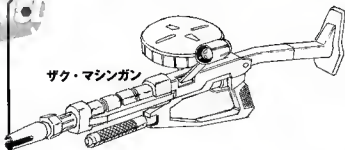


MS-06JC

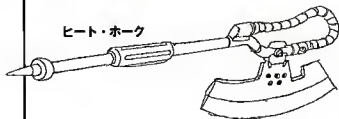
陸戦型ザクⅡ

地上用のザクⅡJ型をベースに改修が施された陸戦型。胸部中央にコクピットが位置しているのが特徴。乗降時は胸部装甲が上へ展開して、乗降用クレーンになる。主に東南アジア戦線に投入された。OVA「08小隊」の物語は、シローとアイナを中心に展開しているため、ザクの活躍する場面は少ない。だが、それでもノリスの乗るザクがシローと水中戦を演じて見せたり、トップ小隊のやられっぷりなど、しっかり脇を固め見どころを作っている。

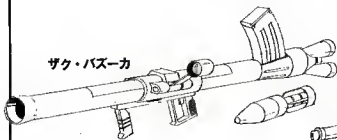
ザク・マシンガン



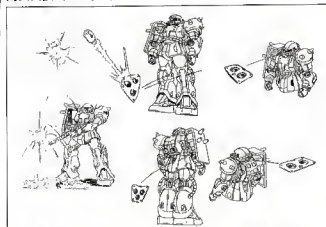
ヒート・ホーク



ザク・バズーカ

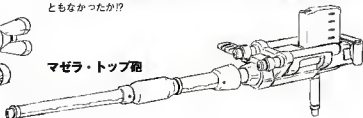


対人兵装 (Sマイン)

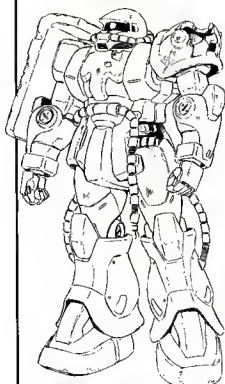


↑肩、膝、膝の各所には対人用の兵器を備えている。撃ち出された弾は爆発すると無数の鉄球をバラ撒く。任意で爆発できる指向性地雷といったところ。これもガンダムに付いていたら、ワツバの襲撃に苦勞することもなかったか??

マゼラ・トップ砲



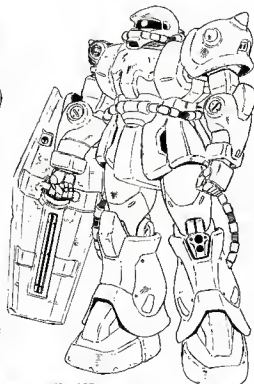
トップ小隊のザク



MS-06JC

陸戦型ザクIIデル機

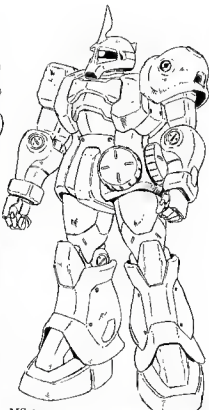
左肩のスパイクシールドが割れ、フロントアーマーの一部と動力パイプが外れてしまっているデル機。トップと同じく悪人ではなかった(恐らく子供好き)のだが、小隊諸共全滅してしまった。



MS-06JC

陸戦型ザクIIアス機

右肩のシールドや装甲がなく、膝アーマーもフレームが剥き出しになっているアス機。急ごしらえで現地調達したであろう連邦軍のシールドが特徴。彼の軽率な行動がゲリラとの戦端を開くことになった。



MS-05

ザクI (重力下仕様・トップ機)

隊長機を示すブレードアンテナが付いている。オデッサから逃げてきた小隊を率いているトップ自体は悪人ではなかったが、結果的にゲリラたちと戦闘になってしまった。第8話「軍務と理想」に登場。

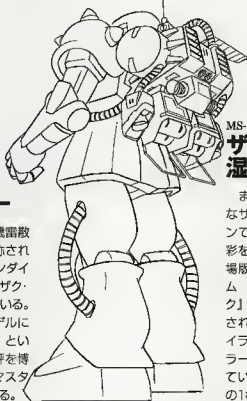




MS-06F

ザク・ マインレイヤー

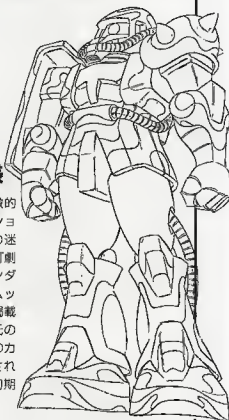
登場当初は「ザクⅡ機雷散布ボッド搭載型」と呼称されていたが、後に84年バンダイから製品化される際にはザク・マインレイヤーとなっている。当時発売されたプラモデルにおいて「ザクの決定版」といわれることもあり、好評を博した。08年にはMG（マスターグレード）化されている。



MS-06J

ザクⅡ 湿地戦仕様

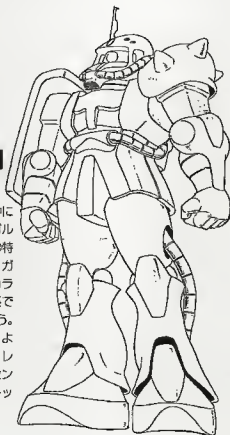
まだら模様が特徴的なザクのバリエーションで、湿地戦仕様の迷彩を施された機体。「劇場版 機動戦士ガンダム アニメグラフィック」（講談社刊）に掲載された大河原邦男氏のイラストでは、6色のカラーを用いて再現されている。MSVの最初期の1機といえる。



MS-06FS

ガルマ専用 ザク

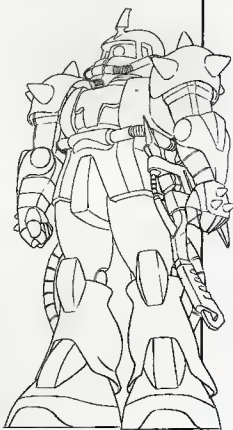
ドズル同様、劇中には登場しなかったガルマの専用機。最大の特徴は頭部の機関砲。ガルマのパーソナルカラーであるブラウン系で塗装されていたという。02年にはバンダイよりHGUC（ハイグレードユニバーサルセンチュリー）でプラキット化されている。

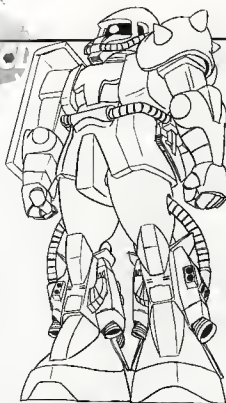


MS-06F

ドズル専用 ザク

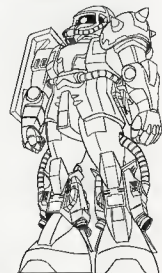
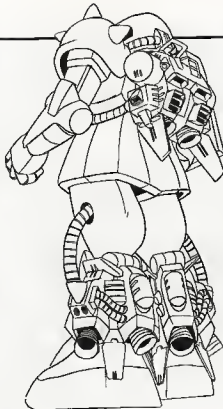
ドズル・ザビの専用機で、腰の大型ヒートホークが特徴。MSVの法則の1つに「専用機」というのがある。「ガンダム」におけるシャアの影響の表れといえるが、もちろん、このドズル専用機は、劇中に登場したことがない。こうした設定も許容してしまうのが「ガンダム」の奥深さかもしれない。





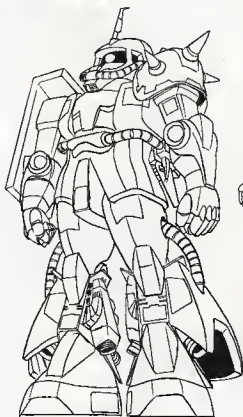
MS-06R-1A

高機動型ザク



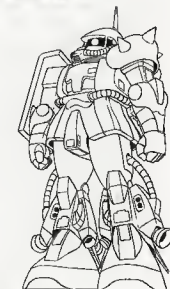
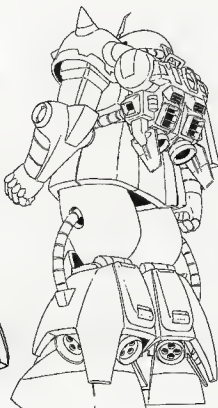
MS-06R-1

高機動型ザクⅡ



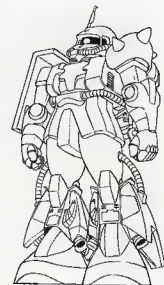
MS-06R-2

高機動型ザク



MS-06RP

高機動型ザク プロトタイプ



MS-06R-2P

高機動型ザク

『ガンダム』に登場した黒い三連星がドムに乗る前の乗機だったとされる、ザクの高機動型。これ以外にも「白狼」ことシン・マツナガ、「赤い稲妻」ジョニー・ライデンなど、多くのエースパイロットが搭乗していた機体である。MSVシリーズの中核をなし、多くのファンを獲得した存在といえる。MSVの設定画は、大河原邦男氏だけでなく、ガンブラのボックスアートでも知られる増尾隆幸氏、ストリームベースの小田雅弘氏の手によって描かれている。





→ [

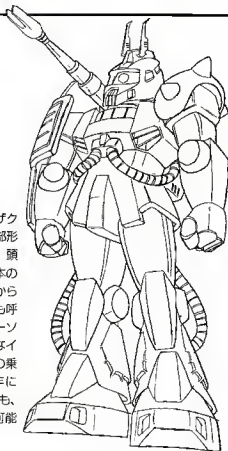
MSV、その他

]

MS-06K

ザク キャノン

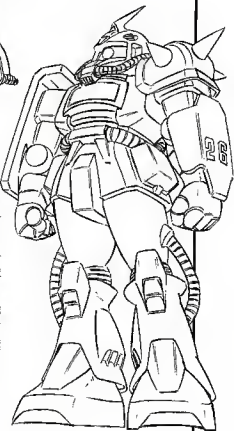
『Z』に登場したザクキャノンとは、頭部形状が異なるタイプ。頭部に装備された2本のブレードアンテナからラビットタイプとも呼ばれる。蜘蛛のパーソナルマークで有名なイアン・グレーデンの乗機でもある。08年に発売されたMGでも、このタイプが再現可能である。



MS-06D

ザク・ デザートタイプ

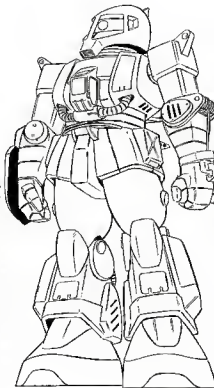
ザクの砂漠戦仕様。頭部のダブル・アンテナが特徴的なタイプは、ジオン公国軍の精鋭外人部隊「カラカル」隊に所属するロイ・グリンウッド少佐などの機体で知られている。ちなみに部隊章は四ツ葉のクローバーだ。別名「砂漠戦用ザク」ともいわれる最初期のMSVである。



MS-06W

作業用 ザク

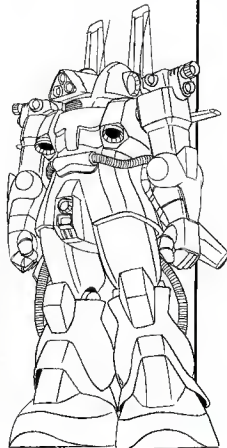
ザクタンク同様に現地で改修が行われたザクの派生機。いくつかのバリエーションがあるとされ、機体の仕様は作業用途によって異なる。こうした現地で改造された機体には型式番号がない。そのため、現場での機体整理の要目から付けられた型式がVである。

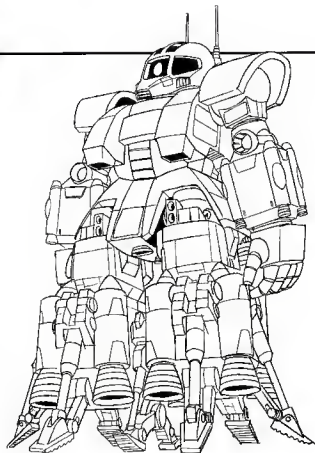


MS-06E-3

ザク フリッパー

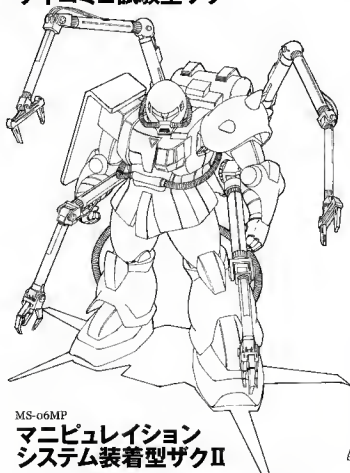
MS-06E ザク強行偵察型の発展型。特徴的な頭部3連カメラ以外に、背部には各種の探知・探査能力を付加した大型のランドセルを装備している。元となったザク強行偵察型は『Z』にゲストメカとして登場しているが、本機は出ることがなかった。





MS-06Z

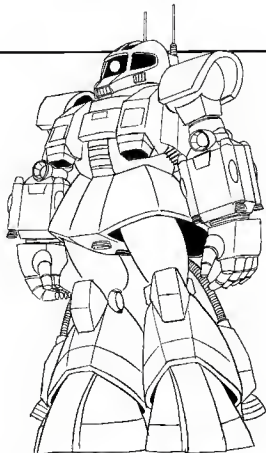
サイコミュ試験型ザク



MS-06MP

マニピュレーションシステム装着型ザクⅡ

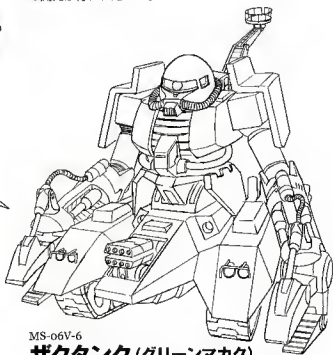
不明点が多い機体だが、ザクに作業機器を装着したタイプ。2名の乗員からなり、マニピュレーターなどの操作は左胸の操作ボックスで行う。その初出はバンダイより刊行されていた雑誌「B-CLUB」に掲載されたもので、ソーラ・レイの改造作業に投入された機体という設定で描かれている。



MSN-01

サイコミュ試験型高機動ザク

ニュータイプ専用機であるブラウ・ブロやエルメスの実戦配備に成功したジオン公国軍が、モビルスーツサイズでサイコミュの搭載を実現しようとして開発した機体。それぞれザクと呼ばれているが、頭部のモノアイなどにその名残があるだけで、別の機体といえる。MS-06Zの内1機を改修してMSN-01がつけられた。機体の制御などにもサイコミュが用いられ、これらのデータをもとにMSN-02ジオングの開発が行われたという。

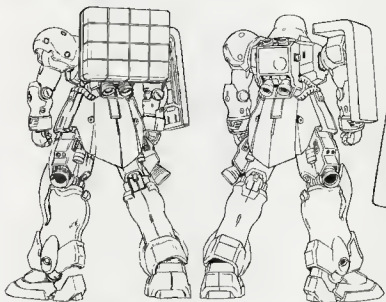


MS-06V-6

ザクタンク (グリーンマカク)

森林伐採用として腕部に専用のクローを装備しているザクタンクのバージョン違い。



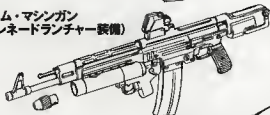


↑武器コンテナ装着状態。コンテナは手に持つことも可能。

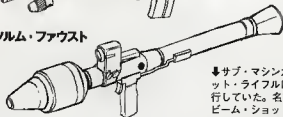
ビーム・マシンガン



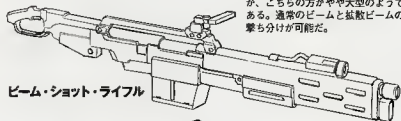
ビーム・マシンガン
(グレネードランチャー装備)



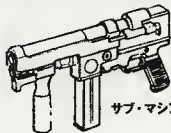
シュツルム・ファウスト



↓サブ・マシンガンとビーム・ショット・ライフルはアンジェロ機が横行していた。名前とその外観から、ビーム・ショット・ライフルは、サザビーと同系列のものと考えられるが、こちらの方がやや大型のようである。通常のビームと拡散ビームの撃ち分けが可能だ。



ビーム・ショット・ライフル

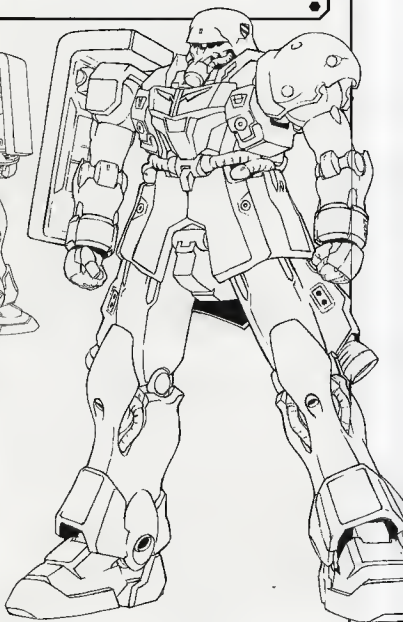
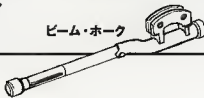


サブ・マシンガン

ハンド・グレネード



ビーム・ホーク



AMS-129

ギラ・ズール

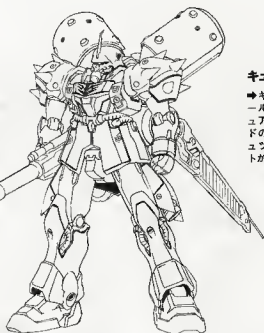
新生ネオ・ジオンの残党である『袖付き』の主力モビルスーツ。実質的なギラ・ドーガの後継機だが、それほど数は多くない。『袖付き』の台所事情が芳しくないことがその要因といえるだろう。ゆえに、この機体は、親衛隊やベテランパイロットに向けて、優先的に配備されているのが現状である。かつてのザクと比べると、いささか高級感が漂う重産機といえるだろう。ただし、劇中におけるバリエーションの数は負けていない。

また、装備や一部の武装などは、前身であるギラ・ドーガと共有が可能である。

ギラ・ズールバリエーション

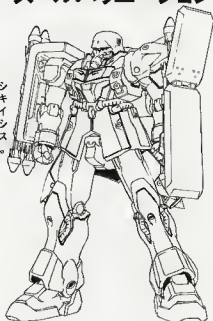
アンジェロ機

⇒こちらのアンジェロ機は「UC」2話「赤い彗星」より、フル・フロントル保護のため、ランゲ・ブルーノ砲を装備していた状態。



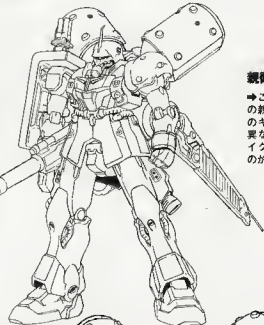
キュアロン機

⇒ギラ・ドーガのシールドを携行するキュアロン機。両サイドのシールドにはシェンフルム・ファウストが満載されている。



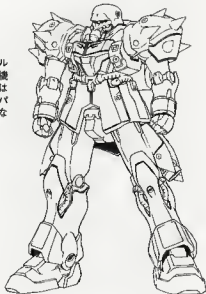
ギルボア機

⇒ガランシェール隊のギルボアが駆る機体。ランゲ・ブルーノ砲以外に右肩シールドにビーム・ガトリングを装備。



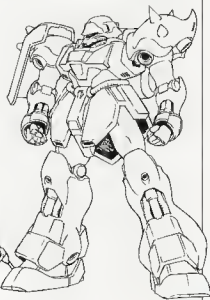
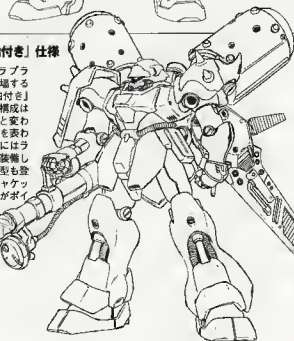
観戦隊機

⇒こちらはノーマルの観戦隊機。一般機のギラ・ズールとは異なり、両肩がスパイクシールド仕様のものが特徴である。



ギラ・ドーガ「袖付き」仕様

⇒「UC」第3話「ラプラスの亡霊」にて、登場するギラ・ドーガの「袖付き」仕様。基本的な機体構成は「逆シャア」のものと変わらないが、組織の名を变わず袖飾りが特徴。中にはランゲ・ブルーノ砲を装備したギラ・ドーガ重裝型も登場する。サーマルシャケットに覆われている布がポイントである。



装甲材質	武装	※全重量/ 出力	※全重量/ 推力	備考
超硬スチール合金	ヒート・ホーク、ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、他	72.3	1.59	-
超硬スチール合金	ヒート・ホーク、ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、他	76.3	1.72	-
超硬スチール合金	ヒート・ホーク、専用ザク・マシンガン、ザク・バズーカ	110.2	1.45	-
チタン・セラミック複合材	ヒート・ホーク、MMP-80マシンガン、シュバルム・ファウスト、他	76.3	0.93	-
超硬スチール合金	ヒート・ホーク、ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、他	76.3	1.64	-
超硬スチール合金	ヒート・ホーク、ザク・マシンガン	77.8	1.46	-
超硬スチール合金	シールド、ヒート・ホーク、ザク・マシンガン、ザク・バズーカ	-	-	-
超硬スチール合金	シールド、ヒート・ホーク、ザク・マシンガン、ジャイアント・バズ	-	-	-
超硬スチール合金	180mmキャノン、ビッグガン、他	85.2	2.03	後に機動戦士Zガンダムにも登場。
超硬スチール合金	ヒート・ホーク、改造ザク・マシンガン、クラッカー・ボッド、他	-	-	-
超硬スチール合金	サブロケット・ガン、240mm4連装ロケット・ボッド	-	-	後に機動戦士Zガンダムにも登場。名称はマリン・ハイザック。
超硬スチール合金	カメラ・ガン、シールド	-	-	後に機動戦士Zガンダムにも登場。
-	-	-	-	-
-	-	-	-	後に機動戦士Zガンダムにも登場。
-	-	-	-	-
-	胸部有線誘導5連装メガ粒子砲×2	-	-	-
-	胸部有線誘導5連装メガ粒子砲×2	-	-	-
-	ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、他	-	-	ベズン計画の1機。後に機動戦士Zガンダムにも登場。
超硬スチール合金	ヒート・ホーク、ザク・マシンガン、MMP-80マシンガン、シュバルム・ファウスト、他	71.8	1.33	-
超硬スチール合金	ビーム・サーベル、40mmバルカン砲、シールド	80.5	0.42	-
チタン合金 セラミック複合材	ビーム・サーベル、ヒート・ホーク、ザク・マシンガン、他	41.7	0.92	初期型はビーム兵器の運用は不可。
チタン合金セラミック 複合材+ガンダリウム合金	ビーム・サーベル、ビーム・ランチャー	41.0	0.82	-
チタン合金 セラミック複合材	(状況に応じて機密兵器使用可能)	51.4	1.13	-
チタン合金、一部 ガンダリウム合金	マグネット・ハーケン、サブロケット・ガン、ミサイル×6	47.4	7.76	-
超高張力鋼 (超硬スチール合金)	ヒート・トマホーク、ザク・マシンガン、ロケット弾ランチャー、他	48.3	8.27	-
ガンダリウム・ コンポジット	ビーム・サーベル×2、ビーム砲、ビーム・ライフル、他	31.8	0.4	-
ガンダリウム・ コンポジット	30mmバルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、 ハイド・ボンブ投下機、他	25	0.34	ニュータイプ専用機
チタン合金 セラミック複合材	ビーム・ソード、アックス、ビーム・マシンガン、他	23.5	0.94	-
チタン合金 セラミック複合材	ビーム・ホーク、ビーム・マシンガン、ハンド・グレネード、他	22.3	0.89	-
チタン合金 セラミック複合材	ビーム・ホーク、ビーム・マシンガン、ランゲ・ブルーノ砲、他	-	-	-
チタン合金 セラミック複合材	ビーム・ホーク、ビーム・マシンガン、ハンド・グレネード、他	-	-	-



ザク系スペック一覧

	型式番号	頭頂高／全高 (m)	本体重量 (t)	全備重量 (t)	ジェネレーター出力 (kW)	スラスタースタ推力 (kg)	センサー有効半径 (m)
ザクI	MS-05	17.5	50.3	65.0	899	40,700	2,900
ザクII	MS-06	17.5	56.2	74.5	976	43,300	3,200
シャア専用ザク	MS-06S	17.5	56.2	74.5	976	43,300	3,200
ザク改	MS-06FZ	17.5	56.2	74.5	976	79,500	3,200
陸戦型ザクII	MS-06JC	17.5	56.2	74.5	976	45,400	3,200
ザク高機動試作ザク	MS-06RD-4	17.5	60.3	77.5	986	53,000	3,200
高機動型ザクII	MS-06R-1A	17.5	56.8	-	1,012	49,800	3,200
高機動型ザク後期型	MS-06R-2	18	58.2	-	1,340	60,000	5,600
ザクキャノン	MS-06K	17.7	59.1	-	976	41,000	-
ザク・デザートタイプ	MS-06D	18.5	48.8	-	976	42,900	-
ザク・マリンタイプ	MS-06M	17.5	43.3	-	951	66,000	-
ザク強行偵察型	MS-06E	17.5	60.4	-	-	-	-
ザク・フリッパー	MS-06E-3	16.7	61.5	-	-	-	-
ザクタンク	MS-06V	14.7	53.6	-	-	-	-
一般作業用ザク	MS-06W	17.7	51.8	-	-	-	-
サイコミュ試験型ザク	MS-06Z	17.7	60.4	-	899	388,000	-
サイコミュ高機動試験型ザク	MSN-01	17.2	65.4	-	1,440	68,400	3,600
アクト・ザク	MS-11	18.2	59.1	-	-	-	-
ザクII F2型	MS-06F-2	17.5	49.9	70.3	986	53,400	3,200
ドラッツェ	MS-21C	29.8	23.9	49.0	596	117,500	10,900
ハイザック	RMS-106	18.0	38.7	59.6	1,428	64,800	8,900
ハイザック・カスタム	RMS-106CS	18.0	35.6	-	1,480	74,000	8,900
アイザック	RMS-119	18.3	41.6	73.5	1,430	64,800	26,000
ザク・マリナー	RMS-192M	17.5	48.8	68.3	1,440	8,800	4,600
デザート・ザク	MS-06D	18.5	44.7	69.5	1,440	8,400	8,800
ザクIII	AMX-011	21.0	44.2	68.3	2,150	172,600	9,700
ザクIII改	AMX-011S	21.0	44.3	71.4	2,860	211,500	9,700
ギラ・ドーガ	AMS-119	20.0	23.0	50.8	2,160	54,000	16.40
ギラ・ズール	AMS-129	20.0	21.8	55.2	2,470	62,100	18.20
ギラ・ズール (アンジロ・ザウバー専用機)	AMS-129	20.0	27.3	-	-	-	-
ギラ・ズール (観音降機)	AMS-129	20.0	22.3	-	-	-	-

※全備重量／出力は1Kwあたりの重量 (kg)。あくまで目安だが、値が低い方が実質的なパワーがある。
全備重量／出力は推力1kgあたりの重量。こちらは値が低いほど強い。





編集

オフィスLB
飯田幸夫
兼村保行
橋本あゆみ

執筆

河合宏之
星★馨介
市ヶ谷ハジメ
矢吹明紀
南波健一郎
宮永忠将
やすゆきゆたか
木村尚久

表紙イラスト

森下直親

本文イラスト

森下直親
松縁裕

デジラマ

Robographer

Art Director

岡本浩樹
(I'll Products)

Designer

園田 晋
藤居雪子
財前和歌子
(I'll Products)

スーパーバイザー

山崎努

本文写真

斉藤武司

協力

株式会社サンライズ

双葉社MOOK
グレートメカニック・スペシャル
モビルスーツ全集③

MS-06 ザクBOOK

2011年5月31日発行

編集人 二之宮隆
発行人 赤坂了生
発行所 株式会社双葉社

〒162-8540
東京都新宿区東五軒町3-28
営業 ☎03-5261-4818
編集 ☎03-5261-4869

<http://www.futabasha.co.jp/>
(双葉社の書籍・コミック・ムックが買えます)

印刷所 三晃印刷株式会社
製本所 株式会社若林製本工場

※ 茅丁・乱丁の場合は送料双葉社負担でお取り替えいたします。「製作部」までにお送りください。ただし、古書店で購入したものに 대해서는 お取り替えできません。
☎03-5261-4822 (製作部)

※ 本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製・転載は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

※ 定価はカバーに表示してあります。

© 創造・サンライズ
© FUTABASHA 2011 Printed in Japan

ISBN978-4-575-45458-0 C9476



双葉社 MOOK

**GREAT
MECHANICS**
フルードとメカニクス
のメカニクス

モビルスーツ
全集③
MS-06
ザク
BOOK

MS-06

ザクBOOK





©創造・サンライズ

定価：本体1400円＋税

雑誌63982-35

Printed in Japan ©Futabasha 2011

ISBN978-4-575-46458-0
C9476 ¥1400E



9784575464580



1929476014009

クレーン・カー・トラック・ショール モビルスーツ全集③ MS・06 ザク BOOK 双葉社